青年の膚は柔かく爽かで、金屬の糸のやうに鳴る。それに、多くの女は青年や偉さうな顔や波蘭踊(マズトルカ)の上手や馬乘の上手などを愛しない……オリガが輕薄な女でないことはよく分つてゐる。輕薄な女の心臟は、口髭でどき〳〵させることが出來る。輕薄な女の耳はサーベルの音に慄へる。が、まだ他に必要なものがあるではないか……それは智慧の力だ。例へば、女は順(おとな)溫しく此の智慧の前に頭を垂れなければならぬ。世間も此の智慧に伏拜しなければならぬ……或は評判の俳優でも良い……が、俺は何だ？　オブローモフだ——たつたそれだけだ。あのシトーリツは俺と違ふ男だ。シトーリツには智慧がある、力がある、自分と他人と運命とを支配する才能を有つてゐる。何處に行かうが、誰と交際しようが、まるで樂器を使ふやうに巧みに應對して行く……が、俺は？……ザハール一人さへ使へない……自分ならもとよりだ……俺はオブローモフだ！

シトーリツ！　あゝ！——彼女はシトーリツを愛してゐるんぢやないか。)と、オブローモフは考へて吃驚した。(彼女は自分の口から友として彼を愛してゐると言つた。が、それは嘘だ、多分無意識に言つた嘘だらう……男と女との間に、友情と云ふものはない筈だ……)

オブローモフは疑惑に捉はれて、靜かに靜かに歩いてゐた。

(だが、オリガが俺に媚びるのは、どう云ふ譯だらう？……若しもたゞ……)

オブローモフは立ち停つて、暫く茫然(ぼんやり)としてゐた。

(之れが若し狡猾な計略(たくらみ)であつたら……俺はどんな根據から彼女が俺を愛してゐるなんて考へたのだらう？彼女は何とも言やしたかつた。これは自惚から來る惡魔の囁きだ！　アンドレイかな！　まさか……そんなことはあるまい。彼女はそんな女ぢやない……そら、彼の女が！)オブローモフは彼の方へ向つて來たオリガを見て、突然嬉しさうに斯う言つた。

オリガは樂しさうな微笑を浮べながらオブローモフに手を出した。

(いや、此の女はそんな女ぢやない。瞞すやうな女ぢやない)と、オブローモフは決めた。(瞞す女は、こんな愛嬌のある眼附で見やしない。瞞す女には、こんな誠實な笑顔はありやしない……瞞す女は、皆なたゞべちや〳〵と饒舌るだけだ……が、此の女は、俺を愛するとは言はなかつた！)彼は再(また)た俄かに斯う考へて吃驚したが、更にその驚きを打ち消して(だが、あの懊惱は何故だらう？……あゝ！　俺は深淵に陷つたのだ！)

「あなた何を持つてゐらつしやるの！」と、オリガは訊いた。

「枝です。」

「何の枝？」

「御覽の通り、ライラックの枝です。」

「何處から持つていらしたの？　此處にライラックは無いぢやありませんか。何處を歩いていらしたの？」

「これは、あなたが先刻折つてお捨てになつたのです。」

「何故それをお拾ひなすつて？」

「あなたが……悲しさうに此の枝を捨てたのが氣に入つたからです。」

「悲しみが氣に入る——これは珍しいわ！　何故？」

『言ひますまい。」
「聞かして頂戴、どうかお願ひですから……」
「何と言はれても、どんな事があつても言ひません。」
「お願ひですから。」
オブローモフは頭を横に振つた。
「ぢや、私が若し歌を唄つたら？」
「其の時は……或は……」
「ほんとにあなたは音樂に感動なさるのね？」と、オリガは眉に皺を寄せながら言つた。「本當なの？」
「本當ですとも、あなたの口から出る歌は……」
「ぢや、私、歌ひますわ…… Casta diva, Casta di ……」と、オリガは響きのある聲でノールマの調子を唄ひ出したが、それつきり止めた。
「さア、もう良いでせう。聞かせて頂戴！」と、オリガは言つた。
オブローモフは暫く思ひ惑つてゐた。
「厭です、厭です！」と、彼は以前よりも堅い決心を示しながら言つた。「どんな事があつても……決して言ひません！ 若しもそれが間違つてゐて、たゞ私にさう見えたゞけであつたらどうします？……決して言ひません、決して言ひません！」

「どんな事なの？ 何か怖い事なの？」と、オリガは考へを此の問題に向け、燃えるやうな眼をオブローモフに向けて言つた。
やがて、オリガの顔は次第に意識に滿されて來た。顔の輪郭には、到る處に思案と推察との光が輝き出した。と、突然に彼女の顔全體は意識に輝いた。……太陽も矢張りどうかすると雲から出て、彼方の灌木、此方の灌木、此處の屋根と云ふ具合に少しづゝ照してゐるうちに、突然其の光を景色の全面に注ぐことがある。
オリガはもうオブローモフの考へを見拔いたのである。
「いや、さうぢやありません。私の舌はうまく廻らないので……」と、オブローモフは言つた。「だから聞かずに置いて下さい。」
「私はお尋ねしてるんぢやないわ。」と、オリガは冷靜に答へた。
「何故です？ 今、あなたは……」
「家へまゐりませう」とオブローモフの言ふことを聞かずにオリガは眞面目な顔をして言つた。「(ma tante 叔母)が待つてますから。」
オリガは先に歩いて行つた。そしてオブローモフを叔母の傍へ殘して置いて、直ぐに自分の室へ入つた。

八

此の日は、オブローモフに取つて、次第に幻滅して行くやうな日であつた。彼はオリガの叔母の許で此の

日を送つた。オリガの叔母と云ふのは、非常に悧巧で、禮儀正しく、何時も綺麗な新しい絹の衣服を着てゐた。此の衣服は、よく此の女に似合つてゐた。それから、彼女は何時も華美なレースの襟を附けてゐた。頭巾も矢張り趣味に適ふやうに作つたもので、平紐などは、殆んど五十歳にもならうと云ふ年配ではあるが、まだ何處となく晴々しい此の女の顏に、一種の魅力を添へてゐた。頸には金緣の眼鏡が懸つてゐた。

彼女の姿態や身振りにも、威嚴が備はつてゐた。彼女は高價い絹の襟卷で巧妙に美飾してゐた。彼女は一寸した時にも、刺繍をしたクッションに肱を突いたり、勿體らしく長椅子の上に體を伸したりした。彼女が仕事をしてゐるのを見た者はなかつた。屈んだり、縫つたり、詰らない仕事をしたりするのは、彼女の顏と勿體らしい姿態とに釣合はないのである。彼女は召使や女中に用事を言ひ附けるにも、短かくあつさりと打ち解けた語調で言つた。

彼女は滅多に書物を讀むことがなかつた。何か書くやうなことは決してなかつた。が、よく饒舌つた。それも多くは佛蘭西語であつた。けれども、彼女はオブローモフが餘り自由に佛蘭西語を使へないことを知ると、其の次の日から露西亞語で饒舌るやうになつた。

彼女は話をしても、空想染みたことや悧巧振つたことを言はなかつた。彼女の頭には、嚴重に線が引かれてゐて、どんな場合にも彼女の智慧は、此の線の外に出なかつたやうに思はれる。種々な事によつて推察するに、感情と凡ゆる共鳴と愛とは、他の要素と同等に彼女の生活の中に入りつゝあることも、或は入つてゐることも明らかであつた。これが若し他の女達ならば、假令事實でなく、たゞ言葉の上だけでも、愛を人生の凡ゆる問題に關係させ、他のものを、愛とかけ離れて居れば居るだけ、脇の方へ押し遣つて了ふのである。

此の女は、何よりも先に生活の方法と自分を指導する事とそれから思想と計畫、計畫と實行とを平均させて置く事とを考へてゐた。彼女は油斷してゐることがなかつた。彼女は丁度油斷のない敵のやうに、何時まで見戍つてゐても、何時も其の眼を我々に向けてゐて、何事かを期待してゐた。

彼女の對照は、世間であつた。だから調子と警戒とを凡ゆる思想や凡ゆる言葉や凡ゆる行動よりも尊んでゐた。

彼女は誰にも決して自分の心臟の祕密な鼓動を打ち開けもしなければ、誰にも精神の祕密を訴へもしなかつた。彼女の傍には、珈琲を飲みながらお互に內密話をし合ふやうな信用の置ける友達や婆さん達はゐなかつた。たゞ彼女が男爵フォン・ラングワーゲンと一緒にゐることは度々あつた。どうかすると、彼が夜中までも話し込んでゐることもあつた。が、さういふ時には、大概オリガが彼等二人の傍にゐた。二人は多く默つてゐた。が、それも何か意味あり氣に、悧巧さうに、そして他の人達が知らないことを知つてゐると言つたやうな默り方であつた。

どうもあの二人は一緒にゐることを好んでゐるらしい——これは、彼等を見た者が言ひ得る唯一の結論であつた。彼女は男爵に對しても、矢張り他の人に對するやうに、丁寧に、親密に、同時に冷靜に、落着いて應對してゐた。

之が爲めに種々な惡口も言ひ振らされ、二人の間は古い仲で、二人で外國旅行をしたこともあるなどと富

て擦る者もあつた。けれども、男爵に對する彼女の態度には、縝かな特別な同情らしいものゝ影さへ見ることは出來なかつた。これも次第に表面に現はれることだらう。

けれども、男爵はオリガの餘り大きくない所有地の後見人であつた。オリガの其の所有地は、或る負債の抵當に入つてゐた。

男爵は一種の順序を設けてゐた。つまり彼は一人の役人に書類を書かせ、眼鏡をかけて其の書類を讀み、それに署名して、役人にそれを裁判所に持つて行かせるのであつた。彼は世間に於ける種々な連絡で此の順序を滯りなく進行させてゐた。彼は物事を速く幸福に片附ける人だと皆なに思はれてゐた。此の信用が男爵の惡評を斷つもので、人々は男爵を親戚のやうに自分の家へ迎へてゐた。

男爵は殆んど五十に手の達かうと云ふ人であつたが、まだ非常に若々しかつた。彼はたゞ口髭の手入ればかりしてゐた。そして少し一方の足を跛こひいてゐた。彼はきざだと思はれるほど慇懃であつた。彼は決して夫人達の前で煙草を喫まなかつた。一方の足を他の足の上に載せもしなかつた。そして人仲で勝手に安樂椅子に仰臥して膝や靴を鼻のあたりまでも持ち上げるやうな若い連中を八ヶ間敷く叱り飛ばしてゐた。それから、男爵は室の中でも手袋をはめてゐた。そしてたゞ食卓に就いた時に、それを脱ぐだけであつた。

彼は最近流行の衣服を着、燕尾服の襟飾りに澤山の平紐を附けてゐた。彼は何時も箱馬車で外出し、非常に馬を大事にしてゐた。馬車に乘る時にも、彼は先づ馬車の周圍を見廻り、馬具はもとより馬の蹄さへも調べ、どうかすると白い手巾を取り出して、馬の肩や鬣を拭いて、綺麗に馬の手入れが出來てゐるかどうかを調べて見ることさへあつた。

彼は知人を迎へる時には、丁寧に慇懃な微笑を浮べ、全く知らない人を迎へる時には——最初は冷淡であつても、其の人が男爵に紹介されて了ふと、其の冷淡は矢張り微笑に變り、紹介された者は、其後何時行つても其の微笑で迎へられた。

彼は種々なことに就いて、例へば、善行や物價騰貴問題や科學や世間などに就いて、同樣に明らかな判斷を有つてゐた。そして或る學校の爲めに書かれ、社會指導の爲めに世に發行された文章のやうにはつきりした規則正しい文句でその意見を言ひ現はすのであつた。

オリガと叔母との關係は、其の時まで非常に單純で平和であつた。彼等が適度を超えた優しさに陷るやうなことは、決してなかつた。かと言つて、彼等の間に不滿の影が横たはつたことも今迄になかつた。

これは、一つはオリガの叔母なるマリヤ・ミハイローウナの性格に基くものであり、も一つは、二人に取つて態度を變へなければならぬやうな動機が少しも無かつたことに基くものであつた。叔母の頭には、オリガの希望に全然反することを彼女に求めようと云ふやうな考へは、露ほども浮ばなかつた。オリガもまた、叔母の希望を實行しまいとか、叔母の勸告に從ふまいなどゝ云ふやうな考へを、夢にも有つたことがなかつた。

其の希望と云ふと、それは衣服の選擇や、頭髮の結ひ方や、佛蘭西劇場へ行かうか、それとも歌劇へ行かうかと云つたやうなことの選擇に現はれるものであつた。

オリガは叔母から希望されたゞけ、若くは勸められたゞけを聞いて、それ以外のことを決して聞かたかつた――が、叔母は何時も冷淡と思はれる程適度を保つて、つまり叔母の權利が許すだけの事を言つて、それ以上の事は言はなかつた。

此の二人の關係が、餘り色も香もないので、人々は叔母の性格が、オリガに縱順と特別な優しさとを有つてゐるのだらうかなどゝ解釋に苦しむ程であつた。

その代り、彼等が一緒に居る所を一眼見たゞけでも、彼等が叔母と姪で、母と娘でないことは直ぐに察しられた。

「私は商店へ行くが、お前何か要る物はないかえ？」と、叔母が訊く。

「さうね、叔母さん、私、藤色の衣服を換へたいのよ。」と、オリガは言つて、二人一緒に商店へ行くか、でなければ「でも、叔母さん、私、近頃行つたばかりですもの。」と、オリガが言ふ。

叔母はオリガの兩頰を二本の指で挾んで、彼女の額に接吻をする。オリガも叔母の手に接吻をする。そして一人の方は商店へ行き、一人の方は家に殘る。

「再たあの別莊を借りようかねえ？」と、叔母は訊くのでもなければ、また自分の考へを述べるのでもなく、たゞ自分で考へて見て何方とも決らないのだと云つた風に言ふ。

「さうね、彼處は良い處よ。」と、オリガは言ふ。

二人は其の別莊を借りる。

が、若しもオリガが、

「あゝ、叔母さん、あなたは此の林と砂原とに飽き飽きなさらなくつて？　何處か別な方面を捜した方がよかありませんか？」と言ふと、

「捜して見よう。」と、叔母は言ふ。「だが、オレーニカ（オリガの愛稱）劇場へ行かないかえ？」と、叔母は言ふ。今度の芝居は此間から評判が良いんだよ。」

「行きますわ。」と、オリガは答へる。が、其の答へには、叔母の氣に入りたいと云ふ忙しい希望もなければ、また從順の現はれもない。

どうかすると、彼女達は一寸した口論をすることがある。

「何ですね、これ、ma chère（私の姪よ）お前の顏に綠色の平紐が似合ふと思つてるのかい？」と、叔母は言ふ。

「薄黃色の平紐にするが良い。」

「でも、ma tante 私、もう六遍も薄黃色の平紐をかけたんですから、飽々したわ。」

「ぢや、Pensée になさい。」

「あれを、叔母さんはお好きなの？」

叔母は凝つと見詰めて、徐かに頭を振る。

「お前の好きなやうにするが良いさ。ma chère, 私がお前なら、「cuisse か薄黃色にするのだけれど。」

「厭ですよ、ma tante 私、これにするわ。」とオリガは優しく言つて、自分の好きな平紐を附ける。

オリガは叔母に相談を持ちかけても、權威者に相談するのだとは思はなかつた。權威者の命令は、オリガに取つて法律でなければならなかつたからである。で……、彼女は他の自分より經驗の多い女に相談をするのだと思つてゐた。

「にMa tante あなた、此の書物をお讀みなすつて――どんな書物なの？」と、オリガは訊く。

「本當に厭な書物だよ！」と、叔母は言つて書物を自分の方へ引き寄せる。が、書物を隱しもしなければ、オリガがそれを讀まないやうな方法をとりもしなかつた。

またオリガにも、其の書物を讀みたいと言ふ考へは、毛頭浮ばなかつた。が、若し其の書物をオリガが讀んで良いかどうか、二人に判斷が出來ない場合には、それを男爵フォン・ラングワーゲンか或はシトーリツがゐる時には彼に訊き、彼等の判斷に從つて讀むとも讀まないとも決めるのであつた。

「ねえ、ma chère、オリガ！」と、どうかすると叔母が言ふ。「ザヴアードスキイの許で、お前の傍に度々近寄つたあの若い人のことに就いてね、私に昨日妙な詰らない話をした者があるよ。」

叔母はたつたこれだけを言ふ。が、オリガは其の後もその男と話をしようが、しまいが自分の勝手であつた。

オブローモフがオリガの家に出入するやうになつた事は、叔母にも男爵にも、またシトーリツにさへも何等の問題をも、何等特別の注意をも喚び起さなかつた。シトーリツは自分の友を、周圍が整然としてゐて、眞後に眠る事が許されないばかりか、片足を片足の上に載せる事さへ許されない、そしてさつぱりした衣服

を着、口を利くにも一々注意しなければならぬやうな――一言で云へば、居眠ることも横になることも出來ず、絶えず生々した時事問題の話が交換されてゐるやうな、さう云ふ樣に紹介したかつたのである。

次に、シトーリツはオブローモフの眠つた生活の中へ、同情ある若い悧巧な生々した、そして幾らか皮肉な女を入れると云ふことを、眞暗い室の中へ洋燈を入れるのと同じことだと考へた。さうすると其の洋燈のお蔭で暗い隅々まで平らかな光が滿ち溢れ、室が幾らか溫かく、そして明るくもなる。

ところが、シトーリツが自分の友をオリガに紹介した結果は、豫想外であつた、シトーリツは自分の持ち込む物が、花火であらうとは、オリガとオブローモフが花火であらうとは、豫期しなかつた。

オブローモフは叔母と一緒に二時間も行儀よく腰掛けてゐた。彼は其の間、一度も足の上に足を載せず、何事を言ふにも立派に話をした。そして二度も叔母の足下に脚臺を持つて行つたりした。

男爵は遣つて來ると、丁寧に莞爾として、愛嬌よく彼の手を握つた。

オブローモフは益々行儀を良くした。三人はそれ以上に人を欲しいと思はずに、お互に滿足してゐた。

叔母は隅々の話聲とオブローモフとオリガの散歩とを見てゐた……いや、寧ろ何も見てゐないと言つた方が良いだらう。

若い人と、即ち紳士と散歩をすると云ふ事――これは別問題である。斯うした事なら、叔母は何とも言はずに、彼女に特有な機智で何とか氣附かれないやうに、他の方法をとるだらう。一度や二度なら自分で彼等と一緒に行き、三度目には誰か他の者を附けて遣るだらう。さうするうちに、自然と散歩は止めになる。

が、(オブローモフさん)と散歩をしたり、大廣間の隅や露臺に腰掛けたりしたからと云つて――それからどんな結果が生じよう? オブローモフは三十歳になつてゐる。オリガに下らない事を話したり、悪い書物を見せたりする氣づかひはない……が、こんな考へさへ誰の念頭にも浮ばなかつた。

のみならず、叔母はシトーリツが出發する前晩にオブローモフを居睡りさせないやうに、睡眠を禁じて彼を苦しめ、彼に命令し、彼に種々な事を頼むやうに――一言で云へば、オブローモフを監督するやうにと言つた事を聞いてゐた。そしてオブローモフを忘れないやうに、度々彼を呼び附けて、散歩や遠乘りに引摺り出し、彼が外國へ出かけるまで凡ゆる方法で彼を動かして貰ひたいと頼んでゐたのを聞いたのである。

オリガはオブローモフが叔母の傍に腰掛けてゐる間は姿を見せなかつた。時間は徐かに經過した。オブローモフは再た熟したり、冷却したりしなければならなかつた。今ではもうオブローモフはオリガの此の變化の原因を察してゐた。此の變化は彼にとつて、何故か以前の變化より一層心配であつた。

以前の失策の時には、彼はたゞ恐ろしくて恥かしいやうな氣がしたゞけであつたが、今度は心配で、落着いてゐられず、心がぞく〳〵して、丁度濕々した雨天のやうに何となくうら悲しかつた。彼はオリガの自分に對する愛を察したが、それは時機を逸してゐるかも知れないと云ふことを彼女に悟らせようとした。それは實際取り返しのつかない侮辱であつた。若し時機を逸したとすれば、實に拙いことであつた。彼はたゞ氣取家に過ぎなかつた。

彼は、自分の若々しい處女のやうな心臟の中で怪々と慄へてゐる感情を追ひ拂ふことが出來た。彼の感情は、丁度用心深く、そして身輕く樹の枝に棲つてゐる小鳥のやうに、一寸した音にもまたサラサラッと云ふ葉擦にも飛び去るのであつた。

オブローモフは息が詰るやうに慄へながら、オリガが晝餐に出て來て、自分に何をどう云ふ具合に話しかけ、どう云ふ具合に自分を見るかと待つてゐた。

オリガは出て來た。――彼はオリガを見ると身動きをすることも出來なかつた。彼はも少しでオリガを見違へる所であつた。オリガの顏は變つてゐた。聲さへも變つてゐた。

若々しい無邪氣な殆んど子供らしい笑は、一度も彼女の屑に現はれなかつた。また、彼女の眼に疑問か不審か單純な好奇心かが現はれても、彼女はもう何にも訊くことも知りたいことも驚くことも無いと云つたやうに、一度も眼を大きく見開かなかつた。

彼女の視線は前のやうにオブローモフに注がれなかつた。オリガはオブローモフを、餘程以前に知り合つて研究したことのある人であるかのやうに、終には男爵と同じく彼女に取つて何の關係もない者のやうに――一言で云へば、オブローモフはオリガを一年も見なかつたやうな氣がしてゐるのに、オリガは彼を一年も見てゐたと言つたやうに見た。

オリガには冷酷な點もなければ、また昨日のやうな悲しい樣子もなかつた。彼女は冗談を言つたり、笑つたり、以前なら答へもしまいと思はれるやうな問にくど〳〵と答へたりした。彼女は他の女達のすることで、彼女が今迄したことのなかつたことを、强ひてしようと決心してゐるらしかつた。彼女には、自分の頭に浮

んだ事を何でも皆な言つて了ふ自由と自然とがもう無かつた。突然に、何も彼も何處へ隱れたのだらう？

晝餐を濟すと、オブローモフはオリガの傍へ行つて、散歩に行かないかと訊ねた。オリガはオブローモフには答へずに、叔母の方へ向いて訊いた。

「(皆な)散歩にいらつしやらない？」

「遠くぢやないでせうねえ。」と、叔母は言つた。「私の洋傘を持つて來るやうに言ひ附けてお呉れ。」

皆な出かけた。皆な遠くペテルブルグの方を見ながら氣のない歩き方をしてゐたが、林まで行くと、直ぐ歸つて露臺へ出た。

「あなたは今日歌を唄ふやうな氣持ぢやないと見えますね？　それで、私はお願ひするのを遠慮してゐるのです。」と、オブローモフは此の要求が實行されやしないだらうかとか、此の要求がオリガを快活にしやしないだらうかとか、彼女の言葉や微笑や歌の中に誠實と無邪氣と確信との光が閃めきはしないだらうかと云ふやうな豫期を持ちながら訊いた。

「暑くつてねえ！」と、叔母は言つた。

「大丈夫よ、歌つて見ますわ。」と、オリガは言つて、ロマンスを歌つた。

オブローモフはこれを聞くと、自分の耳を信ずることが出來なかつた。

今歌つてゐるのはオリガではない。以前の情熱的な音聲は何處にある？

オリガは、處女達が人仲で歌を強ひられて、何の感動もなく歌ふやうに、あつさりと法則通りに歌つた。オリガは歌から自分の心を拔いてゐたので、聽いてゐる者の神經は、少しも感動しなかつた。

オリガは何か企らんでゐるのだらうか、裝うてゐるのだらうか、それとも怒つてゐるのだらうか？　全然察することが出來ない。彼女は愛嬌よく見もし、快活に饒舌つてもゐるが、其の饒舌り方は、矢張り今の歌と同じである。他の處女達の饒舌り方と同じである……どうしたのだらう？

オブローモフはお茶の出るのを待たずに、帽子を取つて挨拶をした。

「また度々入らして下さい。」と、叔母は言つた。「平日は何時も私共ばかりですから、若しお退屈でなかつたら入らして下さい。日曜には、大概誰方か見えてゐますから――お退屈ではないでせうから……」男爵は慇懃に立ち上つて、オブローモフにお辭儀をした。

オリガは親しい知人としてオブローモフに挨拶をした。が、彼が出て行くと、彼女は窓の方へ振り向いて、オブローモフの後を見送り、次第に遠ざかつて行くオブローモフの足音を靜かに聞いてゐた。

此の二時間も經ち、次の三四日も經ち、尙ほ幾週間か經つうちに、オリガは或る力强い影響を感じて、著しく進歩した。斯うした急激な力の增加と精神狀態の凡ゆる方面の發達とは、たゞ女にだけ見ることが出來るものである。

毎日は勿論時間毎にオリガは生活の講義を聞いた。丁度小鳥のやうに男子の鼻先を閃めいて行くやうな小つぼけな眼にも留まらないほどの經驗や機會などでも、處女はそれを不思議に素敏つこく捉へるものである。オリガが斯うした經驗や機會の飛び去つて行くのを見送つてゐると、それが描いて行く曲りくねつた線は、

消すことの出來ない記號や暗示や教訓となつて、彼女の記憶の中に留まるのであつた。

男の爲めには、行先を書いた里標を建てる必要がある場合でも、處女はざわ〳〵ッと云ふ風の音や辛つと耳に入るくらゐの空氣の震動で滿足する。

どうして、どう云ふ原因で、まだ前の週間まであんなに暢氣であつた處女の顏に、突然こんな嚴肅な考へが現はれたのだらう？　其の考へといふのは一體何だらう？　どんな事だらう？　その考への中には、種々な事が入つてゐるだらう。種々な論理や男の種々な推理的實驗的哲學や種々な系統だつた人生觀などが入つてゐるだらう！

つい近頃、處女としてのオリガと別れた彼女の Cousin（從兄弟）は、學校を卒業し、肩章を附けて彼女に會つた時に、元氣よく彼女の傍に走り寄つて、以前のやうに彼女の肩を敲き、彼女と手を取り合つて、椅子や長椅子の間を踊り廻らうとした……が、彼女の顏を凝と視ると、俄かに顏色を變へ、吃驚して後退りした。彼は、自分はまだ子供で、彼女はもう女になつてゐることを知つたのである！

どうしたのだらう？　何事が起つたのだらう？　芝居ぢやないだらうか？　評判になるやうな事件でも起つたのではないだらうか？　何か新しい事が起つて、それをもう街ぢうが知つてゐるのではないだらうか？ mama（母親）も、mo o ncle（叔父）も、ma tante（叔母）も乳母も女中も皆な何事も知らない。そんな事が起る時がなかつたのだ。彼女は二度も波蘭踊を踊り、幾度もコントルラダンスを踊つたではないか。それに彼女の頭は、何事かに惱んでゐた。彼女は夜も眠らなかつた……

が、やがて再た何も彼も過ぎ去つた。彼女の顏には、もう何か新しい物が現はれた。彼女の物の見方は、違ふやうになつた。彼女は大聲で笑ふのを止めた。一つの梨を一度に食はなくなつた。（彼等の寄宿舍に居つた時のやうに）話もしなくなつた……彼女も矢張り學校を卒業したのであつた。

オブローモフは其の翌日も其の次の日、即ち從兄弟が幾らかオリガの心を了解した日も怪々と彼女を見てゐた。が、オリガは以前のやうな好奇心も有たず、愛嬌もなく、全然赤の他人と言つたやうに單純にオブローモフを見てゐた。

（彼の女はどうしたのだらう？　今、何を考へてゐるのだらう？　何を感じてゐるのだらう？）と、オブローモフは焦々しながら自問した。（まるつきり分らない！）

が、二十五歲くらゐの男が、二十五人の教授と圖書館とに援けられ世間を放浪した揚句、またどうかすると精神の道德的香氣と淸新な思想と頭髮とを失つた揚句、辛つと經驗するやうな事を、オリガも經驗したのであると云ふことは、つまり彼女が意識の圈內に入つたのであると云ふことは、何時かオブローモフに分る時があるだらう。オリガがかくも易々と高い價を拂はずに意識の圈內に入ることが出來たのであつた。

「あゝ、實に苦痛だ。實に退屈だ！」と、オブローモフは言つた。「ウイボルグスカヤ・ストロナへ行つて仕事をし、書物を讀まう。オブローモフカ村へ行かう……一人で！」と、やがて彼はひどく悲觀しながら附け足した。「オリガとは別れよう！　私の樂園よ、私の光明にして靜かな生活の理想よ、ぢやこれでお別れだ！」

が、オブローモフは四日經つても五日經つても何處へも行かなかつた。彼は讀書もしなければ書きもしな

かつた。散歩をするつもりで埃だらけの路へ出ても、山まではまだだいぶあるのに、

（暑い中を歩くなんて、餘程物好きだ！）と、彼は獨語ち、欠伸をしながら歸つて來る。そして長椅子の上に寢轉び、丁度ゴロホーワヤ街道に住んでゐた時分のやうに、窓掛を下ろした埃だらけの室の中で、重苦しい夢に入つて了ふ。

夢は非常にぼんやりとしてゐる。彼が眼を醒すと、彼の前には種々な物を載せた卓子やスープや叩き肉がある。ザハールは夢でも見てゐるかのやうに窓の方を見ながら立つてゐる。他の室ではアニシヤが皿の音をさせてゐる。

オブローモフは晝餐を濟すと、窓の方へ向いて坐つた。退屈である。氣分が惡い。矢張り一人なのだ！矢張り何處へも行きたくもなければ、何もしたくない！

「これ、御覽なさいまし、旦那樣。隣から猫の子を持つて參りました。要りませんかね？　お前樣、昨日欲しいと言つて御座つたに。」と、アニシヤは言つて、オブローモフの氣を紛らさうと思ひながら、彼の膝へ猫の子を載せた。

オブローモフは猫の子を撫で始めた。が、猫の子の相手では矢張り退屈であつた！

「ザハール！」と、彼は言つた。

「何で御座りやすだ？」と、ザハールは氣のない返事をした。

「俺はねえ街へ引越さうと思ふんだ。」と、オブローモフは言つた。

「何處の街でがすだ？　室が無えだに。」

「いや、ウイボルグスカヤ・ストロナにさ。」

「此方の別莊から彼方の別莊と引越して歩いた日にや、大變で御座りやす。」と、ザハールは答へた。「それに彼處には、御存じねえだか？　ミヘイ・アンドレイチが居りやすだよ。」

「だつて、此處は面白くないんだ……」

「ぢや、また引越すだかね？　あゝ、あゝ！　また疲れることだ。それに、二つの茶碗も床刷毛も見つからねえに。若しミヘイ・アンドレイチが彼方へ運んだのでなければ、失つたんでがすよ。」

オブローモフは默つてゐた。ザハールは其處を去つたが、直ぐに鞄と旅行用の袋とを持つて來た。

「ぢや、これは何處へやりやすべえ？　賣つ拂つてしまひやすべえか？」と、ザハールは鞄を足で蹴つて言つた。

「何だお前は、氣が狂つたのか？　俺は近いうちに外國へ行くんぢやないか。」と、オブローモフは腹立たしさうに遮ぎつた。

「外國へ！」と、ザハールは突然に莞爾（にや）つとして言つた。「お前樣の言はつしやることは本當ですか、外國へ行くなんて！」

「何がそんなに不思議なんだ？　無論行く……もう旅行券も貰つてある。」と、オブローモフは言つた。

「だが、誰が外國でお前樣の靴を脱いで呉れやすべえ！」と、ザハールは皮肉に言つた。「女中共でがすか？

でも、外國へ行かつしやると、俺がゐねえだよ！」

ザハールは再たにやりとした。それが爲めに彼の頬鬚と眉毛とは、傍の方に押しやられた。

「貴樣は何時も馬鹿なことを言ふ！　これを持つて行け！」と、オブローモフは悲しさうに答へた。

翌る朝、オブローモフが十時頃に目を醒すと、ザハールは彼にお茶を持つて來て、パン屋へ行く途中で、お孃樣に會つたと言つた。

「何處のお孃さんに？」と、オブローモフは訊いた。

「何處の？　イリインスキイさんのお孃さんでがす。オリガ・セルゲーヴナさんでがす。」

「それで？」と、オブローモフはもどかしさうに訊いた。

「それで、宜しくお前樣に申して呉れろつて言はつしやつただ。それから、お前樣はお壯健か、何をして御座るかつて訊きやした。」

「お前は何と言つた？」

「お壯健でがす。だが、どうかしておいでゝ御座りやすと言ひやしたゞ。」と、ザハールは答へた。

「何故お前は自分の馬鹿氣た推察を附け加へたんだ？」と、オブローモフは言つた。「(どうかしておいでで御座りやす！　なんて、お前はどうして俺がどうかしてゐることを知つてるのだ？　で、それからどうした？」

「お前樣は昨日何處で晝餐をお食りになつたかとお訊きになりやした。」

「それで？……」

「家でお食りになりやした。晩餐も家でと言ひやした。ところが、お孃樣が(本當に晩餐もお家で)とお訊きになりやしたゞから、本當でがすとも、雛鷄の二羽もお食りになつたと申しやした……」

「馬――馬――馬鹿野郎！」と、オブローモフは怖ろしい聲で言つた。

「何が馬鹿です！　本當ぢやねえか！」と、ザハールは言つた。「骨も彼處にあるだよ。お目にかけべえか……」

「本當に馬鹿だ！」と、オブローモフは繰り返した。「で、お孃さんは何と言つた？」

「笑つて御座つたが、(あんまりお少ないわねえ！)と後でおつしやりやした。」

「そら見ろ、馬鹿野郎！」と、オブローモフは言つた。「貴樣は俺に襯衣を裏返しに着せたことまで饒舌つたんだらう……」

「訊かれねえだから、そんなこと言はねえだ。」と、ザハールは答へた。

「それから何を訊いた？」

「此頃は何をして御座るつて訊きやした。」

「で、お前は何と答へた？」

「何もして御座らねえ、たゞ何時も寢て御座るつて言ひやした。」

「あゝ！」と、オブローモフは顯顯のとこまで拳を振り上げて、酷く悲しさうに言つた。「彼方へ行け！」と、彼は嘶すやうに附け加へた。「若し此の次に俺のことでそんな馬鹿氣たことを勝手に言つて見ろ、お前をどうするか分らないぞ！　何と云ふ毒々しい奴だらう――此の男は！」

「でも此の年齢になつて、何しに嘘を言ひやすべえ？」とザハールは辯解した。

「彼方へ行け！」と、オブローモフは繰り返した。

主人が(厭な言葉)さへ言はなければ、ザハールは痛罵くらゐ何とも思つてゐない。

「俺はお前樣がウイボルグスカヤ・ストロナに行きたがつて御座ると言ひやした。」と、ザハールは言葉を結んだ。

「行け！」と、命令するやうにオブローモフは叫んだ。

ザハールは出て行つた。彼は客間を呑んで了ふやうな溜息を吐いた。が、オブローモフはお茶を飲み始めた。

オブローモフはお茶を飲んで了ふと、澤山の丸パンと乾パンの中から、たつた丸パンを一つ食べた。これはザハールの不謹愼を怖れたからである。それから彼は葉卷を喫しながら、机に向ひ、何かの書物を開けて一頁ばかり讀み、次の頁を開けようとすると、次はまだ切つてなかつた。

オブローモフは紙を指で切つた。その爲めに、紙の端には花飾のやうなものが出來た。その書物はシトーリツのものであつた。シトーリツは面倒なくらゐ嚴格な秩序を實行してゐた。殊に、書物に就いてさうであつた。紙や鉛筆や其他の細々しい物まで、在るべき所に置かれてあつた。

オブローモフは象牙の小刀を取らうとした。が、それがなかつた。無論、食卓用の小刀を持つて來させることも出來たが、オブローモフは書物を以前の場所に置いて、長椅子の上に寢た方が良いと思つた。彼は刺繍をしたクッションに片手を突いて、素速やく横にならうとすると、其處へザハールが入つて來た。

「あの、お嬢さんが彼方に來て下せえと言ひやしたゞ……何と言ひやしたつけ……えゝと！……」と、ザハールは言つた。

「何故お前は先刻、二時間前に言はなかつたのだ？」と、オブローモフは狼狽て訊いた。

「でも、彼方へ行けと言つて、言はせなかつたぢやねえか……」と、ザハールは言ひ返した。

「ザハール、貴樣は俺を苦しめるんだな！」と、オブローモフは憤然として言つた。

(さア、再た自分勝手が始まつた！)と、ザハールは考へ、主人の方に左の頰鬚を向けて、壁を見てゐた。

(此間のやうに……あの言葉が出て來たぞ！)

「何處だ！」と、オブローモフは訊いた。

「あれ、彼處でがすよ、何と言ひやしたつけ？　さうさう、庭でがす、あの……」

「公園か？」と、オブローモフは訊いた。

「さうでがす。公園でがす。(もしお氣に召したら散歩に入らつしやいませんか、私、彼處に居りますから)……斯うおつしやりやした。」

「衣服を着せて呉れ！」

オブローモフは公園ぢうを駈け廻つて、花壇や四阿を覗いて歩いた。が、オリガはゐない。で、彼は自分の心を打ち開けた時のあの並木路を歩いた。すると、オリガは其處の腰架に、彼女が枝を折つて投げ捨てた場所の近くに腰掛けてゐた。

「あなたはもう入らつしやらないのかと思つてましたわ。」と、オリガは愛嬌よくオブローモフに言つた。

「私は先刻から公園ぢうを捜してゐたんです。」と、オブローモフは答へた。

「私、あなたがお捜しになることを知つてたから、故意と此の並木路に腰掛けてゐたのよ。あなたは屹度此處へ入らつしやると思つて。」

オブローモフは(何故あなたはさう思つたのですか?)と訊いて見たかつた。が、彼女を見ると訊かれなくなつた。

オリガの顏はすつかり變つてゐた。以前のやうな、此處を二人で散歩した時のやうな顏附ではなかつた。彼女の顏は、オブローモフがオリガと最後に別れた時のやうな、彼をあんなに驚ろかせた時のやうな、顏附であつた。彼女の微笑は、嚙み潰したやうな微笑であつた。表情も矢張り思ひ詰めた決心を現はしてゐた。で、オブローモフはオリガと心の探り合ひや暗示の爲合ひや無邪氣な質問の爲合ひが出來ないことも、またそんな子供らしい樂しい瞬間が過ぎ去らうとしてゐることも見拔いた。

まだ言つて了はなかつたが、狹猾な質問をして探つて見ようと思つてゐた種々なことは、二人の間に言葉なく說明なく解決されて了つた。それがどう解決されたかと云ふことは分らないが、兎に角、それは過ぎ去つた問題になつてゐた。

「暫くお目にかゝらなかつたわねえ。どうしてゐらして?」と、オリガは訊いた。

オブローモフは默つてゐた。彼は自分達二人の關係の神祕な美が消え失せたこと、彼女が或る思ひ詰めた考へを作り、其の考へで雲のやうに自分を取り卷き、自分自身の中に閉ぢ籠つて彼を苦しめてゐること、彼がどうしていゝか、またオリガに對してどんな態度を採るべきかに惑つてゐることなどを再び何とかして側面からオリガに理解させたかつたらしい。

が、オブローモフは、こんな事を少しでも仄めかさうものなら、先づオリガの眼が益々驚異を現はし、次に彼女の態度が益々冷靜を加へ、最初不注意によつて消した彼女の同情の火花がすつかり消えて了ふだらうと感じた。彼は寧ろその火花を靜かに用心深く吹き起さなければならなかつた。が、どう云ふ具合に吹き起したものか、彼には全然分らなかつた。

オブローモフは、オリガが精神的に發育して、殆んど彼を凌駕しようとしてゐることや、もう彼女を子供の信じ易い心に返し得ないと云ふことや、彼等二人の前にルビコンが現はれて、彼等の失つた幸福がもう對岸に行つてゐることや、彼も其處まで渡つて行かなければならぬことを漠然と覺つてゐた。

が、どうなることだらう? 彼一人で其處へ渡つて行けるだらうか?

オリガはオブローモフの心に何かゞ生じて來たことも、自分の方に强味があることもオブローモフより明らかに覺つてゐた。オリガは公然にオブローモフの心を見て、彼の心の底に或る感情が生れたことや、其の感情が益々激しくなつて表面に現はれて來たことを知つてゐた。彼女はまた、彼に對して女の狡猾や計謀や魅力など——ソーニチカの武器——が無用で、二人の前には何等の爭も起るべき筈がないことを知つてゐた。

またオリガはまだ年が若いにも拘らず、此の二人の共鳴の中で自分が第一の主要な役目を有つてゐること

や、オブローモフからはたゞ深い印象と萎え切つたやうな情熱的從順と彼女の脈搏の一つ〳〵の鼓動に對する永久の調和とだけとを要求すべきで、意志の活動や能動的な思想を要求すべきでないことも既に見抜いてゐた。

オリガは一瞬間にオブローモフに對する自分の權利を測つた。オリガには路案内をする星の役目が、つまり光の役目が氣に入つた。彼女は此の光を鏡のやうな湖水に注いで、其處に自分を映して見ようとしたのである。彼女は此の決鬪に於ける自分の優先權を樣々に働かせた。

種々な事情によつて見るのに、此の喜劇若くは悲劇に於ける二人の登場人物は、どんな場合にも殆ど同樣な性格を有つて現はれてゐる。つまり苦しめる男、若くは苦しめる女の性格と犧牲者の性格とを有つて現はれてゐる。

無論、オリガは優先權を有つてゐる者の役目を、即ち苦しめる女の役目を演ずる凡ての女のやうに、他の人物よりも少なく、そして無意識に自分の滿足を拒絶し得なかつた。僅かに猫のやうに之に戯れることが出來なかつた。どうかすると、オリガには電光や豫期しない我儘のやうに感情の閃きが現ることもあつた。が、やがて彼女は再た俄かに考へ込んで、自分の中に閉ぢ籠るのであつた。けれども、オブローモフが自分では一歩も進むことが出來ず、彼女が伴れて行つた處に何時までも凝としてゐることを知つてゐたので、益々五月蠅く彼を突いて前進させた。

「お忙しかつたの？」と、オリガはカンバスに嵌めた小布を縫ひながら訊いた。

（忙しかつたなんて、ザハールの奴が言つたな！）と、オブローモフは胸の中で唸つた。

「さうです、私は一寸讀んでゐたものですから」と、オブローモフはうつかりと答へた。

「何を、小說なの？」と、オリガは訊いてオブローモフへ眼を注いだ。彼がどんな顏附をして嘘を言ふかを見ようとしたのである。

「いゝえ、私は小說を讀んだことは殆どありません。」と、オブローモフは酷く落着いて答へた。「私は（發見と發明の歷史）と云ふのを讀んだのです。）」

（俺はあの書物を今日一寸一枚走り讀みしたが、いゝことをした！）と、オブローモフは思つた。

「露西亞語で？」と、オリガは訊いた。

「いゝえ、英語です。」

「では、あなたは英語をお讀みになつて？」

「どうか斯うか讀みます。――が、あなたは何處か街へでもいらつしやいませんでしたか？」オブローモフは書物の話を揉み消したいので斯う訊いた。

「いゝえ、家にばかり居りましたわ。私は何時も此處で仕事をして居りますの。此の並木路で。」

「何時も此處で？」

「えゝ、私は此の並木路が大好きなの。あなたのお蔭でこんな並木路を知つたのよ。此處を通る者は、殆んどありませんからね！……」

「私が此處を敎へたんぢやありません。」と、オブローモフは遮つた。「ね、さうでせう？　私達二人が偶然に此處へ來たんぢやありませんか。」

「さうでしたねえ、實際さうですわ。」

二人は默つた。

「あなたの眼丹はすつかり癒りまして？」と、オリガはオブローモフの右の眼を眞正面に見ながら訊いた。

オブローモフは顏を赤くした。

「お蔭で、もう癒りました。」と、彼は言つた。

「眼が痒い時は、普通のお酒で洗つて御覽なさい。」と、オリガは續けた。「眼丹は出來やしませんわ。これは乳母から敎はつたのよ。」

（どうして此の女は眼丹のことばかり言ふのだらう？）と、オブローモフは考へた。

「それから晩餐を食らない方がいゝわ」と、オリガは眞面目に附け加へた。

（ザハール！）と、オブローモフはも少しで憎々しくザハールを呼ぶ所であつた。

「たゞ晩餐も加減して召し食れば大丈夫よ。」と、オリガは仕事から眼を放さずに續けた。「でも三日も續んでゐらつしやると、殊に、仰向になつてゐらつしやると、屹度眼丹が出來てよ。」

（馬――馬――馬鹿野郎！）オブローモフの內心には、ザハールに對する憎しみが慄へた。

「何を作つてゐらつしやるのです？」オブロモーフは話題を變へようとして斯う訊いた。

「花瓶敷よ。」と、オリガはカンバスを裏返し、彼にその模樣を見せて言つた「男爵にあげるのよ。良くつて？」

「非常に良いですね。模樣が大層綺麗です。ライラックの枝ですか？」

「さうでせう……さうよ。」と、オリガは無雜作に答へた。「私、何とでも取れるやうな物を選んだのよ……」

オリガは少し顏を赤めて、手速くカンバスを返した。

（が、こんなことが何時までも續いて、彼の女から何も得る所がなけりや、面白くもなんともない。）と、オブローモフは考へた。（他の者なら、――例へばシトーリツなら何か摑むだらうが、俺には摑めない。）

オブローモフは顏を顰めて、睡さうに周圍を見廻した。オリガは一寸オブローモフを見て、やがて仕事を籠の中へ入れた。

「森まで行きませうよ。」と、オリガは言つて、籠をオブローモフに持たせ、自分は洋傘をさし、着物を直して歩き出した。「何故あなたは元氣がないんでせう？」と、彼女は訊いた。

「何故か私にも分りません、オリガ・セルゲーヴナさん。だが、どうして私は快活になれるでせう？　どうすれば快活になれるでせう？」

「仕事をしたり、もつと人と交際をしたりなさるといゝわ。」

「仕事をするんですつて？　目的さへあれば仕事も出來ます。が、私にはどんな目的があるのでせう？　目的がないんです。」

「目的は生活することよ。」

「ですが、何の爲めに生活するのかを知らなければ、あやふやな生活に日を送らなければならないんです。晝が過ぎ夜が過ぎるのを喜び、夢でさへ今日は何故生活したか、明日は何故生活しなければならないかと云ふやうな退屈な問題を考へ耽るやうなことになるんです。」

オリガは默つたまゝ嚴(きつ)とした眼附をして聞いてゐた。彼女の釣り上つた眉には、冷酷が仄見えてゐた。眞一文字に喰ひ締めた脣には、疑惑でもなければ輕蔑でもないやうなものが、蛇のやうに匐つてゐた。

「何故生活したかつて？」と、オリガは繰り返した。「でも、どんな存在でも要らない存在はないんぢやなくつて？」

「ありますよ。例へば私のやうな。」と、オブローモフは言つた。

「ぢや、あなたは今迄御自分の生活の目的が、何處にあるのか御存じなかつたのね？」と、オリガは立留つて訊いた。「でも、私信じませんわ。あなたは御自分を貶してゐらつしやるのよ。でなければ御自分の生活を見下げてゐらつしやるのですわ……」

「私はもう生活のあるべき場所を過ぎ去つたのです。ですから私の前途には何も無いのです。」

オブローモフは溜息を吐いた。が、オリガは莞爾(につこり)とした。

「何も無いんですつて？」と、オリガは不審らしく繰り返したが、彼の言葉を信じないやうに、そして彼の前途に何かあることを見拔いてでもゐるやうに、生々と快活に笑つた。

「幾ら笑はれても、」と、オブローモフは續けた。「それはさうなんです！」

オリガは頽垂れて靜かに歩いてゐた。

「私は何の爲めに、また誰の爲めに生活するでせう？」と、オブローモフはオリガの後から隨(つ)いて行きながら言つた。「何を搜し、何處に思想や計畫を向けて行かなければならないでせう？　生活の花は落ちて、たゞ夢だけが殘つてゐるのです。」

二人は靜かに歩いてゐた。オリガは茫然(ぼんやり)と聞いてゐたが、路傍(みちばた)のライラックの枝を引き千切つて、彼を見ずにその枝を彼に與へた。

「之は何です？」と、オブローモフは狼狽て訊いた。

「御覽の通りの枝よ。」

「何の枝ですか？」と、オブローモフは眼を大きく開けて枝を見ながら言つた。

「ライラックの枝よ。」

「それは分つてゐます……が、此の枝は何を意味してゐるのですか？」

「生活の花と、そして……」

オブローモフは立ち止つた。オリガも矢張り立ち止つた。

「そして？……」と、オブローモフは不審らしく繰り返した。

「私の悲哀を。」と、オリガは考へ耽つたやうな眼附で、眞正面にオブローモフを見ながら言つた。そして自分が何をしてゐるかを知つてゐるとでも言つたやうに莞爾(につこり)とした。

見透すことの出來ない雲のやうなものが、オリガから飛び去つた。彼女は意味あり氣な、而も解り易い眼附をし、故意と書物の或る頁を開けて、其處の或る一部を讀ませでもしたものゝやうであつた。

「私は希望を有てるやうになりました……」と、オブローモフは嬉しさうに興奮して急に言つた。

「確かですね！　ですが……」

オリガは默つた。

オブローモフは俄かに甦つたやうになつた。そして今度はオリガの方がオブローモフを見違へるやうになつた。どんよりとした睡つたやうなオブローモフの顏は忽ち變つた。眼は大きく開かれた。頰には、血色が現はれた。思想が動き始めた。眼には、希望と意志が閃めいた。オリガはオブローモフの顏の此の無言の遊戯から、此の瞬間にオブローモフに生活の目的が出來たことを明らかに讀み取つた。

「生活が、生活が再た私の前に展かれました。」と、オブローモフは譫言のやうに言つた、「あなたの眼の中に、微笑の中に、此の枝の中に、Casta diva の中に……其處に生活があります……」

オリガは頭を振つた。

「いゝえ、全體ぢやないわ……半分だわ。」

「良い方の半分ですか？」

「さうでせう。」と、オリガは言つた。

「ぢや、他の半分は？　此の外にまだあるのですか？」

「捜して御覽なさい。」

「何故です？」

「先の半分を失はない爲めよ。」と、オリガは言つて、オブローモフに片手を渡した。二人は家の方へ歩いて行つた。

オブローモフは歡喜に滿ちて窃つとオリガの頭や身體や縮毛に視線を投げ、そしてその枝を握り締めた。

「之は皆な俺の所有だ！　俺の所有だ！」と、オブローモフは心の中で言つた。が、自分で自分を信ずることが出來なかつた。

「あなたウイボルグムカヤ・ストロナへいらつしやらなくつて？」と、オブローモフが家に歸らうとした時、オリガは訊いた。

オブローモフは笑つた。そしてザハールに馬鹿野郎と云ふ名前さへ與へなかつた。

九

其の時以來、オリガに突然の變化はなかつた。彼女は冷靜な落着いた態度で叔母や他の人達と語り合つてゐた。が、其の内部には生活が漲つてゐて、オブローモフと話をする時にだけその生活を感ずるのであつた。彼女はもうどうすれば良いかとか、どう云ふ行動を取るべきかなどゝ誰にも聞かなかつた。またソーニチカの權威に意識的に縋り付くやうなこともなかつた。

生活の、つまり感情の局面がオリガの前に開かれて來るに從つて、彼女は眼敏く現象を觀察した。自分の本能の聲を耳敏く聞いた。自分が貯へて置いた僅かの觀察を易々と使用した。そして自分の行くべき地盤を足で踏み締めながら用心深く歩いて行つた。

オリガには相談の相手になるやうな者が一人もなかつた。叔母？　叔母は、其の答を一つの理論に纏めることも、それを記憶に刻み込むことも出來ない程、輕くあつさりとオリガの問の上を辷つて行くのであつた。かと云つてシトーリツはゐない。ちや、オブローモフは？　オブローモフは一種のガラテヤで、彼女自身はピグマリオンでなければならなかつた。

オリガの生活は靜かに、他の誰にも分らないやうに充實されてゐたので、彼女は他人の注意を刺戟せず、露骨な情熱や感激を見ずに、自分の新らしい圏内に生活してゐた。彼女のする事は、他の人には誰にも以前と同樣に見えてゐたが、實際は全く變つてゐたのであつた。

オリガは佛蘭西劇場へ行つた。彼女には戯曲の内容が、彼女の生活と何か關係でもあるかのやうに思はれた。書物を讀むと、其の書物には屹度彼女の考への火花を書いたやうな場面があつて、彼女の感情の火は到る處に閃めいてゐた。また昨日言つた言葉も、著者が立聞きでもしたのではないかと思はれる程に書いてあつた。そして今彼女の心臓が如何に波打つてゐるかと云ふことも書いてあつた。

林の中には例の木がある。が、其の木の葉擦れの中には、特別の意味が表はれてゐた。殊に其の木と彼女との間には、生きた一致が作られた。小鳥も單に鳴いたり、囀つたりしてゐるのではなく、矢張り何事かをお互に語り合つてゐる。斯う云ふ具合に、周圍の物は皆な何か物語つたり、彼女の心持に答へたりしてゐるやうであつた。小花が開くと、彼女は其の呼吸を聞いてゐるかのやうであつた。

夢の中にも、矢張りその生活が現はれた。夢には何だか幻影のやうな者が現れて、どうかすると、オリガは聲を出して其の幻影と語り合ふことがあつた。……幻影はオリガに何事かを語る。が、それが判然しない。オリガはそれを解することが出來ない。そして幻影に何か話しかけたり、訊いたりして、矢張り不可能なことを口走るのである。毎朝カーチヤはオリガに譫言を言つたと言つた。

オリガはシトーリツの譫言を想ひ出した。シトーリツはオリガがまだ生活を始めてゐないと度々彼女に言つた。彼女はもう二十歳にもなるのに、シトーリツが自分を小娘扱ひにすることを口惜しがつたこともあつたが、オリガは今シトーリツの言つた通り、自分が漸く生活し始めたのだと云ふことを覺つた。

「あなたの肉體の凡ゆる力が動き出す時に、あなたの周圍でも生活が動き出します。其時あなたは、今あなたの眼に映じない物を見たり、今あなたが聞くことの出來ない音を聞いたりします。神經の音樂が始まつて、あなたは周圍の騒がしい音を聞き、草の延びる音にも聞き惚れるやうになります。焦躁らずに待つてゐらつしやい。自然に來ます！」と、シトーリツは言つた。

それが來たのである。

「これが力の動搖で、肉體の目醒めなんだわ……」、とオリガはシトーリツの言葉を繰り返して、今迄經驗したことのない戦慄に耳敏く聞き惚れ、目醒めた新らしい力の新らしい現はれを一つも見逃すまいと、怪々

しながら鋭い眼附で見た。

オリガは空想に陷らなかつた。また木の葉の突然の戦慄にも夜の幻影にも神祕な囁きにも從はなかつた。その神祕な囁きは、夜誰かゞ彼女の耳の上に屈んで、何か不可解なぼんやりとしたことを言つたやうな氣持がする時に聞かれるのであつた。

「神經だわ！」オリガはどうかすると莫爾として斯う繰返すことがあつた。さうした時彼女は涙を流しながらも、恐怖を征服したり、まだ確固しない神經と目醒めた力との格闘を忍んだりした。

オリガは寢床から起きて、洋盃に一ぱいの水を飲み、窓を開け、手巾で自分の顔を煽ぎながら、夢現から醒めるのであつた。

が、オブローモフが朝眠を醒した時に、先づ第一に想像に浮ぶものは——オリガの姿であつた。オリガは全身を延し、手にライラックの枝を持つてゐる。彼は眠る時にも、矢張りオリガのことを考へながら眠つた。散歩に出た時も、書物を讀んでゐる時も、オリガは常に彼の前に現はれてゐた。

オブローモフは心中で晝夜の分ちなく斷えずオリガと話をしてゐた。彼はオリガの容貌や性格の中に何か新らしいものを發見すると、それを何時も「發見と發明の歴史」の中に書き込み、尙ほ偶然にオリガと出會つたり、オリガに書物を送つたり、吃驚させるやうな贈物をしたりする機會をも發明した。

オブローモフはオリガと會つた時には、彼女と話をしながら一緒に自分の家まで來る。どうかすると、ザハールが入つて來ることがある。オブローモフはオリガと話をする時のやうな非常に優しい柔らかい調子を

意識しながらザハールに言ふ。

「おい、禿げた惡魔、先刻も再た私に磨かない靴を出して呉れたんだねえ。よく見てお呉れ、私はお前の仕事を分擔するのは厭だよ……」

實際、オブローモフはオリガの歌を始めて聞いた其の瞬間から、無頓着な性格をすつかり失つた。彼はもう以前のやうな生活を止した。仰向になつて寢てゐようが、壁を見てゐようが、自分の傍にアレクセーエフが腰掛けてゐようが、或は自分自身がイワン・ゲラシモーウイチの傍に腰掛けてゐようが、そんな事はどうでも良いやうな生活を止した。晝にならうが、夜にならうが、誰をも、また何事をも待たないやうな生活を止した。

で、今では、晝も夜も朝も晩もどんな時もその姿を有つやうになつた。そしてオリガの姿によつて滿されるか、或はオリガのゐない萎えたやうな退屈な時間が流れるかによつて、その時間は虹のやうな輝きに滿されたり、蒼白めたり、憂鬱になつたりするのであつた。

斯う云ふ事は、皆なオブローモフの中に反映した。彼の頭には、毎日毎時間の網のやうな考へや推察や豫感や不明の苦痛があつた。で、斯う云ふ事は、皆な彼がオリガに會へるだらうか會へないだらうかとか、オリガがどんな事を言ひどんな事をするだらうとか、オリガはどう云ふ見方をし、どんな事を彼に依頼し、どんな事を彼に訊くだらうかとか、彼女が彼の答へに滿足するだらうか、滿足しないだらうかなどと云ふ疑問から生ずるのであつた。そして斯う云ふ種々な考へは、彼の生活の根本問題になつてゐた。

《あゝ、若し戀の此の溫か味だけを經驗して、戀の戰慄を經驗しないものならどんなに良いだらう！》とオブローモフは空想した。《いや、生活が刺戟するのだ。何處へ行つても斯う云ふ具合に燒くのだ！　無數の新らしい動搖と仕事とが俄かに生活の中へ入つたのだ！　――戀は――人生の一番面倒な學校だ！》

オブローモフはもう幾册かの書物を讀んだ。オリガは彼に其の書物の內容を話して與れと言つて、非常な辛抱をしながらオブローモフの話を聞いてゐた。オブローモフは村へ幾通かの手紙を書き、村長を代へ、シトーリツの紹介で隣村の或る人に村の管理を頼んだ。オブローモフはオリガの傍を離れることさへ出來れば、或は村へ行つたかも知れなかつた。

オブローモフは晩飯も食べなければ、もう二週間も晝寢を忘れてゐた。

二三週間、二人はペテルブルグの近郊を殘らず乘り廻つた。叔母とオリガと男爵と彼とは郊外の音樂會にも行けば、賑やかな祝賀會にも行つた。芬蘭のイマートラへ行かうなどと話し合つた。

オブローモフに就いて言へば、彼は公園の先へは何處へも行きたくなかつたのだが、オリガが何時も工夫した。オブローモフが何處かへ遊びに行かうと言はれた時に口吃ると、もう直ぐに郊外散策が企てられた。そして其の時には、オリガは無闇に莫爾々々してゐた。別莊の周圍五露里の間で、オブローモフが數回上らない小丘は、一つもなかつた。

そのうちに、彼等二人の共鳴は益々生長し、發達し、其の不變の法則通りに現はれた。オリガは感情と一緒に益々美しくなつた。彼女の眼には光が加はり、その身振には優美が加はつた。彼女の胸も、矢張り美しく發育して適度な波打を見せてゐた。

「オリガ、お前は別莊へ來てから大層美しくおなりだねえ。」と、叔母は言つた。男爵の微笑の中にも、同樣のお世辭が現はれてゐた。

オリガは顏を赧めて叔母の肩に頭を載せた。叔母は愛嬌よくオリガの頰を敲いた。

「オリガさん、オリガさん！」と、或る時オブローモフは丘の下で殆んど囁くやうに用心深くオリガを呼んだ。其處でオリガはオブローモフと落ち合つて散步に出かけようと約束したのであつた。

が、答がない。オブローモフは時計を見た。

「オリガ・セルゲーヴナさん！」と、更に聲を出して附け加へた。

矢張り默つてゐる。

オリガは丘の上に坐り、オブローモフが呼ぶのを聞きながら、笑を殺して默つてゐた。オリガはオブローモフを丘に上らせたかつたのである。

「オリガ・セルゲーヴナさん！」と、彼は灌木の間を丘の中腹まで上つて、頂上の方を見上げながら呼んだ。

（五時半までに來る約束だつたのに。）と、彼は獨語つた。

オリガは堪へ切れなくなつて笑ひ出した。

「オリガさん、オリガさん！　何です、あなたは、其處にゐたのですか！」と、彼は言つて丘に上つた。

「あゝ！　あなたは山の中に隱れようとしたでせう！」オブローモフはオリガの傍に坐つた。「私を苦しめる

積りで自分でも苦しんでゐるのですね。」

「あなた何處から入らして？　お家から直ぐに？」と、オリガは訊いた。

「いゝえ、私はあなたのお宅へ行つたんですよ。ところが、あなたはお出かけになつたと言ふんでせう。」

「あなたは今日何をなすつて？」と、オリガは訊いた。

「今日は……」

「ザハールさんを怒鳴りつけてゐらしたの？」と、オリガは言つた。

オブローモフはそんな事は全く有り得ない事だと言ふやうに笑つた。

「いゝえ、私は Revue を讀んでゐました。が、まア、お聞きなさい、オリガさん……」

けれども、彼は何も言はずにオリガの傍に坐つたまゝ、彼女の半面や頭や前後に動く手や彼女が針をカンバスにさしたり引拔いたりする樣子を凝と見てゐた。彼は火の點つた洋燈のやうな眼をオリガに注いで、それを彼女から放すことが出來なかつた。

オブローモフ自身は身動きもしなかつたが、その眼だけはオリガの手が動くにつれて、或は右に或は左に或は下に動いてゐた。オブローモフの中には、非常な活動が行はれてゐた。益々激しくなる血液の循環、二倍の速さになつた脈搏の鼓動、心臟の沸騰――斯うしたものは皆な非常に激しかつた。で、オブローモフは刑場に引かれる時か、或は最も高調した精神的歡樂の瞬間でゝもあるかのやうに、徐かに重苦しさうに呼吸を吐いてゐた。

オブローモフは口を利くことが出來なかつた。身動きさへ出來なかつた。が、たゞ感激の爲めに潤んだ眼だけは、凝とオリガに注がれてゐた。

オリガは時々オブローモフに捜るやうな視線を投げて、彼の顏に書かれてゐる愚かしい意味を讀んだ、そして考へた、（あゝ！　此の人の愛は、何と云ふ熱烈なものだらう！　此の人は何と云ふ優しい方だらう。何と云ふ優しい方だらう！）彼女は彼に見惚れながら、自分の力で自分の脚下に俯伏させた男があることに誇を感じてゐた。

象徴的な暗示や意味あり氣な微笑やライラックの枝などの時機は、もう永久に過ぎ去つてしまつた。戀は益々嚴肅になり、益々峻嚴になつて、一種の義務に變り始めた。相互の權利も現はれた。雙方は益々打解けて來た。誤解や疑念は消えた。或はもつとはつきりした積極的の問題にその場所を讓つたりした。

オリガは何時も懶惰に過ごされたオブローモフの生活を輕く諷刺したり、冷酷な宣告をしたり、シトーリツよりも深く、そして露骨に彼の無感覺を責めたりしたが、オブローモフに益々接近するに從つて、彼の萎縮した生活に對する諷刺から轉じて、暴君のやうに自分の意志を現はすやうになつた。そして大膽にオブローモフに生活や義務の目的を聞かせたり、嚴しく活動を要求したり、自分が知つてゐる生活上の些細な問題に彼を引き込んだり、或は自分に分らない曖昧な何かの問題を彼に持ちかけたりして、間斷なくオブローモフの智慧を試みた。

オブローモフも大いに心配し、頭を碎き、オリガの眼前で強く倒れないようにとか、或はオリガの爲に或る

難問題の解決を助けようとか、でなければ其の問題を勇ましく一刀兩斷にして了はうなどゝ心を痛めてゐた。

オリガの女らしい凡ゆる手段は、優しい同情に貫ぬかれてゐた。オリガの智慧の作用に隨いて行かうとするオブローモフの凡ゆる努力は、情熱を呼吸してゐた。

けれども、オブローモフは度々力を失つて、オリガの脚下に身體を横へ、手を心臟の上に載せ、オリガに驚異の眼を凝と注ぎながら、心臟の鼓動を聞いてゐることがあつた。

（此の人の愛は、何と云ふ熱烈なものだらう！）オリガは此の瞬間にもオブローモフに見惚れながら斯う考へた。が、若しオブローモフの精神の中に潜んでゐる以前の狀態を——僅かな疲勞や僅かに認められるやうな居睡つた生活をどうかして見附けると——尤もオリガはオブローモフの精神を深く見拔くのが上手であつた——オリガは忽ちオブローモフに對して嘲罵を浴せかけた。そして其の嘲罵を悔いるとか、間違を怖れるとか云ふやうなことは滅多になかつた。

どうかするとオブローモフは欠伸をしようとして口を開けることがあつた——が、オリガの吃驚したやうな眼に刺戟されて、直ぐに口を閉ぢ、齒をがち〳〵とさせた。斯う云ふ風に、オリガはオブローモフの顏に現はれる僅かな睡魔の影さへも責めるのであつた。また、彼女はオブローモフが何を爲してゐるかと云ふことばかりではなく、何をしようと思つてゐるかと云ふことまでも聞き訊した。

オブローモフは、自分が疲れた爲めにオリガまで疲れたことと、オリガが茫然して冷やかになつたことに氣がつくと、オリガに責められた時よりもつと激しく元氣附いた。さうした時などオブローモフには熱烈な生活力と活動力とが現はれ、睡魔の影は何處へか消えて、孱た共鳴が澄んだ力强い泉のやうに迸り出るのであつた。

けれども、斯うした心掛は、皆な戀の魔力の範圍を出てなかつた。オブローモフの活動は、消極的であつた。ただ眼らずに書物を讀んだり、時には計畫を書き附けようと思つたり、澤山に歩いたり、澤山に乘り廻つたりするだけであつた。そして將來の方針と生活の思想そのものと事業とは、まだ計畫されたまゝに殘されてゐた。

「アンドレイが更に希望してゐる生活と活動とは、どんなものだらう？」と、オブローモフは晝飯を濟すと、眠らないやうに眼を瞬きながら言つた。「之は生活ぢやないのだらうか？　愛は勤務ぢやないのだらうか？　彼の男も遣つて見れば分ることだ！　毎日——十露里づゝも歩くのだ！　昨日は街の汚ない酒場に宿つて、着物も脫がず、たゞ靴だけを脫いで寢た。ザハールはゐない——皆なオリガに賴まれたお蔭だ！」

オブローモフに取つて一番苦しかつたのは、オリガが彼に專門的な問題を出して、大學の教授にでも要求するやうに、彼に十分な解釋を要求する時であつた。が、こんな事は一度や二度ではなかつた。それもオリガは學者を氣取りたい爲めにこんな問題を出すのではなくして、單に事の眞相を知り度いと云ふ希望からであつた。オリガは度々オブローモフに就いての自分の目的を忘れて、問題そのものに心を奪はれることさへあつた。

「どうして私達にそんな事を敎へて呉れないのでせう！」と、オリガは考へ込みながら悲しさうに言つた。

どうかすると、貪るやうに、そして熱心に今迄女には不必要だと思はれて來たやうな問題に關する話を聞くこともあつた。

彼女は或時突然にオブローモフに雙生星に就いての問題を持ちかけたことがあつた。オブローモフはうつかりとヘルシエルの言葉を引用した爲めに、街へ行つて書物を讀み、彼女が滿足するまで彼女に話を聞かせなければならなかつた。

一度など、彼は矢張り不注意の爲め、男爵との話の中に、繪畫の流派に就いて二言ばかり口走つて了つた。これで再たオブローモフに一週間ばかりの仕事が出來た。讀書をして話をしなければならなかつた。そればかりか、更にエルミタージ（譯者註。露國博物館。）にまでオリガを案内して、實地に自分の讀んだ事を證明しなければならなかつた。

若しオブローモフが何か不用意に出鱈目なことを言はうものなら、オリガは直ぐにそれを見拔いて益々五月蠅く質問をするのであつた。

それから、オブローモフは一週間もかゝつて彼方此方の商店を歩き廻り、名畫から取つた銅版畫を捜さなければならなかつた。

憐れなオブローモフは、或は同じことを二度も反復したり、或は新刊の文藝書を買ふ爲めに書肆へ駈けて行つたりした。時には、夜通し眠りもせずに書物を漁つたり、讀んだりして、朝になつて記憶の古い記錄からふと出て來た智識で昨日の問題に答へるかのやうに見せかける支度をしたこともあつた。

オリガは斯うした問題を女らしい散漫な心持や若くは種々な事を知りたいと云ふ一時的な我儘に支配されてではなく、頑固に熱心に持ち出すので、若しオブローモフが彼女が持ち出した問題に對して默つてゐようものなら、試すやうな眼附で何時までも彼を責めた。こんな眼附で見られると、オブローモフは何時も慄へ出した。

「どうして何ともおつしやらないの？　どうして默つてゐらつしやるの？」と、オリガは訊いた。「退屈なのですね。」

「あゝ！」と、オブローモフは忘我の境から醒めたやうに言つた。「私はどんなにあなたを愛してゐろか知れません！」

「本當なの？　でも、私なんだかさうぢやないやうな氣がしますわ。」と、オリガは言つた。

「ぢや、あなたは私の心に何が生じてゐるかを感じてゐらつしやらないのですか？」と、オブローモフは言ひ始めた。「私には口に出すさへ六ケ敷い程です。これ、此處に……手を貸して下さい。何かが邪魔をしてゐます。何か重たい石のやうな物が横はつてゐます。深い悲哀に陷つてでもゐるやうです。だが、不思議ですね。人間は悲哀の時にも、幸福の時にも、肉體には同じ作用を受けるものです。あゝ、呼吸苦しい、呼吸をするのが痛いやうです。何だか泣きたいやうです！　若し泣けば、悲哀を感じてゐる時のやうに、涙によつて私の心は幾らか樂になるでせう……」

オリガは彼の言葉を信じたかのやうに、默つて彼を見ながら、彼の言葉と彼の顏に書かれてゐるものとを比

べて茫爾とした。滿足な信用を捉へたのである。オリガの顏には、何ものにも搔き亂されないらしい平和な幸福の呼吸が漲つた。彼女の心は何の悲哀も感じないらしく、たゞ此の靜かな朝の自然のやうに美しかつた。

「私はどうしたのでせう？」と、オブローモフは考へ沈みながら自問するやうに訊いた。

「それはですねえ」

「何です？」

「あなたは……戀をしてゐらつしやるのよ。」

「さうです、無論です。」と、オブローモフはオリガの手をカンバスから引き離しながら言つた。が、彼女の手には接吻せず、たゞ指をしつかり脣に押し附けて、何時までもさうしてゐようとした。

オリガは竊つと手を退けようとしたが、オブローモフはしつかりと掴んでゐた。

「さア、放して頂戴よ、もう澤山だわ。」と、オリガは言つた。

「だが、あなたは？」と、オブローモフは訊いた。「あなたは……戀をしてゐらつしやらないのですか……」

「戀してゐます、いゝえ……私は此の人を戀してゐるんぢやないの。私はあなたを戀してゐるのよ！」と、オリガは言つて、自分が本當に戀してゐるのかどうかを確かめるやうに、暫くオブローモフを見てゐた。

「私は愛……愛してゐます！」と、オブローモフは言つた。「けれども母親でも父親でも乳母でもまた犬の子でも愛することが出來ます。これは皆な(愛する)と云ふ綜合的一般的な觀念で覆はれてゐるのです。つまり奮い……」

「夜着で？」と、オリガは笑ひながら言つた。「ですが、Tropos.あなたの夜着は何處にあつて？」

「何の夜着です？　私には夜着なんかありませんよ。」

オリガは詰るやうな微笑を浮べながらオブローモフを見た。

「成程、あなたは古い夜着のことを言つてゐらつしやるのですね！」と、オブローモフは言つた。「けれども、あなたの心から迸り出る感情にあなたがどう云ふ名前をお附けになるか、それを閉かうと思つて待ち兼ねてゐるのです。ところが、あなたは……あゝ、オリガさん！　私はあなたを戀してゐます。若し此の戀がなければ、直接の愛もありません。人間は父や母や乳母を戀してゐません。たゞ愛してゐるだけです。」

「分らないわ。」と、オリガは自分を見拔いて、自分の裡に起つたものを捉へようとでもするかのやうに考へ沈みながら言つた。「私があなたを戀してゐるかどうかも分らないわ。若し戀してゐないとすれば時機が來ないのです。ですが、たゞ一つ分つてゐることは、私が父も母も乳母もこんなに愛さなかつたと云ふことだけだわ……」

「どんな違ひがあるのです？　あなたは何か特別な感じを有つてゐらつしやるのですか？」と、オブローモフは遮つた。

「あなた、それを知りたくつて？」と、オリガは探るやうに訊いた。

「さうです、さうです、さうです！　あなたには、それを言ひ現はしたいと云ふ要求はありませんか？」

「でも、何故あなたはそれを知りたいのでせう？」

「一分間でもそれによつて生活する爲めです。今日も今晩も明日も――またお會ひするまで……私はそれだけで生活するのです。」

「御覽なさい、あなたにも、あなたの愛情の貯へを毎日新らしくする必要があるんでせう！　ぢや愛される者と愛する者との間に、何處に違ひがあつて？　私は……」

「あなたは？……」と、オブローモフはもどかしさうにオリガの言葉を待つてゐた。

「私は別な愛し方をしてゐてよ」と、オリガは椅子に背中を押し着けて、飛んで行く雲に眼を向けながら言つた。「私はあなたがゐらつしやらないと退屈ですわ。あなたと暫く別れてゐても――悲しいんですもの。長い間別れてゐると苦痛ですわ。私は今度初めて知つたことがあつてよ。見抜いたことがあつてよ。私はそれを信じてゐるのよ。それはね、あなたが私を愛してゐらつしやると云ふことなの――ですからあなたが私を愛してゐらつしやることをもう繰り返して下さらなくつても、私は幸福です。私はもうこれ以上、またこれより良くあなたを愛することは出來ないのですから。」

《これは――宛然、コルデリヤの言葉のやうだ。》と、オブローモフは熱情的にオリガを見ながら考へた。

「あなたが……死んだら、」と、オリガは吃りながら續けた。「あなたの爲に私は永久に喪を守り、一生涯決して笑はないわ。あなたがたとへ他の女を愛するやうなことをなすつても――怨んだり呪つたりせずに、自分の心の裡であなたの幸福を祈つてゐますわ……私にとつて斯うした愛は――矢張り生活なの……けれど生活は……」

オリガは言葉を捜した。

「あなたは生活をどう考へておいでゞすか？」と、オブローモフは訊いた。

「生活は責任です、義務です。ですから愛も――矢張り責任ですわ。神様が私に愛を下すつたやうなものよ。」と、オリガは眼を空へ向けながら言つた。「神様が愛するやうにとお命じになつたのよ。」

「コルデリヤですね！」と、オブローモフは聲を出した。「彼の女も二十一歳でした！　そして愛に就てあなたのやうな考へを持つてゐました！」と、オブローモフは考へ込みながら附け加へた。

「それに、私には一生涯生活し、一生涯愛する力があるやうな氣がしますわ……」

《誰がこんなことを此の女に敎へたのだらう？》と、オブローモフは殆んど崇敬の念に近い感情を懷いてオリガを見ながら考へた。《此の女は經驗と苦悶と火と煙とによらずに、こんなに明瞭に、而も單純に生活と愛とを理解してゐる》

「だが、生々した戯喜と情熱がありますか？」と、オブローモフは言ひ始めた。

「どうですか。」と、オリガは言つた。「私はそんなものを感じたことがなければ、またそれがどんなものかと云ふことも知らないんですもの。」

「私には、今それが實に良く分つてゐますねえ！」

「さうでせうとも。あなたにあるやうな熱情が、私にも矢張りあるやうな氣がするわ。あなたにお會ひしてから、本當にあなたが私の前にゐらつしやるのかどうか信じられない程なの……滑稽なことですけれど」と、

オリガは快活に附け加へた。「あなたは時々妙な眼附をなさるのねえ。mr. tante も氣附いてゐることゝ思ふわ。」

「あなたは、愛による幸福は何だと思つておいでゞすか？」と、オブローモフは訊いた。「若しあなたに、私が感じてゐるやうな生々した歡喜が無いとすれば……」

「それはですね、これ、これよ！」と、オリガは彼と自分と彼等二人を取り圍んでゐる寂寞の境地とを指差しながら言つた。「これが幸福でなくつて？　私はこれまでこんな生活をしたことはないわ？　以前ならば、私は二人で此の木の間に、書物も讀まず、歌も唄はずに十五分間も坐つてゐられなかつたのよ。アンドレイ・イワヌイチ以外の男の方と話をすると、どんな話をしても退屈で、何時も一人でゐたいと考へたわ……けれど今は……二人で默つてゐても樂しいんです！」

オリガは周圍の木や草を見廻し、やがて視線をオブローモフに止めると、莞爾として彼に片手を渡した。

「それに、私はあなたが歸らうとなさると、悲しくつて堪らないのよ。」と、オリガが附け加へた。「ですから、眠つて了つて、退屈な夜を見まいと狼狽て寢床へ入るわ。そして朝になるとあなたの許へ使を遣らずにゐられないの。それから……」

《そして》とか《それから》とか言はれる毎に、オブローモフの顏は益々赤くなつて、其の眼には光が滿たされた。

「さうです、さうです。」と、オブローモフは繰り返した。「私も矢張り朝になるのを待つてゐます。私にも夜

は退屈なんです。翌る朝になると、何も用事は無くつても、たゞあなたの名前を餘計に言ひ、あなたの名前の響を聞き、何かあなたのことに就て詳しく知りたい爲めに使を遣るのです。ところが、其の使者がもうあなたを見たのだと思ふと妬ましくつて堪りません……私達は同じやうなことを考へ、同じやうなことを待ち、同じやうに生き、同じことを望んでるのですねえ。オリガさん、私が疑ぐつたことを赦して下さい。私はあなたが私を愛してゐて下さることを信じます。そして私程にお父さんをも、叔母さんをも、それから……」

「犬の兒をも愛さなかつたわ。」と言つて、オリガは笑ひ出した。

「私を信じて下さい。」と、オリガは言葉を結んだ。「私があなたを信じてるやうにね、そして疑ぐつたり、詰らない疑念で此の幸福を脅かしたりしないで下さいね。でないと、幸福は逃げて行つて了ふわ。私は一度自分のものにした以上、誰が奪らうとしても、決して渡さないことよ。私はそれを知つてるんです。私はまだ若いけれど……本當ですよ」と、オリガは聲を強めて言つた。「私はあなたとお近づきになつて以來、一ヶ月の間に種々なことを考へもすれば經驗もして、丁度大きな書物を讀んだやうに、段々と自分のことを……疑ぐつちや厭よ……」

「疑はざるを得ませんねえ」と、オブローモフは遮つた。「ですから、そんなことを要求しないで下さい。今斯うしてあなたを見て居れば、私は何も彼も信じます。あなたの眼と聲とが凡てを語つてゐますから、あなたに見られてゐると、何かを言はれてゐるやうです。私には言葉なんか要りません。私はあなたの眼附を讀むことが出來るんです。が、あなたの傍から離れると、種々な疑問が起つて私を苦しめます。で、私は再たあ

なたの許へ駈けつけて、再たあなたを見なければならないのです、でなければ、あなたを信じられないのです。どうしたんでせうねえ？」

「けれど、私はあなたを信じてゐますわ。何故でせう？」と、オリガは訊いた。

「まだ信じてはゐらつしやらないでせう。あなたの前に居る者は、發狂者で情熱に燃えてゐる者ですよ！あなたは、鏡に向つた時のやうに、私の眼の中に自分を見てゐらつしやるのだと私は思ひます。それに、あなたは二十歳でせう。考へて御覽なさい。男があなたを見て、あなたに驚異の貢を拂はずにゐられるでせうか……視線だけでも向けずにゐられるでせうか？　あなたを知つたり、あなたの聲を聞いたり、長い間あなたを見たり、愛したりしてゐると――あゝ、直ぐに氣が狂つてしまひます！　けれども、あなたはその通り冷靜に落着いてゐらつしやるんです。若し一晝夜も二晝夜もあなたから《愛する……》と云ふ言葉を聞かなければ、此處が騒ぎ始めます……」

オブローモフは心臓の邊を指差した。

「愛してゐます、愛してゐます。――さア、これで三晝夜分の豫備を、あなたに差上げたのよ！」と、オリガは椅子から起ち上りながら言つた。

「あなたは何時も茶化してお了ひなさるが、私はどんなでせう！」と、オブローモフはオリガと一緒に丘から降りながら、溜息を吐いて言つた。

彼等二人の間の斯う云ふ樣々な變調の中には、何時も同じモチーヴが響いてゐた。度々の媾曳も對談も――皆な同じ歌であり、同じ音律であり、また同じやうに炎々と燃えてゐる光であつた。其の光線は、更に屈折したり、薔薇色や綠色や薄黄色に分離したりして、周圍の雰圍氣の中に慄へてゐた。毎時、毎日新らしい音律と光線とが齎らされても、其の光の燃え方も變つてゐなければ、またモチーヴの響き方も以前と同じであつた。

オブローモフもオリガも此の音律を捉へて、それに聞き惚れた。そしてお互の聞いたことを急いでお互に歌つて聞かせようとした。而も明日は他の音律が響き、他の光線が現はれることを疑がはなかつた。そして翌日になると昨日の歌が今日の歌と違つたことを忘れて了ふのであつた。

オリガは感情の流露に現在の彼女の想像を彩つてゐる色彩を着せ、その色彩が自然に忠實なものと信じてゐた。そして自分の友の眼に無邪氣で無意識な媚を呈しながら、自分を綺麗に着飾つて見せようとするのであつた。

オブローモフは益々此不思議な音律と魅力のある光線とを信ずる樣になつた。そしてオリガの前に自分のありつたけの情熱を現はし、自分の精神を浸蝕する火の凡ての輝きと凡ての力とをオリガに見せようとした。

二人は自分に對しても、またお互にも嘘を言はなかつた。二人は衷心から迸り出ることを言つた。けれども、其の聲は想像を通過してゐた。

オブローモフにとつて實體の如何と云ふことは、問題でなかつた。オリガがコルデリヤとなつて現はれやうが、コルデリヤの型に忠實であらうが、或は新らしい小徑を通つて行かうが、他の幻影に變らうが、ただ

彼の心の中で彼女が着てゐる色彩と光線とを着て現はれさへすれば、オブローモフは滿足であつた。

オリガも矢張り彼女が其の手袋を獅子の口中に投げ込んだ場合、情熱的な友が彼女の手袋を拾はうが、彼女の爲めに深淵へ飛び込まうが、そんなことは若し友の情熱の微候さへ見れば、或は彼が男の理想に、殊に、彼女によつて生活に覺醒された男の理想に忠實でさへあつて呉れゝば、或は彼の覺醒の火が彼女の視線と彼女の微笑とによつて燃され、彼が彼女の中に生活の目的を見さへすれば、どうでもよかつた。

だから、チラリと閃き去つたコルデリヤの姿の中にも、オブローモフの情火の中にも、たゞ同じ瞬間と同じ瞬間的な愛の呼吸と同じ愛の朝と同じ綺麗な模樣とが、反映してゐるだけであつた。が、明日になると、明日になるともう違つたものが輝やくのである。矢張り美しくはあるが、併し違つたものが輝やくのである……

十

オブローモフは、丁度夏の夕陽を見送る人のやうな心持を感じてゐた。さうした人は夕映から眼を放さずまた夜が押し寄せて來る背後を振り向きもせず、たゞ〳〵明日になると溫かさと明るさが歸つて來ると云ふことばかりを考へながら、紅い夕陽の跡に見惚れてゐるものである。

オブローモフは仰向に寢轉んだまゝ、昨日の嬰兒の最後の光景に心を奪はれてゐた。《愛してゐます。愛してゐます。愛してゐます》と云ふ言葉は、まだオリガの何の歌よりも嬉しく彼の耳の中で慄へてゐた。オリガの鋭どい眼附の最後の光も、まだ彼の裡に潜んでゐた。彼はオリガの眼に現はれた意味を考へたり、彼女の愛の程度を測つたりしてゐるうちに、突然に夢のやうな無我の境へ入つて了つた。

翌る朝、オブローモフは蒼白めた憂鬱な顏附をして起きた。其の顏には、不眠の跡が殘つてゐた。額には、澤山の皺が寄つてゐた。眼には、火花も無ければ希望も無かつた。多忙な人の得意の色や元氣のいゝ快活な眼附や適度に忙しさうにする意識的な身振など――皆な殘らず失はれてゐた。

彼は頽然としてお茶を飲んだが、一册の書物にも手を附けず、また机にも向はず、考へ込んだまゝ巻煙を喫し、それから長椅子へどかッと腰掛けた。以前ならば身體を横たへるところであつたが、今では起きてゐるのに慣れてゐたので、彼はクッションにさへ凭り懸らなかつた。けれども、彼はクッションに肱をついてゐた――之は以前の習慣を暗示する印である。

彼は憂鬱な顏附をして、時々溜息を吐いたり、突然に肩を窄めたり、無闇に頭を振つたりした。

彼の中には、何物かゞ力强く動いてゐた。が、それは愛ではなかつた。オリガの姿は彼の前に現はれたが、それは彼に關係のない者として、やがて遠く暗い霧の中へ消えて了つた。彼は病的な眼附でオリガの姿を見送りながら溜息を吐いた。

《神から命ぜられる通りに生活し、自分勝手な生活を捨てることが――これが賢明な法則だ。けれども……》

オブローモフは考へ始めた。

《さうだ、自分勝手な生活をしてはならぬと云ふことは――明かなことだ。》と、オブローモフは憂鬱にそして頑固に言ひ始めた。《お前は混沌たる矛盾に陷つてゐる。人間の智慧がどれ程深く、どれ程鋭どくつても、

人間の智慧だけで此の矛盾を解くことは出來ない。昨日望み、病氣になる程熱心に望んだものを今日捉へても、明後日になると望んだことに赤面し、やがて生活を呪ひ、實現されたものを呪ふだらう。人生を勝手に、そして大膽に濶歩することと我儘な「我慾」とから生ずるものはこれだ。手索りをして歩き、樣々な物に眼を閉ぢ、なほ幸福を夢みず、たとへ幸福が辷り落ちても、決してそれを訴へないこと——これが生活だ！　生活は幸福であるとか歡樂であるなどゝ誰が考へ出したのだらう？　無智な奴等だ！（生活は生活ですわ、責任ですわ）とオリガは言つた、（義務ですわ。けれど義務は重たいものよ。私達は責任を果しませうね……）》

オブローモフはほッと溜息を吐いた。

「もうオリガさんには會ふまい……あゝ！　あなたは私の眼を開いて呉れました。私に責任を示して呉れました。」と、オブローモフは空を眺めながら言つた。「が、何處から力を得よう？　別れなければならない！まだ今のうちなら苦痛であつても、できないことはない。さうすれば後になつて、どゝしてあの時、別れなかつたらうと自分を怨むやうなこともあるまい……が、もうオリガさんから使者が來る時分だ。オリガさんは使者をよこさうと思つてゐるだらう……待ち兼ねてゐることだらう……」

どう云ふ理由だらう？　どんな風が突然にオブローモフを吹いたのだらう？　どう云ふ雲を吹き送つたのだらう？　そして何故オブローモフはこんな悲しい軛を負ふのだらう？　昨日彼は更にオリガの心を眺め、オリガの心の中に光明な世界と光明な運命とを見、自分と彼女との運星を讀んだ筈である。それに、これはどうしたことだらう？

多分オブローモフが晩飯を喰べるか、それとも仰向に寢轉んでゐるうちに、詩的な氣分が一種の恐怖に變つたのだらう。

星の瞬く夏の靜かな晴れ渡つた夕方眠りに落ちて、明日は野原が朝の輝やかしい色彩を受けて定めし美しいことだらうとか、林の繁みへ入つて暑氣を避けたら、どんなに氣持が良いだらうなどと考へることがある……と、突然に雨の音と悲しげな灰色の雲との爲めに眼を醒す。寒くて濕々してゐる……

オブローモフは例によつて晩方から自分の心臟の鼓動に耳を澄した。それから心臟の邊を手で觸つて、心臟の硬化が激しくなつてはゐないかと調べて見た。最後に、熱心に自分の幸福を分解し出した。すると、突然に膽汁の滴に出會して、毒を受けた。

毒の影響は強く、そして速かつた。オブローモフは走馬燈のやうに、自分の今迄の生活を考へ浮べた。と過去に對する悔恨と哀惜の情は、後れながらも幾度となく彼の心臟を襲つた。オブローモフは若し勇敢に前進してゐたら、自分は今頃どうなつてゐたらうとか、若し自分が活動家であつたら、もつと充實した、そしてもつと多方面的な生活をしてゐたらうなどと考へた。そして今の自分は何者であらうとか、どうしてオリガは自分を愛し得たのだらう、愛することが出來るのだらう、また何の爲めだらうなどゝ云ふ問題へ轉じた。

之は間違ひではないだらうか？　と、云ふ考へが、突然にオブローモフの頭の中に、電光のやうに閃いた。そして此の電光は丁度彼の心臟の眞上に落ちて、それを打ち碎いて了つた。彼は呻き始めた。《間違ひだ！さうだ……確かにさうだ！》と云ふ考へが、彼の頭の中を駈けずり廻つた。

と、(愛してゐます、愛してゐます、愛してゐます。)と云ふ言葉が、突然に再た記憶の中に響いた。心臓は熱くなつて來た。が、突然に再た冷たくなつた。オリガが三度も(愛してゐます)と繰り返したのは――一體何だらう？　それは、彼女の眼の欺瞞であり、浮氣な心の狡猾な囁きである。愛ではない。たゞ愛の豫感に過ぎないのだ！

此聲は何時か鳴り響くだらう。而も世界ぢうを顫ひ戦かせる程の強い諸音となつて鳴り響くだらう！　叔母や男爵にも分るだらう。そして此の聲の餘韻は、更に遠くまで鳴り渡るだらう！　一體、感情と云ふものは、小川が辛つと聞える位にサラ〳〵と音を發てながら草の中に隠れて了ふやうに、静かに流れないものである。

オリガは今、カンバスで刺繍をしながら愛を感じてゐる。模様は静かに氣懈るさうに現はれる。彼女は更に氣懈るさうにカンバスを廻しながら、其の模様に見惚れてゐる。が、やがてそれを置いて忘れて了ふ。さうだ。之はたゞ愛に對する準備に過ぎない。實驗に過ぎない。が、彼は主觀である。主觀は場合によつては、實驗をする爲に少々厄介視されるものである……

偶然に彼等二人は接近したのだ。オリガはオブローモフに氣附かなかつたが、シトーリツがオブローモフを紹介して、敏感な若い彼女の心を動かしたのだ。そこでオブローモフの境遇に對する同情が起り、頽然とした精神から睡魔を拂ひ落し、それからその精神を見放さうと云ふ主我的な心配が起つたのだ。

「さうだ！」と、オブローモフは怖ろしさうに言つて寢床から飛び起きた。そして手を慄はせながら蠟燭を點けた。「其處には、それ以外に何も無い。また何も無かつた！　オリガさんは愛を受ける準備をしてゐた。

オリガさんの心臓は、鼓動を鎮めて待つてゐた。此の俺も偶然にオリガさんに會ひ、それが爲めに間違ひに陥つたのだ……で、他の男が現はれると直ぐに――オリガさんは吃驚して間違から飛び退くだらう！　其の時、オリガさんはどう云ふ風に此の俺を見るだらう。どう云ふ風に遁れるだらう。恐ろしい！　俺は他人の物を奪つたのだ！　俺は――盜人だ！　俺は何をしてゐるのだ。何をしてゐるのだ？　俺は何と云ふ盲人なんだらう――あゝ！」

オブローモフは鏡を見た。彼の顔は蒼白めて黄色かつた。彼の眼もどんよりとしてゐた。彼は若い幸福な人達を想つて見た。彼等は潤みのある沈んだ、而もオリガに見るやうに力強く鋭どい眼を有つてゐる。彼等の眼には、火花が慄へてゐる。微笑の裡には、勝利の信念がある。彼等の歩き方も元氣がよく、その聲にも響がある。彼等の中から一人現はれる、彼は待たれてゐる。彼女は急に興奮して、彼を、つまりオブローモフを見る。そして……ホ、、、と笑ひ始める。

オブローモフは再た鏡を見た。

「こんな男を愛する女はありやしない！」と、彼は言つた。

やがて彼は横になつて、顔を枕に押し着けた。

「赦して下さい、オリガさん。あなたは幸福でゐて下さい！」と、オブローモフは言つた。

「ザハール！」と、翌る朝彼は叫んだ。「若しイリインスキイさんから俺を迎へに來たらな、俺は家にゐない、街へ行つたと言つて呉れ。」

「畏まりやした。」

《さうだ……それより寧ろオリガさんへ手紙を書かう。》と、オブローモフは獨語つた、《俺が突然に姿を隱すと云ふことは、オリガさんにとつて餘り亂暴に思はれるだらう。その理由を說明する必要がある》

彼は卓子に向つて、素速く熱心に、そして非常に性急に手紙を書き始めた。五月の上旬に家主に手紙を書いた時とは全然違つた態度であつた。『居り』や『趣き』などが次から次と幾度も重複して、不快を與へるやうなことは一度もなかつた。

《オリガ・セルゲーヴナ樣、(と、オブローモフは書いた)私達はお互にあんなに度々會つてゐたのに、今私が行かずに此の手紙を差上げたら、定めしあなたは不思議に思召すことでせう。が、末尾まで讀んで下さい。さうすれば、私にとつて斯うする外に仕方がないことがお分りになります。此の手紙さへ書けば、私達は將來良心の呵責を遁れることが出來るでせう。而も今はまだ遲くはありません。私達は突然に、そして非常に速く愛し合ふやうになりました。宛然二人は突然に病氣に取り付かれでもしたかのやうです。之が私にもつと速く覺醒するのを妨げたのです。のみならず、一日ぢうあなたを見、あなたの聲を聞いてゐて、どうしてあなたの魅力から覺醒すると云ふ重苦しい義務を自由に引受けられるでせう? 斜面に留つて、其の斜面に從つて轉がらない爲めに何處で注意の力と意志の力を得られるでせう? 私は毎日、(もう誘き附けられまい、留まらう、自分次第でどうにもなるのだ)と考へながら、矢張り誘き附けられ、現に今も戰つてゐるのです。此の戰には、あなたの援助をお願ひします。私は漸く今日になつて、今夜になつて、私の足がどんな

に速く辷つてゐるかと云ふことを知りました。私は昨日漸く自分の陷りつゝある深淵の深い深いどん底を見ました。で、私は留まることに決めました。

私はたゞ自分のことだけを言ひます——之は主義の爲めではなく、私が此の深淵のどん底に横はる時に、あなたは矢張り清い天使として卒高く飛び翔つてゐらつしやることゝ思ふからです。そしてあなたが此の深淵を一眼でも見ようとなさるかどうか私に分らないからです。お聞き下さい、遠廻しに言はずに率直に言ひますが、あなたは私を愛してゐらつしやらないのです。またあなたには私を愛することが出來ないのです。私の經驗をお聞き下さい。そして私の言葉を絕對に御信用下さい。私の心臟は疾うから鼓動し始めてゐます。其の鼓動は異樣に不調です。が、此の鼓動によつて私は心臟の正調鼓動と不調鼓動とを區別することを知りました。何處に眞理があつて、何處に迷誤があるかを知ることは、あなたには出來ないことでせうが、私には出來ますし、またどうしてもそれを知らなければなりません。そして私は之をまだ知り得ない者に對して警戒すべき義務を有つてゐます。で、今私はあなたに警戒します。あなたは迷つてゐらつしやるのです。よく見て御覺なさい!

愛が、微笑む幽かな幻影の形を取つて私達の間に現はれた時、愛が Castaliva の中に響き、ライラックの枝の匂の中やまだ言ひ現はされなかつた共鳴の中や恥かしさうな眼附の中に現はれた時、私は其の愛を想像の遊戲であり、自惚の囁きであるとして、それに信用しなかつたのですが、程なく不眞面目な態度が過ぎ去つて、私は愛に惱み、熱情の徵候を感ずるやうになりました。あなたは沈み勝になり、眞劍になりました。

あなたはあなたの時間を私に下さいました。あなたの神經は囁き始めました。あなたの胸は波立ち始めました。其の時になつて、つまり今になつて私は漸く吃驚しました。そして立ち留つて、之が何であるかと云ふことを言はねばならぬ義務が、私の上に落ちて來たことを感じました。

私はあなたを愛してゐると言ひました。あなたも同じ言葉でお答へになりました。どうです、此處には不調和が響いてゐますが、聞えませんか？　では、後で私が愈々どん底に横はつた時に、あなたの耳へ入るでせう。私を見て下さい、私の狀態を考へて下さい。あなたは私を愛することが出來ますか。あなたは私を愛してゐらつしやるのですか？《愛してゐます、愛してゐます。愛してゐます》と、あなた昨日おつしやつたけれども、私は、さうではありません、さうではありません、さうではありません！　と確信をもつて答へます。

あなたは私を愛してゐらつしやらないのです。けれど、あなたは嘘をおつしやるのではありません――急いで附け加へて置きますが――あなたは私を欺むかうとなさるのでもありません。あなたは内心が「さうではない」と言ふ時に「さうだ」と言ひ得ない方です。で、私はたゞ一つあなたに證明したい事があります。それは、あなたの現在の「愛してゐます」は、現在の愛ではなくして、未來の愛だと云ふことです。それはたゞ、愛しようとする無意識の要求に過ぎないのです。其の要求は、現在の糧が十分でない爲めと火力の無い爲めとで、燃燒力を有つた本當の火となつて燃えることが出來ないのです。ですから女の場合には、其の要求はどうかすると赤兒や同性に對する愛情の中に現はれたり、或は單に涙の中やヒステリックな發作の中に現はれたりすることがあります。私は最初からあなたに對して、（あなたは間違つたことをしてゐらつしやる、あなたの前に立つてゐる者は、あなたが豫期し空想して居られた者ではありません。暫時お待ち下さい。程なく其の人が來ます。其の時あなたは覺醒します。其の時あなたは自分の間違を悲しむでせう、恥ぢるでせう。けれどもあなたの此の悲哀と悔恨とは私を苦しめるでせう。）と、嚴然として言はなければならなかつたのです――若し私が天性秀徹した理智と覺醒した精神とを有つてゐたら、そして更に私がもつと眞面目であつたら、屹度私はさう言つたでせう……無論、私は言ひました。が、それは怖る〳〵、あなたがそれを信じないやうに、またそんな事が起らないやうに言つたのでした。私が以前に言つたことは、後で他の人も言へることで、私は成るべくあなたの耳を引かないやうに、あなたに信用を與へないやうに心掛けました。そして急いであなたに會ふやうにしながら（何時か他の男が出て來るまで自分は幸福なんだ）と考へてゐました。これが衝動と情熱との論理です。

今では私はもうさう考へてゐません。けれども、若し私が前の考へに捉はれてゐたならば、若しあなたと會ふことが、生活の贅澤でなくして必要になつたならば、そして若し愛が心臟に向つて（心臟が硬化して來たやうだ。）と叫んだならば、其時はどうなつたでせう。どうしてその考へから離れることが出來るでせう？　矢張りこんな苦痛を感ずるでせうか？　私はどんなに苦しむか分らないのです。私は今になつてその事を考へると、慄然とします。若しあなたが私より經驗に富み、私より年齢をとつてゐらつしやれば、私は自分の幸福を祝福し、永久にあなたに手を渡したことでせう、所が、それが……

何故私は手紙を書くのでせう？　何故私は直接あなたの許へ行つて、あなたに會ひたい希望は日增に生長して行くが、もう會ふことは出來ないのだと言はないのでせう？　けれども、それをあなたの前で言ふには――お察し下さい、私にそれだけの勇氣がないのです！　どうかすると、それらしい事をあなたに言ひたいと思ふことがあります。が、愈々言ふ時になると、全然別なことを言ふのです。多分、あなたの顏に、悲哀が現はれはしまいかとか（若しあなたが私と一緒にゐて退屈でなかつたことが本當だとすると。）或はあなたが私の善良な計畫を理解なさらずに、却つて悲しみはなさらないだらうか、など〻考へる爲めでせう。私はその何れをも忍び得ないので、再た別な事を言ひました。そして本當の計畫は、塵のやうに飛び散り、私は相變らず翌日お會ひすることに腐心するのでした。が、今此處には、あなたがゐらつしやらないので、思つた通りに書けます。あなたの優しい眼と美しく愛らしい顏とが、私の前にありません。紙は凝と忍んで默つてゐます。私は落着いて（嘘です）「私達はもう會はないやうにしませう」（嘘ではありません）と書いてゐます。

他の人なら「涙を灑ぎながら書いてゐます」と附け加へるでせうが、私はあなたの前で壯麗なことを言ひますまい。自分の悲哀を虛飾しますまい。と云ふのは、私は苦痛を增し哀惜を消したくないからです。一體斯うした虛飾は、普通、益々深く感情の地盤に根を下ろさうと云ふ野心を有つてゐます。が、私はあなたの裡にも自分の裡にも、此の野心の種子を亡ぼしたいのです。泣くと云ふことは、言葉巧みに女の不注意な自惚心を捉へようと心掛けてゐる誘惑者か、或は疲れ切つた空想家に應はしいことです。斯う言つて私は遠國へ旅立する親友と別れるやうに、あなたとお別れします。三週間經ち一ヶ月と經つうちに益々遲くなり、益々別れ難くなります。愛は不思議な程進歩します。愛は精神上の疫病です。今ではもう私は全く別な人間になりました。一時間一分間と算へはしません、太陽の出入にも注意しません。が、私が今算へて居ることは、あなたにお會ひしたこと――お會ひしなかつたこと、お會ひしてゐること、お會ひしてゐないこと、あなたがお出かけになつたこと――お見えにならなかつたこと、私が待つてゐたことなどです……斯う云ふことは皆な愉快な昂奮や不快な昂奮を容易く忍ぶ青年の顏には釣合ふもので、私の顏には平靜が釣合ひます。それも退屈な眠つたやうな平靜で、それが私の特徵です。私には暴風雨を鎭めるやうなことは、到底出來ません。

大抵の人は、私の遣り方に吃驚するでせう。何故逃げ出すのだ？　と言ふでせう。大抵の人は、私を笑ふでせう。けれども、私は其の嘲笑を覺悟してゐます。私があなたに會はない覺悟をしたのは、どんな事でも忍ぶ覺悟をしたと云ふことを意味するものです。

私は深い悲愁に沈みつゝも、なほ幾らか慰められてゐます。私を慰めるものは、私達の生活の短かい挿話が、淸く香高い追憶を私の爲に永久に殘して呉れたことです。私はたゞ此の追憶さへ有つて居れば、もう決して以前のやうな精神的睡眠に陷ることはありません。それに、此の追憶はあなたを害しないばかりか、却つて將來に於けるあなたの常規的生活を指導することでせう。もうこれでお別れです。天使よ、吃驚した小鳥が、間違つて棲つた枝を飛び去るやうに、速く飛び去るやうに、偶然に止つた枝を飛び去るやうに、身輕く、元氣よく、そして快活に飛び去つて下さい！

オブローモフ

オブローモフは感激しながら書いた。ペンは飛ぶやうに紙の上を走つた。眼は輝やき、頰は燃えてゐた。手紙は、普通の艶書のやうに隨分長くなつた。戀をする人達は、悸々しながらもお饒舌りな者である。

《妙だ！　俺はもう退屈でも、苦痛でもなくなつた！》と、オブローモフは考へた。《俺は却つて幸福を感ずるくらゐだ……どうしたのだらう？　それは多分精神の重荷を手紙の上へ載せて了つたからだらう？》

オブローモフは先づ手紙を讀み返し、それからそれを折つて封筒へ入れた。

「ザハール！」と、オブローモフは言つた。「使者が來たら、此の手紙を渡してお孃さんに屆けるやうに言つて呉れ。」

「畏まりやした。」と、ザハールは言つた。

實際、オブローモフは快活になつた。彼は長椅子に腰掛け、兩脚を其の上に載せて、何か朝餐に食べる物はないかと訊いた。彼は卵を二個食べて、葉卷を喫し始めた。彼の心臟も頭も何かに充たされてゐた。彼は生活してゐた。彼はオリガが手紙を受け取つてどんなに驚ろくだらうとか、あれを讀んでどんな顏をするだらうとか、それからどうするだらうなどゝ想像した……

オブローモフは其の日の光景と新らしい狀態とに見惚れてゐた……彼は心臟の鼓動を止めて、人が來やしないだらうかとか、オリガがもう手紙を讀んでゐるのではないだらうかなどゝ考へながら、扉を叩く音に聞き耳を立てゝゐた……が、玄關の方は靜かであつた。

《どう云ふ譯だらう？》と、オブローモフは不安らしく考へた。《誰も來ないやうだ、どうしたんだらう？》

と、《どうしてお前は悸々してゐるのだ？　關係を斷つ爲めに、誰も來ない方がお前の爲めに良いではないか？》と囁くやうな幽かな聲が彼の耳へ入つた。が、彼は此の聲を消すやうにした。

三十分も經つと、オブローモフは屋敷の中で馭者と話し込んでゐるザハールを呼んだ。

「誰も來なかつたか？」と、彼は訊いた。「誰か來やしなかつたか？」

「へい、參りやした。」と、ザハールは答へた。

「で、どうした？」

「お前樣はゐねえ、街へ行つたと申しやした。」

オブローモフはザハールを睨み附けた。

「何故お前はそんなことを言つたのだ？」と、オブローモフは訊いた。「俺は下男が來たらどうしろとお前に言ひ附けたか憶えてゐるか？」

「でも、來たのは下男ぢやなく、女中でがすよ。」と、ザハールは馬鹿に冷靜に答へた。

「ぢや、手紙を渡したか？」

「いゝえ、お前樣、最初家にゐないと言へと言ひ附けて、それから手紙を渡せとおつしやつたぢもの。だから此の次に下男が來たら、手紙を渡しやすべえよ。」

「さうぢやないんだ、さうぢや……貴樣は人殺しだ！　手紙は何處にある？　此處へ持つて來い！」と、オブローモフは言つた。

ザハールは手紙を持つて來た。が、もう酷く汚れてゐた。

「手を洗へ、どうしたんだ、これは！」と、オブローモフは憎々しさうにザハールに手紙の汚點を指差しながら言つた。

「俺の手は綺麗でがすよ。」と、ザハールは傍の方を見ながら答へた。

「アニーシヤ、アニーシヤ！」と、オブローモフは叫んだ。

アニシヤは玄關の間から身體を半分突き出した。

「まア、見て呉れザハールの仕事は此通りだ。」と、オブローモフはアニシヤに訴へた。「さ、此の手紙だ、此の手紙をイリインスキイさんから下男でも女中でも來たら、お嬢さんへ屆けろと言つて渡して呉れ——分つたか？」

「旦那樣、分りました。屹度渡しますで御座ります。」

が、アニシヤが玄關の間へ出るや否や、ザハールは直ぐに彼女から手紙をひつたくつた。

「彼方へ行け、やい、彼方へ。」と、ザハールは叫んだ。「てめえは婆アの仕事でもするがいゝだ！」

程なく女中が再た駈けて來た。ザハールが女中の爲めに扉を開けて遣らうとすると、其の扉口へアニシヤも出て來た。が、ザハールは憎々しさうにヂロリとアニシヤを睨んだ。

「てめえ、何しに此處へ來たゞ？」と、ザハールは嗄れ聲で訊いた。

「あれを聞きにさ、お前があの……」

「よし、よし、よし！」と、ザハールは肱でアニシヤを拂ひ退けながら呻くやうに言つた。「彼方へ行け！」

アニシヤはにやりとして其處を去つたが、次の間の鍵穴から、ザハールが主人の命令通りにするかどうかと見てゐた。

オブローモフは此の騒ぎを聞きつけたので、自分も飛び出して來た。

「カーチヤ、何だ？」と、オブローモフは訊いた。

「お嬢樣から、あなた樣が何處へいらつしやつたか訊いて來るやうに言ひ附けられましたので。でも、あなた樣は何處へも行かずに、お家にゐらしたんですね！　駈けて行つてさう申しますわ。」と、カーチヤは言つて駈け出さうとした。

「俺は家に居つたのさ。此奴は何時も嘘ばかり言ふんだ、」と、オブローモフは言つた。「さア、此の手紙をお嬢さんに渡してお呉れ！」

「畏まりました。お渡し申します！」

「今、お嬢さんは何處におゐでだね？」

「村を散歩してゐらつしやいます。若しあなた樣が書物を讀んでお了ひになつたら、二時までに庭へ來て頂くやうに申せと言ひ附かつて參りましたんです。」

カーチヤは歸つた。

《いや、行くまい……すつかり片附けて了はなければならぬ時に、何の爲めに感情を刺戟するんだ？……》と、

オブローモフは、村の方へ行きながら考へた。

オブローモフは、遠くからオリガが丘を歩いてゐるのや、カーチヤがオリガの跡を追うて手紙を渡したのを見た。また彼はオリガが一寸立ち留つて手紙を見ると、暫く考へてゐたが、やがてカーチヤに頷頭いて、公園の並木路へ入つて行つたのも見た。

オブローモフは丘を迂廻つて、反對の側から例の並木路へ入り、その中頃で濃木の間の草の中に坐つて、オリガを待つてゐた。

《彼の女は此處を通るだらう。》と、彼は考へた。《どうするか竊り見て、そして永久に別れよう》

オブローモフは心臓の鼓動を止めるやうにして、オリガの足音を待つてゐた。が、彼女の足音はしない。森然としてゐる。自然は活潑な生命を漂らせてゐた。周圍には、眼に止らないやうな小さな勞働が沸騰してゐた。が、萬象は莊嚴な靜寂の裡に横はつてゐるやうに思はれた。

殊に、草の中では種々な物が動いたり、匐つたり、飛び廻つたりしてゐた。其處には澤山の蟻が、こせこせと忙しさうに彼方此方と匐ひ廻つたり、衝突り合つたり、走せ別れたり、急いだりして、その樣は丁度高い處から人間の市場か何かを見てゐるやうであつた。市場では、矢張り斯う云ふ具合に、大勢の人々が群つたり、衝突り合つたりしながら囂々してゐるのである。

真花の傍では、一匹の山蜂が羽を鳴らしながら、蕚の中へ匐ひ込まうとしてゐる。と思ふと一方には、澤山の蠅が、菩提樹の裂目から滴り出てゐる汁に粘着いてゐる。小鳥は叢茂の中で、先刻から同じ鳴き聲を繰

り返してゐる。多分伴侶を呼んでゐるのであらう。

と、此度は二匹の蝶が、空中で縺れ合ひながら、ワルツを踊るやうに忙しなく古木の傍をヒラ〳〵と飛んでゐる。草は強い薫を放つてゐる。草の中からは、斷間なく蟲の音が聞えてゐる……

《實に騒々しい世界だ！》と、オブローモフは此の焦燥を見入り自然の微かな騒音に聞き惚れながら考へた。

《けれども、外面から見ると矢張り森然として靜かなものだ！……》

が、足音はまだ聞えなかつた。しかし遂々來た……「あゝ！」と、オブローモフは靜かに枝を押し退けながら溜息を吐いた。「彼女だ、彼女だ……どうしたのだらう？　泣いてゐる！　あゝ！」

オリガは靜かに歩きながら手巾で涙を拭いてゐた。が、辛つと拭いて了ふと、また新たに涙が出た。彼女は恥かしさうに涙を呑み込みながら、木立をも厭ふかのやうであつた。オブローモフは今迄一度もオリガの涙を見たことがなかつた。で、まさか彼女が泣かうとは思はなかつた。彼はオリガの涙に燒かれるやうな氣持がした。が、その涙は熱くはなく、温かであつた。

オブローモフは急いでオリガの背後へ出た。

「オリガさん、オリガさん！」と、彼はオリガの後を隨けながら優しく呼んだ。

オリガは慄然つとして振り返り、吃驚して彼を見たが、また前方を向いて歩き出した。

オブローモフはオリガと並んで歩いた。

「あなた泣いてるのですか？」と、オブローモフは言つた。

オリガの涙は益々激しく流れ出た。彼女はもう涙を止めることが出來ず、手巾を顔に押し當てゝ獻欷ながら最初の腰架に腰掛けた。

「私は飛んだ事をしましたねえ！」と、オブローモフは彼女の片手を握つて、それを顔から引き放さうとしながら悸々と囁いた。

「放棄つて置いて下さい！」と、オリガは言つた。「彼方へ行つて下さい！　何故あなたは此處へ入らして？私は泣てはならないことを知つてゐます。あなたのおつしやる通りよ。どうせ斯うなるに定つてたんですものの。」

「でも、あなたの涙を止めるには、どうしたらいゝでせう？」と、オブローモフはオリガの前に跪づいて訊いた。「言つて下さい。命じて下さい。私はどんな事でもします……」

「あなたは涙を出させることは出來ても、それを止める權力を有つてゐらつしやらないわ……あなたはそれ程強い方ではないんです！　放棄つて置いて下さい！」と、オリガは手巾で顔を撫でながら言つた。

オブローモフはオリガを見ると、彼女が彼を呪つてゐるのを見拔いた。

「惡い手紙だつた！」と、オブローモフは後悔しながら言つた。

オリガは仕事の籠を開き、其中から手紙を出してオブローモフに渡した。

「お返ししますわ。」と、オリガは言つた。「私が此の後これを見て泣くやうなことがないやうに持つて行つて下さい。」

オブローモフは默つて手紙を衣匣へ入れ、頸垂れたまゝオリガの傍に腰掛けてゐた。

「兎に角、オリガさん、あなたは私の計畫が正當であつたことを認めて下さいますか？」と、オブローモフは靜かに言つた。「此の手紙は、あなたの幸福が私にとつてどのくらゐ尊いかと云ふことの證據なんです。」

「さう、そんなに尊いと思つてゐらして！」と、オリガは溜息を吐きながら言つた。「いゝえ、さうぢやないわ、イリヤ・イリイーチさん。あなたは屹度私の靜かな幸福を羨やんで、それを掻き亂さうとなさるのよ。」

「掻き亂さうと！　ぢや、あなたは私の手紙をすつかりお讀みにならなかつたのですね？　私がも一度讀んでお聞かせしませう……」

「讀んで了ひませんとも。だつて眼に一ぱい涙が溢れるんですもの。私はまだ馬鹿なのねえ！　けれど私は後を察してゐますから、もう繰り返さないで下さい。また泣くのは厭です……」

再た涙が溢れ出た。

「私があなたとお別れするのは、」と、オブローモフは言ひ始めた。「あなたの將來の幸福を見て、其の幸福の爲めに自分自身を犧牲にするのです……私が斯う云ふ事を冷淡に遣れるでせうか？　どうして私は内心で泣かずにゐられませう？　何の爲めに私はこんな事をしたのでせう？」

「何の爲めになすつて？」と、オリガは俄かに泣き止んで、彼の方へ振り向きながら繰り返した。「何故なの。今、あなたは灌木の中に隱れてゐて、私が泣くだらうか、どんな風に泣くだらうかと窃つと見てゐらしつたのは――それは何故なの？　若し誠心誠意で手紙をお書きなすつたのなら、そしてまたどうしても私と別れ

なければならないと固く決心してゐらつしやるのなら、私に會はずに外國へゐらつしやりさうなものぢやありませんか。」

「それは酷です！」と、オブローモフは詰るやうに言ひかけたが、皆な言つて了はなかつた。

彼はオリガの判斷に驚ろかされたのであつた。何故かと言へば、彼は此の判斷の當然なことを急に判然と意識したからである。

「さうよ」と、オリガは言つた。「あなたは昨日は私に（愛してゐます）と言はせ、今日は涙を流させ、明日は多分私が死ぬのを見ようとなさるのでせう。」

「オリガさん、それは餘り酷い侮辱です！　私があなたの笑ひ聲を聞き、あなたの涙を見まいとして、今自分の生命の半ばをあなたに捧げ　ゐるのだと云ふことを、あなたは信じて下さらないのですか……」

「さうですわ、それは今ですわ。一人の女があなたの爲めにどんなに泣くかと云ふことを御覽なすつた今の事です……さうよ」と、オリガは附け加へた。「あなたには心臓がないのよ。あなたは私を泣かせたくないとおつしやるけれど、若し本當に泣かせたくないのなら、こんな事を爲さらなけりや良いぢやありませんか……」

「でも、私は知らないぢやありませんか？」と、オブローモフは疑念と肯定との意味を聲に含めて、兩方の掌を胸に當てながら言つた。

「でも、心臓は愛する時には、相當の智慧を有つてゐるものよ。」と、オリガは反對した。「心臓は自分が何を望んでゐるかと云ふことを知つてゐます。また將來どんな事が起つ　來るかと云ふことも知つてゐます。昨日

は突然にお容があつたものですから、此處へ來られなかつたのですけれど、私はあなたが心配しながら私を待つてゐらつしやつたことも、夜分もよくお寢みになれなかつたことも分つてゐました。私が此處へ來たのもあなたを苦しめたくないからなんです……ところが、あなたは、あなたは私の泣くのが面白いのです。幾らでも私を見て樂しんで下さい！……」

オリガは再た泣き出した。

「オリガさん、全く私はよく眠れなかつたのです。夜通し悶えてゐたのです……」

「ぢや、私がよく眠つて、苦しまなかつたのがお氣に障つたのですね――さうぢやなくつて？」と、オリガは遮つた。「若し私が今泣かなければ、あなたは今晩もよくお眠みになれないでせうねえ。」

「では、此の場合私はどうしたらいゝでせう。謝罪するより外に詮方はないでせうか？」と、オブローモフは非常に優しく言つた。

「謝罪るくらゐは子供でもしますわ。また、大勢の中で誰かに足を踏まれた時謝罪られても何もなりませんわ。」と、オリガは再た手巾で顏を撫でながら言つた。

「けれども、オリガさん、若し私の言つた通りだつたらどうします？　若し私の考へが正當で、あなたの愛が――間違ひであつたらどうします。若しあなたが他の男を愛するやうになれば、其時あなたは私を見て赤面なさらなければなりますまい……」

「それで？」と、オリガはオブローモフがどぎまぎするほど鋭い眼附に嘲笑の色を湛へて彼を見ながら訊い

た。

《此の女は俺から何かを見抜かうとするのだ！》と、オブローモフは考へた、《イリヤ・イリイーチ、油斷をするな！》

「（それで とは何です！」と、オブローモフは不安らしくオリガを見ながら、機械的に繰り返したが、どんな考へがオリガの頭の裡に形造られてゐるのか、また若し彼女が間違つてゐるとすれば、此の愛の結果を辯明することが出來ない筈であるのに、彼女は（それで）と云ふ言葉をどう辯解するつもりなのか、その邊を察することが出來なかつた。

けれども、オリガは意識的に或る信念を有つてオブローモフを見てゐた。彼女は自分の考へを自由に支配してゐるらしかつた。

「あなたは（深淵のどん底）に陷ることを怖がつてゐらつしやるのね。」と、オリガは皮肉に反對した。「私があなたに對する愛を失ひはしないかと、そんな將來の恥辱を考へて怖がつてゐらつしやるのね！……あなたはお手紙にも（私はどんなに苦しむか分らない）と書いてゐらつしやるんですもの……」

オブローモフは矢張り未だ十分に覺らなかつた。

「さうです、私が他の男を愛するやうになれば、私は反つて好都合でせうか。私が他の男を愛するやうになるのは、私が幸福になることなのでせうか！　あなたは（私の將來の幸福を豫知して、私の爲めにどんな物でも、生命でさへも犧牲にする覺悟だ）とおつしやつたぢやありませんか？」

オブローモフは凝つとオリガを見ながら、時々大きく瞬いた。

「これはどうも妙な論法になつたものですねえ！」と、オブローモフは驚いた。「實は私は斯う取られようと思はなかつたんです……」

が、オリガは矢張り彼の足先から頭のてつぺんまでを毒々しい眼附で眺めてゐた。

「では、あなたを狂ひにする程の幸福と云ふのは？」と、オリガは續けた。「今迄の朝も晩も此の公園もまた私が（愛してゐます）と云つた言葉も――皆な下らないもので、何の價値もなく、何の犧牲でも苦痛でもないのですか？」

《あゝ、地の中へでも潜り込みたいやうだ！》と、オブローモフは考へた。オリガの考へが分つて來るに從つて、彼は内心の苦痛を感じて來たのであつた。

「ですが、」と、オリガは熱心に訊き始めた。「あなたは書物や勤務や世間の爲めにお疲れなすつたやうに、此の愛の爲めにもお疲れなすつたんでせう。同時に競爭をする他の女も他の愛もないのに、御自分の長椅子の上にゐらつしやるやうに私の傍で突然に睡つてゐらつしやるのでせう。私の聲もあなたを醒すことが出來ないのでせう。心の睡物が嵌つて了つたのでせう。他の女より御自分の夜着の方が、あなたに取つて大事なのでせう……」

「オリガさん、そんなことはありませんよ！」と、オブローモフはオリガから一寸離れながら不滿らしく遮つた。

「何故そんなことはなくつて？」と、オリガは訊いた。「あなたは、私が（間違つてゐるので、結局他の男を愛するやうになる。）とおつしやつたけれど、私はどうかすると反つてあなたが私に對する戀を失つてお了ひなすつたのだと思ふことがあるわ。さうであつたらどうでせう？　私は何と言つて今自分のしてゐることを辯解したらいゝでせう？　若し人々も世間もなければ、私は自分自身に何と言ふでせう？……私も矢張りこんな事を考へて、眠れないことがあるのよ。けれど、將來を推測してあなたを苦しめやしませんわ。だつて將來の幸福を信じてゐるんですもの。けれど、私の幸福は次第に恐怖を抑へてゐます。あなたの眼が私によつて輝いた時や、あなたが丘の上に攀登つて私を捜したり、退屈を忘れたり、私の爲めに熱い日中に花束や書物を買ひに街へいらして下さつたりした時や、私があなたを笑はせたり、あなたに生活慾を起したりしたのを知つた時など、私はどんなに喜んだか分りません……私はたゞ幸福だけを待つてゐるのです。捜してゐるのです。そしてそれを見附けたことを信じてゐます。で、たとへ私が間違つてゐても、たとへあなたのおつしやる通り、私が自分の過誤を泣くやうなことがあつても、少なくとも私の過誤の罪でないことを此處で（と、彼女は片手を胸に當てた。）感じてゐます。運命が幸福を望まなかつたのです。神樣が下さらなかつたのです。けれど、私は將來の涙を怖れません。その涙は無駄になりやしないと思ひます。私はその涙で何かを買ふのです……私はあんなに幸福で……あつたのですもの！……」と、オリガは言ひ足した。

「また幸福になつて下さい！」と、オブローモフは顧ふやうに言つた。

「ですが、あなたは將來の暗黒ばかり見てゐらつしやるのねえ。あなたには、どんな事でも幸福だと思へないのね……それは感謝なさらないからよ。」と、オリガは續けた。「あなたに愛が無いからよ。そしてたゞ……」

「主我主義だからです！」と、オブローモフは言ひ足したが、彼はオリガを見る勇氣もなければ、口を利く勇氣もなく、また赦しを乞ふ勇氣もなかつた。

「何處かへいらつしやい」と、オリガは靜かに言つた。「何處へでも勝手にいらつしやい」

オブローモフはちらりとオリガを見た。彼女の眼には、涙が乾いてゐた。彼女は沈んだ顔附をして下を見ながら、砂の上に洋傘で何か書いてゐた。

「再た仰向に寢てゐらつしやいよ。」と、オリガはやがて附け足した。「一番間違がないし、（深淵に陷る心配）もありませんわ。」

「私は自分を毒し、あなたをも毒し、却つて單純率直な幸福を失つて了ひました……」と、オブローモフは後悔するやうに呟いた。

「クワスでも飲んでゐらつしやれば、毒に當てられるやうなことはなかつたのに。」と、オリガは毒々しく言つた。

「オリガさん！　それは餘り寛大なお言葉ぢやありませんね！」と、オブローモフは言つた。「私はもう意識で自分を罰してゐるのに……」

「でも、あなたは口の先だけで御自分を罰したり、深淵に飛び込んだり、生命の半分を犧牲にして、矢張り

疑ぐつたり、夜分に眠れなかつたりしてゐらつしやるのですもの。あなたは本當に御自分に優しく用心深く、そして齷齪(こせく)してゐらつしやるのねえ！　餘り先の事を心配し過ぎるのだわ！……」

《確にさうだ。此の女は何と云ふ單純な女だらう！》と、オブローモフは考へたが、恥かしいのでその考へを口に出さなかつた。

どうしてオブローモフがオリガを解釋することが出來ずに、生活し始めたばかりのオリガが自分で自分を解釋したのだらう？　オリガの發達は何と云ふ速さだらう！　近頃まで彼女はまだ子供らしい觀察をしてゐたのに。

「私達には、もう何もお話をする事はありませんわ。」と、オリガは起ち上りながら言つた。「イリヤ・イリイーチさん．左樣なら。御機嫌……良う。これがあなたの幸福なのねえ。」

「オリガさん！　さうぢやありません、決してさうぢやありません！　もう悉皆分まり(すつかり)したから、どうか私を追はないで下さい……」と、オブローモフはオリガの手を捉へて言つた。

「私に何　御用なの？　あなたに對する私の愛が間違ではないかとあなたは疑ぐつてゐらつしやるのでせう。私にはあなたの疑念を解くことは出來ませんわ。或は本當に間違かも知れませんから……」

オブローモフはオリガの手を放した。再た彼の上に小刀(ナイフ)が閃めいた。

「どうしてあなたには分らないのでせう？　どうしてあなたに通じないのでせう？」と、オブローモフは再た顏に疑ひの色を浮べながら訊いた。「どうしてあなたの疑念が解けないのでせう？……」

「私は何も疑ぐつちやゐませんわ。私は昨日自分の感じてゐることをあなたに言ひましたわね。けれど、一年經つてそれがどうなるか分らないわ。一つの幸福に續いて第二、第三、第四と幸福が來るものでせうか？」と、オリガは大きな眼でオブローモフを見ながら訊いた。「どうでせう？　あなたは私より澤山の經驗を有つてゐらつしやるのですが。」

けれども、オブローモフはもうオリガの此の考へに同意したくなかつたので、默つたまゝ片手でアカシヤの木を搖つてゐた。

「いゝや、愛はたゞ一度發るだけです！」と、オブローモフは小學校の生徒のやうに敎はつたばかりの一句を繰り返した。

「それ御覽なさい、私もさうだと信じますわ。」と、オリガは附け足した。「若しさうでなかつたら、私はあなたに對する愛を捨てるかも知れません。私は間違の爲めに苦しむかも知れません。あなたも矢張りさうよ。そして私達は別れるかも知れません！……けれど二度も三度も愛するなんて……そんなことがあるものですか。そんなことはないわ……私はそんなことを信じたくないわ！」

オブローモフは溜息を吐いた。此の「かも知れません」と云ふ言葉が、彼の精神(こころ)を掻き亂すのであつた。彼は考へ込んでオリガの後から隨いて行つた。が、一足毎に氣持がよくなつて來るのを感じた。彼が夜考へた間違と云ふのは、非常に遠い未來の事であつた……《此の間違は獨り愛ばかりではない。生活全體がさうだ……》と、突然に彼は考へた。《凡ての場合は、皆な間違として衝突(ぶつか)り合つてゐるのだ。何時間違でないものが

出來よう？　俺はどうしたのだらう？　まるで盲人のやうだつた……》

「オリガさん」と、オブローモフは二本の指で一寸オリガの身體に（オリガは立止つてゐた。）觸りながら言つた。「あなたの方が私より餘程悧巧です……」

オリガは頭を振つた。

「いゝえ、私はあなたより單純で、大膽です。あなたは何を怖かつてゐらつしやるの？　あなたは愛の裏切を眞面目に信じてゐらしたではありませんか？」と、オリガは確信してゐるらしく傲然と言つた。

「今ではもう私も怖れません！」と、オブローモフは元氣よく言つた。「あなたと一緒に受ける運命なら怖くありません！」

「其の言葉は、近頃何かで讀んだことがあるわ……シューにあつたのかしら。」と、オリガは突然に彼の方へ振り返つて皮肉に言つた。「けれど、あれは女が男に言つたのよ……」

オブローモフはさツと顏を赧らめた。

「オリガさん！　どうか昨日の通りになつて下さい。」と、オブローモフは願つた。「私は（間違）を怖れません。」

オリガは默つてゐた。

「さうして戲けますか？」と、オブローモフは悸々と訊いた。

オリガは默つてゐた。

「ぢや、言ふのがお厭なら、何か印を下さい……ライラックの枝でも……」

「ライラックは……過去のもので凋れて了ひましたわ！」と、オリガは答へた。「これ、此廻り凋れてゐます！」

「過去のもので凋れて了つたんですつて！」と、オブローモフはライラックを眺めながら繰り返した。「ですが手紙も過去のものですよ！」と、彼は突然に言つた。

オリガは頭を横に振つた。オブローモフはオリガの後から隨いて行きながら、手紙のことや昨日の幸福のことや、凋れたライラックのことなどを考へた。

《實際、ライラックは凋れてゐる！》と、彼は考へた。《何故俺はこんな手紙を書いたんだらう？　何の爲めに俺は、夜通し眠らずに朝になつてこんな手紙を書いたのだらう？　けれども、今ではもう心が再た落着いた……（彼は欠伸をした）……馬鹿に眠くなつた。が、若し手紙さへ書かなけりや、こんな事はなかつたのだ。オリガさんは泣かなかつたらう。今迄のやうにしてゐられたことだらう。二人は此の並木路に靜かに腰掛けて、お互に見交しながら幸福のことを語り合つたことだらう。そして今日のやうにまた明日も……》オブローモフは口一ぱいに欠伸をした。

更に、また彼の頭には、若し此の手紙が目的を達したら、若しオリガが彼の考へに同意し、彼と同じく間違と遠い將來の嵐とに驚いたら、そして若し彼の所謂經驗と賢明とを聞き、別れることに贊成して、お互に忘れて了つたら、どう云ふ事になつたらうと云ふ考へが突然に浮んだ。

あゝ、其の時はどうなつたらう！　オリガに別れて街の新らしい借間へ行かなければなるまい！　それか

らは再た長い夜と退屈な翌日と堪へ切れない翌々日とが續くことだらう。そしてどの日もどの日も益々蒼白めて行くだらう……

どうしてそんな事を忍べよう？　それは死だ！　が、若しそんな事にでもなつたら、オブローモフは病氣になるに違ひない。彼は別れたくなかつたのだ。だから彼は別れてゐられずに、以前の通りになつて呉れと申し込むだらう。《どうして俺は手紙なんか書いたのだらう？》と、オブローモフは自問した。

「オリガ・セルゲーヴナさん！」と、オブローモフは言つた。

「なに？」

「私が今迄言つたことに、も一つ附け足さなければならないことがありますがね……」

「どんな事なの？」

「手紙を書く必要は、些ともなかつたと云ふことです……」

「そんなことはないわ。あの手紙は是非必要でしたわ。」と、オリガは言つた。

オリガは振り返つて彼の顔附と、彼から突然に睡魔が去つたのと、彼の眼が驚きの爲めに擴がつたのとを見ながら笑ひ始めた。

「必要ですつて？」と、オブローモフは其の吃驚した眼をオリガの背中に向けながら徐かに繰り返した。が、オリガの背中には外套の二つの房があるだけであつた。

《どうして此の女は泣いたり、詰責つたりしたのだらう？　狡猾な手段かも知れない。》けれども、オリガが

狡猾でないことは、彼にもよく分つてゐた。

たゞ多少制限された女だけが、狡猾なことを言つたり、吝なことをしたりするものだ。斯う云ふ女達は率直な智慧を有つてゐない爲めに、毎日の小つぽけな生活を發條仕掛けで狡猾に動かし、自分の家庭上の交際をレース糸のやうに編んでゐることに氣が附かないのは無論のこと、自分達の周圍に生活の主要な線が畫されて、其の線を越えて出ようとしても出ることが出來ないことにも、其の線の外でお互に交際することが出來ないやうになりつゝあることにも氣が附かないのである。

狡猾は小さい貨幣のやうなものである。その貨幣で澤山に品物を買ふことは出來ない。小さい貨幣では二時間ばかりしか生命を繋げないやうに、狡猾では彼方で何かを隠蔽したり、此方で嘘を吐いたり、欺むいたりすることが出來るくらゐのもので、遠い地平線上を見たり、重大事件の端緒や結果を作る場合には、狡猾は何の役にも立たないものである。

狡猾は近視眼である。鼻の下だけならば良く見ることが出來るが、遠方の事は分らない。だから他の者が仕掛けた罠に陥るやうな事がよくある。

オリガは單純な智慧を有つてゐた。で、焦眉の問題ばかりではなく、どんな問題でも明瞭に易々と解決するのであつた！　彼女は事件の眞相を直ぐに見拔き、近路を通つて其の眞相に迫ることが出來た。

けれども、狡猾は鼠のやうに周圍を駈け廻つて直ぐに隠れて了ふ……オリガの性格はさう云ふものではなかつた。何と云ふ珍らしいことだらう？

「何故手紙が必要なんです？」と、オブローモフは訊いた。

「何故ですつて？」と、オリガは繰り返し、快活な顔附をして素速くオブローモフの方へ振り向いた。彼女には、一歩々々とオブローモフを窮地に追ひこむのが面白かつたのである。「それは斯う云ふ理由よ。」と、やがて間を置いて彼女は言ひ始めた。

「あなたが夜も寝ないで、私の爲めに手紙をお書きなすつたからよ。私も矢張り主我主義者ですもの！　これが第一の理由ですわ……」

「では、何故あなたは今私をお責めなすつたのです？　もう私に同意してゐらつしやるのに。」と、オブローモフは遮つた。

「あなたが苦痛をお作りになつたからよ。私は自分で苦痛を作つたことはありませんが、それでもなほ其の苦痛がひよい〳〵出來るのです。でも、私はもう苦痛がなくなつたのに喜んでゐました。ところが、あなたはそれを作つて、私より先に味つておしまひなすつたんですもの。あなたは――悪い方よ！　ですから私はあなたを責めたのよ。それから、あなたのお手紙は感情と思想との戯れよ……あなたは、御自分の思ふ通りに昨夜と今朝とをお過しなさらなかつたのです。けれど、あなたのお友達の私は、あなたが生活なさることをどんなに望んでゐたでせう……これが第二の理由よ。第三には……」

オリガはオブローモフに近づいた。で、オリガの血が彼の心臓と頭の中とに流れ込むかと思はれた。オブローモフは昂奮を感じ乍ら重苦しさうに息を吐き始めた。が、オリガは彼の眼を眞正面に見た。

「第三に、あのお手紙の必要な理由は、丁度鏡に映つたやうに、あなたの優しさとあなたの警戒心と私に就いての御心配と私の幸福に對する危惧とあなたの純潔な良心とが……アンドレイ・イワヌイチさんがあなたに就いて私に教へて下すつたものが、残らず現はれてゐたからですわ。私はそれを愛し、それが爲めにあなたの懶惰性……冷淡を忘れたのです……あなたは知らず識らず自分をあの手紙に現はしてゐらつしやるのよ。イリヤ・イリイーチさん、あなたは主我主義者ではなくつてよ。あなたがあんな事をお書きなすつたのは、別れる爲めではなかつたのよ。あなたは別れる事を望んでゐらつしやらないのよ。あなたがあれをお書きなすつたのは、私を欺むく事を怖れてゐらつしやるからだわ……潔白があの手紙を書かせたのだわ。でなければ、あの手紙は私を侮辱したに違ひありませんわ。私も泣きはしなかつたでせう――自尊心から！　此の通り、私は何故あなたを愛するかと云ふことを知つてゐるのです。私は間違を怖れやしません。私はあなたを間違なく……」

オリガは斯う言ふ間、輝かしい顔附をしてゐたが、それはオブローモフにも分つた。オリガの眼は愛の勝利と自分の力の意識とに輝いてゐた。頰には、二つの赤い薔薇色の點が現はれてゐた。彼も、彼も此の現象の原因であつた！　彼はその潔白な心の働きで、彼女の精神に此の火花と此の遊戯と此の光輝とを投げ込んだのである。

「オリガさん！　あなたは……女と云ふ女の中で一番美しい方です。あなたは、世界ぢうの女の中で第一です！」と、オブローモフは歡ばしさうに言つて、夢中に兩手を擦りながらオリガに頭を下げた。「どうか一度

接吻をさせて下さい、言ひ現はし難い幸福の印に。」と、彼は譫語のやうに囁いた。

と、オリガは忽ち一足後へ退つた。嚴かな輝きと顏の赤味とは消えて了つた。優しい眼は怖ろしく輝いた。

「厭よ！　厭よ！　近寄つちや厭よ！」と、オリガは吃驚して、殆んど恐怖を感ずるものゝやうに、手と洋傘とをオブローモフの前へ突き出しながら言つた。そして息も吐かず、怖ろしい身振と怖ろしい眼附とで半ば振り返つたまゝ植ゑ込まれるか、それとも化石でもしたかのやうに立止つた。

オブローモフは急に謹慎した。彼の前に立つてゐる者は優しいオリガではなくして、辱かしめられた尊大と憤怒の女神が、脣を喰ひ締め、眼を電光のやうに光らせながら立つてゐるやうであつた。

「赦して下さい！……」と、オブローモフはどぎまぎしながら悸々と呟いた。

オリガは徐かに顏を向け變へ、怖ろしさうにオブローモフを肩越しに見ながら歩き出したが、オブローモフは別段に變つた樣子もせずに　かを浴せられた犬が、尾を捲いてゐるやうに靜かに歩いてゐた。

オリガは一足歩む毎にオブローモフを見た。彼女は噴き出したくなるのを堪へながら益々落着いて歩き、ただ時々身體を顫はせるだけであつた。薔薇色の點はもう兩方の頰に現はれてゐた。

オリガが歩いて行くに從つて、其の顏は晴やかになり、其の呼吸は落着いて來た。彼女はまた落着いた歩調で歩き出した。オリガは、オブローモフにとつて(厭よ)と云ふ言葉がどのくらゐ神聖なものであるかを見て取ると、彼女の怒の發作はだん〳〵と鎭まつて、次第に憐愍の情に代るやうになつた。彼女は益々靜かに足を運んだ……

オリガは自分の激昂を鎭めたかつたので、話題を考へ始めた。

《餘り不眞面目であつた！　之が本當の間違ひだ！　(厭よ)あゝ、ライラックは凋れた。》と、オブローモフは垂れ下つてゐるライラックを見ながら考へた。《昨日も凋れた。手紙も矢張り凋れた。そしてあの瞬間は、俺に良い點があると女が初めて天來の聲のやうに言つた其の瞬間は、俺の一生の中で一番幸福な時であつた。……》が、その瞬間も凋れて了つた。

オブローモフはオリガを見た。彼女は立つて、眼を伏せたまゝ彼を待つてゐた。

「私、お手紙を頂きますわ！……」と、オリガは靜かに言つた。

「手紙は凋れたんです！」と、オブローモフは手紙を渡しながら悲しさうに言つた。

オリガは再たオブローモフに近づいて、更に頭を垂れた。彼女の睫毛はすつかり閉ぢられてゐた……オリガは身慄ひをしてゐるやうであつた。オブローモフは手紙を渡した。オリガは頭を擡げなかつた。其處を動きもしなかつた。

「あなたには吃驚させられましたわ。」と、オリガは優しく附け加へた。

「オリガさん、赦して下さい。」と、オブローモフは呟いた。

オリガは默つてゐた。

「(厭だ)と言はれた時には、私も驚きましたよ……」と、オブローモフは悲しさうに言つて、溜息を吐いた。

「それも今に凋れますわ！」と、オリガは顏を赧らめながら辛つと聞えるくらゐに言つた。

オリガはオブローモフに恥かしさうな、而も愛嬌のある視線を投げ、彼の兩手を取つてそれを自分の手で固く握り締めると、こんどは自分の胸に押し着けた。

「ね、酷く動悸してるでせう！」と、オリガは言つた。「あなたには吃驚させられましたわ！　さ、もういゝわ！」

と、彼女は彼を見もせずに向きを變へると、衣服の前を少し引き上げながら路に沿うて駈け出した。

「何處へ行くんです？」と、オブローモフは言つた。「私は疲れてゐますから、あなたに隨いて行けません……」

「放棄つて置いて下さい。駈けて行つて、歌を、歌を、歌を唄ふのよ！……」と、オリガは燃えるやうな顏をして言つた。「私は胸苦しいんですの、痛い程に！」

オブローモフは一處に立止つたまゝ飛び翔る天使のやうなオリガの後を長い間見送つてゐた。

《あの瞬間も凋れるだらうか？》と、オブローモフは悲しさうに考へたが、自分ながら歩いてゐるのか、立止つてゐるのか分らない程茫然としてゐた。

《ライフツクは過ぎ去つた。》と、再た彼は考へた。《昨日も過ぎ去つた。夜も幻影も苦悶も矢張り過ぎ去つた。さうだ、あの瞬間もライフツクの樣に過ぎ去るだらう！　だが、今夜が過去れば、同時に翌る朝が輝くのだ。》

「いや、これはをかしい！」と、オブローモフは我を忘れて聲を出した。「愛も矢張り……愛もだらうか。けれども愛は熱い太陽のやうに、愛されてゐる者の上に懸つてゐて、愛の熒圍氣の中には、動く物も無ければ休んでゐる物も無いのだと俺は思つてゐた。そして愛には平靜がない。愛は何時も前へ前へと何處かへ進んでゐるものだと思つてゐた……（生活全體のやうにつと、シトーリツは言つた。それに愛に向つて（停れ！）と言ふやうな、イエス・ナビンが生れたこともまだ聞かない。明日はどうなることだらう？」と、オブローモフは悸々しながら自問して、頽然と沈んで家へ歸つた。

彼はオリガの窓の傍を通る時、オリガがシューベルトを歌つて胸の苦痛を和らげてゐるのを聞いた。その聲は、丁度幸福に充たされて歓欷いてゐるやうであつた。

あゝ！　世の中に生きてゐるのは、何と云ふ幸福なことだらう！

十一

オブローモフは家へ歸ると、シトーリツからの手紙を見出した。其の手紙は（此時を逸すれば、永久に機會は來ない。）と云ふ言葉で始まり、矢張り同じ言葉で終つてゐた。それからなほ到る處に、安坐を責める言葉があつた。シトーリツが行かうとしてゐるスウキツルへ屹度來るやうにと云ふことも書いてあつた。最後には、イタリヤに來いと書いてあつた。

若し外國へ來なければ、村へ行つて自分の仕事を整理し、百姓の放縱な生活を誡め、自分の收入を整頓し、新築の指圖を自分でするやうにと書いてあつた。

（此時を逸すれば、永久に機會は來ない、と言ふ例の言葉を忘れ給ふな。）と言つて彼は手紙を結んでゐた。

「此時、此時、此時！」と、オブローモフは繰り返した。「アンドレイは俺の生活にどんな詩的な事が演ぜられて居るか知らないのだ。彼は此の上何をしようと思つてるのだらう？　俺はどう云ふ場合にも、あんなに忙しくしてはゐられない。まア遣つて見るがいゝ！　フランス人のことやイギリス人のことを讀んで見ると、彼等は何時も働き、何時も仕事のことばかり考へてゐるやうだ！　歐羅巴中を駈けずり廻つたり、アジヤやアフリカにさへ行つたりしてゐるやうだ。が、そのくせ些とも用事はないのだ。寫生をしたり、古物の採集をしたり、獅子狩をしたり、蛇退治をしたりするくらゐのものだ。こんな事をしない者は、安樂に悠然と家に坐つてゐて、友人や婦人達と朝飯を食つたり、晝飯を食つたりしてゐる――之が彼等の仕事なんだ！　俺がどうして囚人のやうだらう！　たゞアンドレイだけが(働け、馬のやうに働け！)など〻考へてゐるのだ！　が、何の爲めに働くのだ！　俺は腹一ぱいに食ひ、温く着てゐる。だが、オリガは再た俺がオブローモフカ村へ行かうと思つてるのではないかと訊いてゐた……」

オブローモフは手紙を書いたり、種々な事を考へたり、建築師の許へ出かけたりした。程なく彼の小さい卓子の上には、家と庭園との設計圖面が置かれた。家は家族の住宅で、廣々としてゐて、それには二つの露臺が附くことになつてゐる。

《此處に俺が、此處にオリガが、此處に寢室が、(子供の寢室)が……》と、彼はにこ〳〵しながら考へた。(だが、百姓達は、百姓達は……》と、彼の頭からは微笑が消えて、其の額には、心配の皺が出來た。隣の人が手紙をよこして詳しく知らせて來た。耕作のことや、穀物のことを書いてゐる……何と云ふ詰らない事だ！

それにまだ皆なで金を出し合つて商業の盛んな大きな村へ道路を作る。それには、橋を架けなければならぬから、三千留出して呉れと申込んで來た。そしてオブローモフカ村を抵當に金を借りてはどうだと言つてゐる……だが、俺には果してそんな事をする必要があるかどうか分らない……皆なに笑はれはしまいか？　彼奴は嘘を言つてるんぢやないだらうか？……彼奴は潔白な男だと言ふ話だ。シトーリツは彼奴を知つてるが彼も矢張り瞞されないとは限らない。大金を棒に振つて了つたらどうする！　三千留――大した金額だ！　何處に其の出路がある？　出處はない。怖ろしいことだ！　それからまだ幾らかの百姓達を新開地へ遣らなければならないと書いて、返事を至急呉れと言つてゐる――何時も至急返事を呉れと言ふ。が彼奴は財産を抵當に入れる爲め、一切の書類を裁判所へ送らうとしてゐる。(私儀委任狀を裁判所へ發送致すべく候に付、旦那樣に裁判所へ御出での上、なほ御證明なし被下度)――どうしようと云ふのだらう！　が、俺は何處に裁判所があるか、また裁判所の扉は何方にどう云ふ風に開くかも知らない。》

オブローモフは次の週間にも隣の人へ返事を出さなかつた。それにオリガは裁判所へ行つたかと彼に訊いた。近頃は近頃で、シトーリツが再た彼とオリガとに手紙をよこして(彼は何をしてゐるか？)と訊いて來た。

殊に、オリガは自分の友の活動をたゞ外部から觀るだけでは承知が出來なかつた。無論オリガの眼に映ずる範圍だけであるが、彼女はオブローモフが快活に見てゐるか、元氣よく彼方此方と歩き廻つてゐるか、約束の時に森へ來るか、どのくらゐ街の出來事や人々との對話に注意を拂つてゐるかと云ふやうなことを見てゐた。殊に、オリガはオブローモフが生活の主要な目的を忘れやしないかと一番熱心に監視してゐた。また

オリガがオブローモフに裁判所へ行つたかどうかと訊いたのは、シトーリツに友の消息を報告する爲めであつた。

夏の眞最中であつた。七月も過ぎようとしてゐた。毎日好い天氣が續いた。オリガとオブローモフは、片時も離れたことがなかつた。彼は朗らかな日には、オリガと一緒に公園へ行つた。暑い日中には、彼女と一緒に森へ行つて、松の間で日を送つた。彼はオリガの脚下に坐つて、彼女に書物を讀んで聞かせるのであつた。オリガはもう他の布片をカンバスに張つて刺繍をしてゐた――こんどはオブローモフの爲めであつた。

彼等も矢張り暑い夏のやうな狀態にあつた。で、時々雨雲が押し寄せて來るかと思ふと、直ぐに過ぎ去つて了ふのであつた。

若しオブローモフが重苦しい夢を見て、その心臟を疑念が訪づれるやうなことがあると、オリガは天使のやうに彼の番をしてゐた。オリガは其の晴々しい眼で彼の顏を見てゐた。そして彼の心に蹲つてゐるものを見拔いて了ふ。と、凡ては再た平靜に歸り、感情も再た河のやうに悠然と流れて、その上には新らしい空模樣が反映するのであつた。

人生や愛や其他種々なものに對するオリガの見解は、益々はつきりし、益々一定して來た。オリガは以前よりも固い確信を以つて自分の周圍を見てゐた。で、將來を思つて心を惱まされるやうなことはなかつた。オリガには新らしい方面の智慧と新らしい性格とが發達した。その性格は、詩的に複雜に深刻に現はれることもあれば、また常規的にはつきりと靜かに、そして自然に現はれることもあつた……

オリガには、一種の頑固があつた。其の頑固は、運命の凡ゆる暴威を壓へるばかりか、オブローモフの懶惰性と冷淡をも動かすものであつた。若しオリガに或る計畫が現はれると、その計畫は直ぐ實行になつた。オリガは其の計畫のことばかり話した。たとへ話さなくつても、また實行しなくつても、オリガは其の計畫を變へもしなければ忘れもせず、捨てもしなければ失ひもせずに、自分の求むるものを斷えず考へながら、それを實現して行つた。

オブローモフは彼女が何處からこんな力とこんな才能とを獲たかを知ることが出來なかつた。オリガはどんな事件が現はれても、それをどうすればいゝかと云ふことを知つてゐた。またそれを巧みに片附ける才能をも有つてゐた。

《あんな才能を有つてゐるのは、》と、オブローモフは考へた。《オリガさんの片方の眉が平らにならずに、いつも少し釣り上つてゐて、其の上にあの細い辛つと見えるくらゐの皺があるからだ……彼處に、あの皺の中に、オリガさんの頑固が巣食つてゐるのだ。》

オリガの顏に、どんな平和な輝かしい表情が現はれても、此の皺は消えなかつた。眉も平らにならなかつた。けれども、オリガには外面的力もてきぱきした方法や得手もなかつた。また計畫に對する執拗と頑固は、一足もオリガを女の圈內から引き出さなかつた。

オリガは阿諛者になるのが嫌ひであつた。下らない崇拜者に齒の浮くやうな言葉をかけたり、刺發な智慧で滿堂のお客を驚ろかせて、隅にゐる誰かに、偉い！　偉い！　と叫ばれたりしたいとも思はなかつた。

寧ろ彼女には多くの女に特有な臆病心があつた。尤も、オリガは鼠を見て吃驚したり、椅子から落ちて氣絶をしたりしなかつたが、それでも矢張り家から遠くへ行くのを怖がつたり、怪しいと思ふやうな百姓を見てびく〳〵したり、夜になると盜人が入らないやうに窓を閉めたりした――斯う云ふことは、皆な女にありがちの事である。

それから、オリガは同情と憐憫の念に富んでゐた。彼女は涙を呼び出すのをさう六ヶ敷い事と思はなかつた。彼女の心は非常に柔らかであつた。オリガはまた優しい愛を有つてゐた。彼女は誰に對しても優しく、そして愛嬌があつた――一言で云へば、彼女は女であつた！

どうかするとオリガは自分の言葉の中に、諷刺を仄めかすことがあつた。が、此の諷刺の中にさへ一種の禮儀と優しく愛らしい智慧とが輝いてゐた。で、誰でも喜んでオリガの諷刺の下に額を持つて行つた。

其の代り、オリガは身を切るやうな風を恐れず、夕方薄着をして歩いても――何の障りもなかつた！ オリガは健康であつた。食事も隨分進む方であつた。オリガには、好きな食物があつた。彼女はその作り方も知つてゐた。

尤も、大抵の女はこんな料理を知つてゐるが、大抵の女は場合に應じた料理の仕方を知らない。たとへ知つてゐても、たゞ習つたり、聞いたりしたことだけで、何故さうしなければならないかと云ふ理由を知らない。だから彼女等は習つたり、聞いたりした通りに料理をするだけで、二言目には叔母だの從姉だのを引合ひに出すのである。

また大抵の女は、何を望まなければならないかと云ふことさへ知らない。たとへ自分の要求を決めても、その要求はどうでもいゝ程度に弱いものである。之は彼女達の眉が溫柔しく弧形をなしてゐて、指で引つ張ることが出來るのと、額に皺がない爲めであらう。

オブローモフとオリガとの間には、他人に分らない不思議な關係があつた。どんな眼附をしても、他人の居る處でどんな無意味なことを言つても、その眼附なり言葉なりは、彼等二人にとつて特別な意味を有つてゐた。そして彼等は何事によらず、其處に愛の暗示を認めてゐた。

オリガも益々自信を強めて行くに從つて、卓子の前で自分の經驗に似寄つた誰かの戀物語を聞く時など、時によると酷く昂奮することがあつた。またどんな戀物語でも、皆な同じやうなものだと思つて、顏を赧らめることもあつた。

オブローモフもお茶の時などにこんなことを仄めかされると、狼狽て乾麵麭を一摑み摑んで、誰かに笑はれることがあつた。

彼等は鋭敏に、そして注意深くなつた。どうかすると、オリガはオブローモフに會つたことを叔母に言はないやうなこともあつた。オブローモフも家を出がけには、街へ行くんだと言つて、其の實公園へ行くこともあつた。

然し、オリガの智慧は幾ら明晰でも、幾らオリガは注意して周圍を見廻しても、また幾ら健康で晴々してゐても、彼女も矢張り新らしい病的な徵候を感ずることがあつた。オリガは時々不安に襲はれた。そして其

の不安を種々に考へて見ても、それをどう解釋して良いか分らないことがあつた。

オリガは暑い日中に、オブローモフに手を取られて歩いてゐる時など、どうかすると、頽然とオブローモフの肩に凭れかゝり、一種の疲勞を感じながら、頑固に默つたまゝ機械的に歩くことがあつた。さうした時には、彼女は元氣を失ふ。生氣を失なつた彼女の疲れた眼は、凝つと据つて何處か一點を見詰めてゐる。オリガには自分の眼を他の物へ向け變へるさへ大儀なのである。

オリガは重苦しさを感ずる。何かで胸を壓へられてゐるやうで不安になる。オリガは肩から外套や肩掛を脱ぐ。が、斯うしても少しも利き目がない——矢張り壓迫を感ずる。矢張り息苦しくなる。オリガは木の下に横にでもなつた時など、幾時間もさうして寢そべつてゐることがあつた。

オブローモフは驚いて、木の枝でオリガの顏を煽ぐ。が、オリガはうるさいと云つた風にオブローモフの心遣ひを斥けて手を振る。

やがて、オリガは突然に溜息を吐き、意識的に自分の周圍を見廻はし、オブローモフを眺め、彼の手を握つて莞爾とする。と、再た元氣と笑顏とが現はれる。その時、オリガはもう我に歸つてゐるのである。

殊に、ある晩オリガは此の怖ろしい狀態に、つまり一種の愛の睡遊病に陷つて、新らしい世界をオブローモフに見せたことがあつた。

息苦しく暑かつた。林からは生溫い風が、ざわ〳〵と吹いてゐた。空は重々しい雲で閉ぢられてゐた。周圍は益々暗くなつた。

「雨になりますね」と、男爵に言つて家へ歸つた。

叔母は自分の室へ入つた。オリガは沈んだまゝ長い間ピアノを彈いてゐたが、やがてそれを止めた。

「彈けないわ。指が慄へる上に、何だか息苦しいわ」と、オリガはオブローモフに言つた。「庭を歩きませう。」

二人は長い間手を取り合つて、默つたまゝ並木路を歩いた。オリガの手は濕々して柔かであつた。二人は公園へ入つた。

木と灌木とは、暗い一つの塊に融け合つてゐた。二足先は何も見えなかつた。たゞ砂を敷いた路だけが、白い條のやうに見えてゐた。

オリガは凝つと暗闇の中を見入つてゐたが、突然にオブローモフへ抱き付いた。二人は默つて歩いた。

「私、怖いわ！」二人が殆んど索るやうにして狹い並木路の見透せない暗い林の壁の間に入つた時、オリガは溜息を吐いて突然に斯う言つた。

「何がです？」と、オブローモフは訊いた。「オリガさん、怖いことアありません。私が附いてゐますから。」

「私にはあなたも怖いわ！」と、オリガは囁くやうに言つた。「けれど、何だか氣持よく怖いわ！　心臟の動悸が止つてゐてよ。觸つて御覽なさい。こんなよ。」

が、オリガは身慄をして周圍を見廻した。

「何でせう、何でせう？」と、オリガは身振をして、兩手でオブローモフの肩をしつかり捉まへながら囁いた。「今、暗闇の中で誰かチラッとしたのを御覽にならなくつて？……」

オリガは益々彼にしがみついた。

「誰もゐませんよ……」と、オブローモフは言つたが、矢張りぞく〳〵した。

「私の眼を速く何かで蔽うて下さい……しつかりと！」と、オリガは囁くやうに言つた。「あゝ、もう何も見えない……あれは神經だつたのね」と、彼女はどき〳〵しながら附け足した。「あら、再た！　御覽なさい、あれは誰でせう？　何處かの腰架に腰掛けませう……」

オブローモフは手索りで腰架を搜し出して、オリガを其處へ腰掛けさせた。

「オリガさん、家へ行きませう」と、オブローモフは勸めた。「あなたは身體の加減が良くないのです。」

オリガはオブローモフの肩に頭を載せた。

「いやですわ、此處の方が空氣が綺麗ですから」と、オリガは言つた。「私の此處が、心臟のところが、壓し着けられるやうよ。」

オリガはオブローモフの頸に熱い息を吹きかけた。

オブローモフはオリガの頭を手で觸つて見た。頭は熱かつた。胸は重苦しさうに息をしながら度々溜息を吐いて、その苦痛を和らげてゐた。

「家へ行つた方が良くはありませんか？」と、オブローモフは不安らしく言つた。「癡なけりや不可ませんよ……」

「いやです、いやです、打棄つて置いて下さい。構はないで下さい……」と、オリガは落膽したやうに、そして辛つと聞えるくらゐに言つた。「私の此處が燃えてるんですから……」と、オリガは胸を指差した。

「そんなことを言はずに、家へ行きませう……」と、オブローモフは急がせた。

「まア少し待つて頂戴。今直ぐ良くなるわ……」

オリガはオブローモフの手を握り、時々顔を近づけてオブローモフの眼を見ながら何時までも默つてゐたが、遂々泣き出した。

最初は靜かであつたが、終には啜泣きをし出した。オブローモフはおど〳〵した。

「オリガさん、どうか速く家へ行つて下さい！」と、彼は不安らしく言つた。

「大丈夫よ」と、オリガは啜泣きをしながら答へた。「構はないで、泣き度いだけ泣かして置いて下さい……涙で火が消えて幾らか氣分が良くなるでせうから。之は皆な神經の所爲なの……」

オブローモフは暗闇の中に、オリガが苦しさうに息をしてゐるのを聞き、彼の手に滴たるオリガの熱い涙と彼の手を痙攣的に握り締めるオリガの手とを感じた。

オブローモフは指も動かさなければ、息も吐かなかつた。が、オリガの頭は彼の肩に横はつてゐた。息は燒くやうに彼の頸に吹きかけられた……彼も矢張り身慄ひをしてゐたが、脣を彼女の頸に押しつける勇氣を有たなかつた。

やがて、オリガは次第に靜かになり、彼女の呼吸も平らになつて來た……オリガは默り込んで了つた。オブローモフはオリガが眠つたのではないかと思つたので、身動きするのを怖れた。

「オリガさん！」と、オブローモフは囁くやうに叫んだ。

「なに？」と、オリガも囁くやうに答へてホッと溜息を吐いた。

「もう……癒つたわ……」と、オリガは頽然として言つた。「よほど樂になつたわ。自由に呼吸が吐けるやうになつたわ。」

「歸りませう」と、オブローモフは言つた。

「歸りませう！」と、オリガは眠々ながら繰り返した。「ねえオブローモフさん！」と、やがて優しく囁き、彼の手を握り、彼の肩に凭り掛つたまゝ蹌踉々々しながら家へ行つた。

客間へ入ると、オブローモフはオリガを見た。彼女は元氣がなかつた。が、宛然夢でも見てゐるやうに異樣に、そして無意識に莞爾とした。

オブローモフはオリガを長椅子に坐らせて、その傍に跪づき、幾度となく潔い感動の中に、オリガの手に接吻した。

オリガは何時までも同じ微笑を湛へながら、両手を握り合つてオブローモフを見てゐた。そして彼が扉口から出て行くのを見送つた。

オブローモフは扉口の處で振り返つた。オリガは矢張り彼の後を見てゐた。彼女の顏には矢張り例の疲勞と憐れつぽい微笑とが現はれてゐた。オリガは如何にも其の微笑を消すことが出來ないものゝやうであつた……。

オブローモフは考へ耽りながら歸つた。彼は何處かであんな微笑を見たことがあつた。彼は何かの繪にあんな微笑を浮べた女が描かれてあつたことを想ひ出した……が、それがコルデリヤでないことだけは、確かであつた。

翌る日、彼は容態を訊きに遣つた。使者は斯う云ふ報告を齎らした。

「有難う御座います。今日は食事を勸められてゐます。晩には皆なで五露里の所まで花火を見物に行くつもりです。」

オブローモフは信じられないので、自分で出かけて行つた。オリガは小花のやうに晴々しかつた。眼には輝きと活氣とが現はれてゐた。頰には二つの薔薇色の星が紅くなつてゐた。聲には平常の通り響があつた。オリガはオブローモフが自分に近づいた時、突然にどぎまぎし出して、も少しで叫ばうとした。殊に、オブローモフが今日は如何ですか？　と訊いた時など、酷く昂奮した。

「あれは、一寸した神經の攪亂ですわ」と、オリガは狼狽て言つた。「ma tante は、速く寢るようにしなけりやいけないと言つてゐます。こんなことは、暫く私に……」

オリガは皆な言つて了はないうちに、もう赦して貰ひ度いと言つた風に話を切つた。が、どうして心の惑亂を感ずるのかと云ふことは――自分ながら分らなかつた。昨日の晩と此の攪亂とを想ひ出すことが、何故彼女を嚙み、彼女を燒くのであらう？

オリガには、何か恥かしいものがあつた。誰かを見ると悲しかつた。それは自分でもなければ、オブロー

モフでもなかつた。が、後でオリガにはオブローモフが益々愛らしく益々慕はしくなつたことや、自分が彼に泣き度い程引き附けられるのを感じてゐることや、自分が昨晩から彼と不思議な親密な關係に入るやうになつたことが分つた。

オリガは長い間眠らなかつた。朝も長い間心を波立たせながら、並木路に沿うて公園から家まで幾度となく往復した。そして何時までも考へてゐた。種々なことを想像した。或は顰めたり、或は突然に昂奮して顏を赤くしたり、何かに莞爾としたりした。が、矢張り何事をも解決することが出來なかつた。

《あゝ、ソーニチカ！》と、オリガは悲しさうに考へた。《何と云ふ幸福な女だらう！　彼の女なら直ぐに決めて了ふんだけれど。》

では、オブローモフは？　彼は何故昨日オリガと會つた時、默つてゐたのだらう？　凝つとしてゐたのだらう？　オリガの呼吸が彼の頰に熱氣を吹きかける必要もなければ、オリガの熱い涙が彼の手に灑がれる必要もなく、また彼がオリガを殆ど抱くやうにして家へ連れ歸る必要もなく、彼女の心の靈骨な囁きを聞く必要もなかつたのだらうか？……他の人ならどうしたであらう？　他の人達はあんな無禮な觀方をしてゐる。

オブローモフは其の青年時代を、該博な知識を有ち、凡ゆる人生問題を疾くに解決し、何物をも信ぜずに何時も冷靜に賢明に解剖してゐる青年達の間で送つたけれども、然し、彼の精神の裡には、友誼や愛情や人間の潔白に對する信仰が燃えてゐた。で、彼は幾ら人々の間で失敗をしても、どれ程彼の心は苦しんでも、善良の基礎と善良な信念の基礎とは一度も動搖しなかつた。彼は竊かに女の純潔を崇拜し、女の權利を承認し、女に犧牲を捧げてゐたのである。

が、彼には、善の教義と無垢に對する崇拜心を公然に承認する性質とが不足してゐた。彼はたゞ靜かに無垢の匂に醉つてゐた。が、どうかすると、貞操や貞操崇拜に疑を挾む犬儒派の哲學者の說にかぶれ、彼等の亂暴な說に、自分の輕浮な言葉を附け加へるやうなこともあつた。

オブローモフは人間の話の流れに投げ込まれた善とか正義とか純潔などゝいふやうな言葉が、如何に重いものであるかと云ふことや、此の言葉がどんな深い屈曲を作つて行きつゝあるかと云ふことを明かに理解することが出來なかつた。また彼は大膽に大聲に、そして少しも恥づる色なく勇敢に稱へられた此の言葉が、世俗的な諷刺家の醜い叫喚の中に沈んで了ふものではなくして、丁度灰のやうに社會生活のどん底に沈みながら、常に自分の爲めに貝殼を見出してゐることを考へなかつた。

大抵の人間は、善いことを言ふ時には、恥かしさうに顏を赤くして口吃り、輕浮な言葉なら大膽に大聲に揚言する。そして彼等は其の言葉が不幸にも無駄にならずに、どうかすると磨滅することの出來ない惡い痕跡を長く殘すものだと云ふことを疑はない。

其の代り、オブローモフは實際には潔白であつた。一點の汚點でも、冷淡無情な犬儒哲學の片影でも、魅力なく爭鬪なくして彼の良心に橫はることは出來なかつた。彼は、或る者が馬や家具を換へたとか、或る者が女を換へたなどゝ言ふやうな話を毎日聞くのが嫌であつた……それに換へると云ふ事は非常に費用のかゝることであつた……

彼は男が失なつた品位と潔白とを恢復しようとして苦しんだり、自分に關係のない女の不潔な墮落の爲めに泣いたりすることが度々あつた。が、世間を怖れていつも默つてゐた。

之は察しなければならない。オリガは之を察してゐた。

男達は斯うした奇人を笑ふ。が、女達は直ぐに彼等の心を知る。貞操の潔白な女は、同情から彼等を愛する。墮落しかゝつた女は、腐爛を遁れる爲めに彼等に近づかうとする。

夏も深けて、遂々去つた。朝夕は薄暗く濕々して來た。ライラックや菩提樹の花が散つたばかりか、草の實さへ落ちた。オブローモフとオリガとは毎日會つた。

オブローモフは生活に追ひついた。つまり以前遠ざかつてゐた凡てを再た獲たのである。何故フランスの公使は羅馬を去つたか、何故イギリス人は軍隊を滿載した軍艦を東方へ送つたかと云ふやうなことを知つた。ドイツやフランスで新道を開くのさへ興味があつた。が、オブローモフカ村を經て大きな村へ道路を作ると云ふことに就いては考へなかつた。裁判所へ行つて證明もしなかつた。シトーリツに返事の手紙も出さなかつた。

オブローモフはオリガの家で毎日取り交はされる話の範圍に廻轉する事と、其處で讀む新聞の中の事だけしか知らなかつた。それからなほ執拗いオリガのお蔭で、非常に熱心に當時の外國文學の傾向を見てゐた。が、その外は全然純潔な愛の雰圍氣の中に沈んでゐた。

此の薔薇色の雰圍氣は度々變つたが、其の根柢となつてゐるものは、地平線上に雲の影を認めないことであつた。若しオリガがどうかしてオブローモフのことや彼に對する自分の愛の事などを思案したり、此の愛のお蔭で心の中に樂しい時や樂しい場所が殘つたり、彼女の凡ての間に對してオブローモフが滿足な整つた答へをして呉れなかつたり、オリガの意志にオブローモフの意志が應へなかつたり、生活に對するオリガの勇氣と戰慄とに、オブローモフがたゞ凝つとして動かない情熱的な眼附で答へたりするやうなことがあると――オリガは惱ましさうに沈んで了ふのであつた。そして何か蛇のやうな冷たい物が彼女の心の中へ匐ひ込んで、彼女の空想を破壞し、溫かい物語のやうな愛の世界は、凡てが灰色に見える秋の日に變るのであつた。

オリガは斯うした幸福の不充實と不滿足とがどうして生ずるのかと考へた。では、彼女が不足に思ふのは何であらう？　まだ何が要るのだらう？　之は運命ではないだらうか――オブローモフを愛することが、彼女の使命ではないだらうか？　彼女の愛は、オブローモフの溫柔と善良に對する潔白な信念と彼女が今迄男の眼の中に見たことのない優しさとで辯解されるのである。

オリガの凡ゆる視線に對してオブローモフの眼が首肯かなかつたり、オブローモフの聲の中に一度オリガが夢現で聞いたことのある例の聲が響かなかつたりすることが、どうして問題になるだらうか？……それは想像か神經なのだ。神經の言ふことを聞くのは、悧巧なことではない。

また、たとへオリガが此の愛から離れようとしても――どうして離れることが出來よう。事は既に遂げられたのだ。オリガは既に愛したのだ、愛を衣服のやうに脱ぎ捨てることは出來ない。《一生の中に二度戀をする者はない。》と、オリガは考へた。《世間では二度戀をすることは、非道德的なことだと言つてゐる。》

オリガは斯う云ふ風に愛を學び、また斯う云ふ愛を要求してゐた。そして一歩踏み出すと、涙か或は微笑に出會すのだと思つて、踏み出すことを躊躇してゐた。が、やがて彼女の顏には、思ひ詰めた表情が現れた。其の表情の下には、涙と微笑とが潜んでゐた。而も其の表情は、オブローモフをあんなに驚かしたのだ。

けれども、オリガはこんな自分の考へやこんな内心の爭鬪をオブローモフに仄めかさなかつた。

オブローモフは愛を學ばなかつた。彼は何時かシトーリツに語つたことのある甘い假睡に耽つてゐた。時には、彼は何時も晴々してゐる生活を信ずるやうなことがあつた。そして再た善良で親しみのある暢氣な人達の住んでゐるオブローモフカ村を夢見た。吊露臺に腰掛けてゐることや幸福の充實と飽滿とに醉つてゐるのを夢見ることもあつた。

オブローモフは今でもどうかすると斯う云ふ思案に耽ることがあつた。そしてオリガの來るのを林の中で待ちながら、彼女には祕密で二度も居眠りをして、突然に雨雲に襲はれたこともあつた。

或る時、彼等二人は頽然と疲れて口も利かずに何處からか歸つて來たことがあつた。丁度大街道を横切らうとする時、彼等の方へ雲のやうな埃が飛んで來た。埃の中には、四輪車が走つてゐた。四輪車の中には、ゾーニチカが自分の夫と一緒に乘つてゐた。まだ其他に一人の紳士と一人の婦人とが同乘してゐた。

「オリガさん、オリガさん！　オリガ・セルゲーヴナさん！」と云ふ叫び聲が響き渡つた。

四輪車は止つた。中の紳士や婦人達は、皆な車から出てオリガを取り圍み、挨拶をするやら接吻をするやら長い間オブローモフには氣が附かぬものゝやうに話をした。が、やがて皆な彼を見た。其の中の一人の紳

士は眼鏡をかけてゐた。

「此の方は誰方？」とゾーニチカは靜かに訊いた。

「イリヤ・イリイーチ・オブローモフさんです！」と、オリガは彼を紹介した。

皆なで歩いて家へ行つた。オブローモフは面白くないので、仲間から離れようと思ひ、離に片足をかけて、他の方から家へ入らうとした。が、オリガは眼で彼を止めた。

こんなことは何でもない事ではあるが、其處に居合した紳士や婦人達は、皆な妙な眼附でオブローモフを見た。之も何でもありやしない。以前にも彼が眠たさうな退屈らしい眼附をして身裝も構はずにゐた時に、皆なこんな眼附で彼を見ない者はなかつたから。

けれども、紳士と婦人達は其の妙な眼附を彼からオリガへ移した。彼等が其の疑ふやうな眼でオリガを見た時、オブローモフの心臟は突然に冷乎とした。何者かゞ彼を嚙み始めた。其の苦痛に堪へ切れないので、オブローモフは家へ歸つて憂鬱に沈んだ。

翌る日、オリガの愛らしいお饒舌と愛嬌のある冗談とは、オブローモフを面白がらせることが出來なかつた。彼はオリガの執拗な問を頭痛がすると言つて斷り、七十五哥のオデコロンを頭に注がれるのを辛つと我慢した。

それから其の翌る日、彼等二人が遲くなつて家へ歸つた時など、叔母はどう云ふ譯か、非常に注意をして彼等を見た。殊に、彼を注意して見た。やがて叔母は少し腫れ上つた其の大きな瞼を閉ぢたが、彼女の眼は

矢張り睫毛を透して彼等を見てゐるやうであつた。叔母は一寸思案しながら睡眠劑の匂を嗅いだ。

オブローモフは煩悶した。が、默つてゐた。彼はオリガに自分の疑惑を言ひ得なかつた。と云ふのは、彼はオリガを驚かし、彼女に身慄をさせるのを怖れたからである。が、更に之を正しく言ふと、彼は自分の爲めに怖れたのであつた。彼はこんな重大事件を詮索して、此の靜かな晴れ渡つた平和を攪亂するのを怖れたからである。

これはもう、オリガがオブローモフを愛してゐるのは間違ひではなからうかとか、或は彼等の愛や時々林の中で夜遲く彼等二人の間で行はれる密會は、間違ひではなからうかなどゝ云ふやうな問題ではなかつた。《俺は接吻をしようとしたのだ。》と、オブローモフは怖ろしさうに考へた。《が、之は倫理書中の刑事的犯罪で、些細な最初の犯罪ではない！　此の犯罪までには多くの階段がある。握手とか、愛の承認とか、手紙とか……俺達はこんな事を皆なして了つたのだ。けれども》と、彼は頭を擡げて其の先を考へた。《俺の企ては潔白だ。俺は……》

と、突然に雨雲は消え去つて、彼の前にはお祭のやうな輝かしいオブローモフカ村が薫り、それが太陽の光に燦々と輝き出した。其處には、綠の丘もあれば銀の河もあつた。彼はオリガと一緒に彼女の腰を抱いて、惱まし氣に長い並木路を歩いてゐる。四阿や露臺に腰掛けてゐる。……

オリガの側にゐる者は、皆なオリガを尊敬して頭を下げる――一言で云へば、以前彼がシトーリツに話した通りである。

《さうだ、さうだ。けれども、之から始めなければならないのだ！》と、オブローモフは再た怖ろしさうに考へた。《愛してゐると云ふ三度の言葉もライラックの枝も愛の承認も――皆なこれは一生涯の幸福の萠芽でなければならない。これは純潔な女が二度と繰り返すことの出來ないものだ。ちや、俺は何だらう？　俺は何者だらう？》彼の頭は槌で敲かれるやうであつた。

《俺は誘惑者だ、色魔だ！　卑劣な、そして老獪な色情狂としての此の俺は、脂ぎつた眼と赤い鼻とを持つた俺は、女から盜んで來た薔薇を縫飾の中に突き込んで、友人の耳に自分の勝利を囁くやうなことを……だそれを……それを……しないだけだ。あゝ、あゝ、俺は何處へ入つて來たのだらう！　そら、其處に深淵がある！　オリガさんも其の深淵の上を高く飛んでゐない。オリガさんは深淵のどん底にゐる……どうしたのだらう、どうしたのだらう。》

彼は落膽した。彼は自分の生活の虹のやうな色彩が、突然に蒼くなつたことゝ、オリガが將來犧牲にならなければならぬことゝの爲めに子供のやうに泣いた。彼の凡ての愛は犯罪であつた。良心の上に現はれた汚點であつた。

攪亂した智慧は、やがてオブローモフが之には當然の出口があることを意識した時に、再た晴々しくなつた。其の出口と云ふのは、指輪を篏めた手をオリガに渡すことである……（譯者註。これは結婚を意味する。教會の規定により、新郎新婦二人は祭壇の前で指輪を交換することになつてゐた。）

「さうだ、さうだ。」と、オブローモフは嬉しさに慄へながら言つた。「さうすれば、其の答へとして彼女の恥

かしさうな同意の眼が注がれるだらう……オリガさんは一言も言はず、昂奮して心の底から微笑むだらう。それからオリガさんの眼は、涙に滿たされるだらう……」

涙と微笑と默つて差し出す手と、それから生々した熟い喜悅と幸福な、そして忙がしさうな身振と長い長い對話と二人きりの囁きと此の信じ合つた心の囁きと神祕な理解とは、二つの生命を一つに合せて了ふだらう！

無駄話や毎日の出來事に就いての對話の中にも、其の無駄話と對話以外に、無形の愛が籠つてゐることは、誰の眼にも見えるだらう。誰も彼等二人に輕蔑の眼を注がないやうになるだらう……

俄かにオブローモフの顏は嚴かになり、勿體らしくなつた。

《さうだ》と、彼は獨語つた。《其處に正當な尊い堅實な幸福の世界があるのだ！　今迄俺が此の色彩を隱したり、愛の匂の中で子供らしい事をしたり、面會を求めたり、月夜に歩いたり、處女の心臟の鼓動を聞いたり、オリガさんの空想の懷へを捉へたりしたのは、恥かしいことであつた……あゝ！》

オブローモフは耳の下まで眞赤になつた。

《今晩、オリガさんは、愛によつて目はせられる嚴重な義務を知るのだ。たつた二人つきりで會ふのは今日が最後だ。今日が……》

オブローモフは片手を心臟の上に載せた。心臟は強く鼓動してゐた。潔白な人の心臟のやうに規則正しく鼓動してゐた。彼は再た、二人はもう會ふ必要がないのだと言つて先づオリガを悲しませてやらう、それから悸々と自分の計畫を打ち明けよう。が、其の前にオリガの考へを索る必要がある、オリガはどぎまぎすることだらう。けれども、其處には……などゝ考へて心を波立たせた。

其の後、オブローモフは何時までも、オリガの恥かしさうな同意と微笑と涙と默つて差し出す手と長い神祕な囁きと世界ぢうに見せるやうな接吻とを夢のやうに考へてゐた。

十二

オブローモフはオリガを捜しに駈け出した。オリガの家では、彼女は何處かへ出かけたと答へた。彼は村へ行つた――が、其處にも彼女はゐなかつた。見ると、オリガは丁度天使が昇天するやうに丘へ上つてゐた。彼女は輕く足を運び、輕く身體を搖りながら上つてゐた。

オブローモフはオリガの後を追うた。彼女はちよい〳〵と草に手を觸れながら、飛ぶやうに輕く歩いてゐた。彼は丘の中腹まで上ると、オリガに聲をかけた。

オリガは彼を待つた。彼が二サーゼンばかりの處まで近づくと、オリガも少し前へ進み出た。が、彼と自分との間にまだ大分間隔を置いて、彼の前に立ち止り、そして莞爾とした。

オブローモフもオリガが逃げて行かないのを信じて遂々立ち止つた。オリガは五六歩彼の方へ歩み寄つて、彼に手を貸し、笑ひながら彼を引つ張り出した。

二人は森へ入つた。彼が帽子を脱ぐと、オリガは手巾で彼の額を拭いて、洋傘で彼の顏を煽ぎ始めた。

オリガは殊に生々してゐた。彼はよく饒舌りもすれば、また元氣もよかつた。そして突然優しい情熱の發作に心を奪はれたが、やがて急に考へ込んだ。

「私が昨日何をしたか當てられて？」二人が樹蔭に坐つた時、オリガは斯う訊いた。

「書物を讀んだでせう？」

オリガは頭を振つた。

「ぢや、何か書きましたか？」

「いゝえ。」

「歌を唄つたでせう？」

「いゝえ、占ひをして見たわ！」と、オリガは言つた。「女中頭のグラフィーニナが昨日來てね、骨牌占が上手な女だから、私、頼んで見たの。」

「で、どうでした？」

「何でもないの。最初は路が出たわ。次に人の群のやうなものが出て、何處にも美しい男がゐるのよ……何處にもよ。女中頭がカーチャの居る處で、突然に骨牌のキングが私を思つてゐると言つた時なんか、私、眞赤になりましたわ。そして其の女が、私に誰を思つてるかと訊かうとしましたから、骨牌を掻き混ぜて逃げて了つたのよ。あなたが私のことを思つてゐらつしやるのでせう？」と、俄かにオリガは訊いた。

「あゝ！」と、オブローモフは言つた。「もちつと少なく思ひたいものです！」

「ですが、私は！」と、考へ込んでオリガは言つた。「私はもう之れ以外の生活を忘れて了ひましたわ。あなたは此の週間に嘘を言つて、二日も入らつしやらなかつたでせう――憶えてゐて？　其の時なんか腹が立つたわ！――私は急に別な人間になつて、悪者になつて、あなたがザハールを怒鳴るやうに、私もカーチャを怒鳴つたわ。そして彼女がこつそり泣いてるのを見ても、少しも可哀想だと思はないのよ。叔母には返事もせず、何を言はれても聞きもせず、かと云つて何もしたくもなければ、何處へも行きたくもなかつたの。ところが、あなたがいらつしやると、直ぐにまた別な人間になつて了つて、カーチャには連翹色の衣服を遣つたわ……」

「それが愛なんです！」と、オブローモフは情熱的に言つた。

「何が？　連翹色の衣服が？」

「何も彼もです！　私はあなたの言葉で自分を知りました。私もあなたの傍にゐないと、日も生活もないのです。夜は何時も花が咲いてゐる野原のやうな處を夢に見ます。私はあなたを見ると――立派な活動家になります。が、あなたがゐないと――退屈で頽然します。寂たくなつて、何事も考へるのが厭になります……愛して下さい、そして自分の愛を恥かしいと思はないで……」

と、突然にオブローモフは口を噤んだ。《俺は何を言つてゐるんだらう？　俺はこんなことを言ふ爲めに來たのではないぢやないか！》と、彼は考へて咳拂をし、眉に皺を寄せた。

「ですが、若し私が急に死んだら？」と、オリガは訊いた。

「何を考へてゐらつしやるのです！」と、オブローモフは平氣で言つた。
「だつて、」と、オリガは言つた。「私が寒冒を引いて、肺炎になるでせう。あなたは此處へ入らしても——私はゐないでせう。私の家へ入らつしやると、家の者達は私が病氣だと言ふでせう。翌る日も矢張りさうよ。私の窓の扉は閉められて了ふ。醫者は頭を振る。カーチャが泣きながら爪先で歩いてあなたの許へ行き、私が病氣で死にさうだと囁くでせう……」
「あゝ！」と、オブローモフは突然に聲を發てた。
オリガは笑つた。
「その時、あなたはどうなすつて？」と、オリガは彼の顏を見ながら訊いた。
「どうするかと言ふのですか？　氣が狂つて自殺しますねえ。けれども、あなたは急に癒つて了ふ！」
「いゝえ、いゝえ、お止しなさい！」と、オリガは怖ろしさうに言つた。「妙な話になつたわね！　あなたは死んでゐらつしやるのなら、私の傍へ來ちや厭よ。私は死人が怖いわ……」
オブローモフは笑つた。オリガも矢張り笑つた。
「あゝ、私達は本當に子供ねえ！」と、オリガはこんな話を斥けるやうに言つた。
オブローモフは再た咳をした。
「オリガさん、あのね……私は話したいことがあるんだがねえ。」
「なに？」と、オリガは生々と彼の方へ振り向きながら訊いた。

オブローモフは怖ろしさうに口を噤んだ。
「さア、おつしやい。」と、オリガは彼の袖を輕く引きながら訊いた。
「何アに、別段……」と、オブローモフは悸々しながら言つた。
「いゝえ、あなたは何か考へてゐらつしやるんでせう？」
オブローモフは默つてゐた。
「若し何か怖いことなら、言はないで下さい。」と、オリガは言つた。「いゝえ、言つて下さい！」と再た俄かに彼女は附け足した。
「いや、何アに、何でもないんですよ。」
「いゝえ、いゝえ、何かあります。言つて下さい！」と、オリガは上衣の兩袖をしつかり摑んで急がせた。
オブローモフは彼女に餘り近寄られたので、彼女に接吻しないやうに、顏を左右に動かさなければならなかつた。
オブローモフは顏を動かし度くないのだけれども、彼の耳にはオリガの怖ろしい（厭よ）と云ふ言葉が響いてゐた。
「おつしやいよ！」と、オリガは急がせた。
「言へません。言ふ必要はないんです……」と、オブローモフは避けた。
「（確信がお互の幸福の土臺だ）とか、（少しでも心臟に起つた事を殺してはいけない、少しでも友の眼を讀

まないやうなことがあつてはいけない。」と、あなたは何故おつしやつたの？　之はあなたの言葉ぢやなくつて？」

「私が言はうと思つた事は、たゞ、」と、オブローモフは徐々言ひ始めた。「私はこんなにあなたを愛してゐるが、こんなに愛してゐるが、若し……」

オブローモフは躊躇した。

「それから？」と、オリガはもどかしさうに訊いた。

「若しあなたが今他の男を愛すれば、其の男は尙ほ一層あなたを幸福にすると言ふことです。私は……默つて自分の悲しみを呑み込み、其の男に自分の位置を讓ります。」

オリガは俄かに彼の上衣を手から放した。

「何故？」と、オリガは驚ろいて訊いた。「私にはあなたのおつしやる事は分らないわ。私はあなたを誰にも讓らないつもりよ。私はあなたが他の女と一緒になつて幸福になるのは厭だわ。あなたのおつしやることは、何だか悧巧さうに聞えるけれど、私には分らないわ。」

オリガの視線は、惱ましい氣に樹の間を逍遙つてゐた。

「で、結局あなたが私を愛してゐらつしやらないと云ふ意味なの？」と、やがてオリガは訊いた。

「その反對です。私は自分を犧牲にする程あなたを愛してゐます。何時でも私は自分を犧牲にしてお目にかけます。」

「でも、何の爲めに？　誰があなたに犧牲を求めて？」

「私は、若しあなたが他の男を愛した場合のことを言ふのです。」

「他の男を！　あなたは氣が狂つたのではなくつて？　私はあなたを愛してるぢやありませんか。どうしてそんなことが出來るでせう？　あなたは他の女を愛してゐらつしやるのですか？」

「何を訊くのです？　私が何を言つてゐるか、あなたに分らないことはないでせう。あなたは私を信じてゐらつしやるでせう！　私はそんなことを言ふつもりではなかつたのです……」

「ぢや、あなたは何を言はうと思つてゐらして？」

「私が言はうと思つたことは、あなたの前に私は罪を犯してゐること、疾くから罪を犯してゐることです……」

「どうして？　どんな罪？」と、オリガは訊いた。「私を愛してゐらつしやらないのですか？　冗談でもしてゐらつしやるのですか？　さア、おつしやい、速く！」

「いゝえ、いゝえ、そんな事ぢやないのです」と、オブローモフは悲しさうに言つた。「それは斯う云ふ事です……」と、彼は言ひにくさうに言ひ始めた。「私達は會つてるでせう……こつそりと……」

「こつそりと？　どうしてこつそりなの？　私は何時もあなたと會つたことを叔母に言ひますわ……」

「何時でも？」と、不安らしくオブローモフは訊いた。

「何故それが惡くつて？」

「私が惡かつたです。私は疾つくに、こんなことをしてゐては……不可ないとあなたに言へばよかつたのです……」

「あなた、おつしやつたわ。」と、オリガは言つた。

「言ひましたか？　へエー！　では、私は……仄めかしたのですね。ぢや、私は自分のすべき事をしたのですねえ。」

オブローモフは元氣附いて、オリガが容易く彼から義務の軛を退けて呉れたことを喜んだ。

「それから？」と、オリガは訊いた。

「それからつて……たゞそれだけです。」と、オブローモフは答へた。

「さうぢやないでせう！」と、オリガは見拔くやうに言つた。「まだ何かあるわ。あなた殘らずおつしやらないんだわ。」

「それから私はこんなことも考へました……」と、オブローモフは言葉を成るべく打ち解けた調子にしようと思ひながら言ひ始めた。

「それは……」

オブローモフは立停つた。オリガは彼を待つてゐた。

「それは、も少し私達の會ひ方を少なくしなければ不可ないと言ふことです……」と、オブローモフは言つて、悸々とオリガを見た。

オリガは默つてゐた。

「何故？」と、やがてオリガは考へながら言つた。

「蛇が私を嚙むのです。それは——良心ですねえ……私達はこんなに長い間、二人つきりでゐるのですから、私は波立を感じ、私の心臟の動悸が止りさうなんです。あなたも矢張り平靜ぢやないでせう……私は怖いんです……」と、オブローモフは辛つと言つた。

「何が？」

「あなたは若いから、種々な危險を知らないのです。ねえ、オリガさん。人間はどうかすると自分に對して權力がないことがありますよ。人間の中に地獄の力が入つて、心に暗闇が蔽ひかゝつて、眼には電光が輝く、明らかな智慧は昧む。純潔や無垢に對する敬意さへ——皆な旋風になつて飛んで了ふ。人間はさうした時には自分を忘れて、たゞ情熱を呼吸し　自分を支配することが出來なくなる——其の時、脚下に深淵が開けるのです。」

オブローモフは溜息を吐いた。

「で、どうだとおつしやるの？　開けてもよかなくつて？」と、オリガは眼を大きく開いて彼を見ながら言つた。

オブローモフは默つた。それ以上は言ふこともなければ、また言ふ必要もなかつたのだ。

オリガは、書物の中に何かを讀むやうに、オブローモフの額に出來た皺の中にも、何物かを讀まうとして

長い間彼を見てゐた。そして彼の一言一句と彼の眼附とを想ひ出し、自分の戀の歴史に考へ及び、更に庭での暗い晩のことまで想ひ出して、突然に顔を赧くした。

「あなたは何時も詰らないことばかりおつしやるのねえ！」と、オリガは傍を見ながら速口に言つた。「私、あなたの眼の中に電光なんか見なかつたわ……あなたは私を、多くは……私の乳母のクジミニーチナのやうに！……」と、オリガは附け加へて笑つた。

「オリガさん、あなたは冗談をおつしやるけれども、私は眞面目に言つてるのですよ……まだ悉皆言つて了はないけれど。」

「ぢや、後はなに？」とオリガは訊いた。「こんどは、どんな深淵なの？」

オブローモフは溜息を吐いた。

「それは、私達が會つては不可ないと云ふことです……たつた二人きりで……」

「何故？」

「良くないからです……」

オリガは一寸考へ込んだ。

「さうよ、世間ではそんな事をしてはいけないと言ふわ。」と、オリガは考へ込みながら言つた。「何故でせう？」

「知られて噂が擴まると何とか言はれるから……」

「誰が言ふでせう？　私には母親がないのです。母親だけは、何故あなたと會ふかと云ふことを私に訊くことが出來ます。私も母親の前でならば泣いて答へ、私が何も悪いことをしてゐないことや、あなたも矢張りさうだと云ふことが出來ます。母親も私の言葉を信じて呉れるでせう。他に誰が言ひますか？」とオリガは訊いた。

「叔母さんが、」と、オブローモフは言つた。

「叔母が？」

オリガは悲しさうに頭を掉つた。

「叔母は決して訊かないわ。若し私が何處かへ行つて了つても、叔母は私を尋ねも捜しもしないでせう。私も何處に居つて何をしてゐると云ふことを、叔母に言ひに歸りはしません。他に誰？」

「他の人は皆なです……此間もソーニチカが私とあなたとを見て笑つてゐました。あの女と一緒にゐた他の娘や女達も矢張り笑つてゐたでせう。」

オブローモフは其の時から自分が感じてゐた恐怖を悉皆オリガに物語つた。

「あの女が私だけを見てゐる間は」と、オブローモフは附け加へた。「まだ何ともなかつたが、其の眼をあなたに向けた時に、私の手足は冷たくなりましたよ……」

「それで？……」と、オリガは冷淡に訊いた。

「それで、其の時から私は夜も晝も心配して、噂を防ぐ方法に頭を碎いてゐたのです。あなたを驚かさない

やうに心配してゐたのです……私は疾つくに此の事をあなたに話さうと思つてゐたのですが……」

「詰らない心配ねえ」と、オリガは反對した。「私はあなたから聞かなくとも知つてるわ……」

「どうして知つてゐたのです？」と、オブローモフは吃驚して訊いた。

「それは斯うなの。ソーニチカは私に話をしてゐるうちに、私を探つたり、皮肉つたりして、あなたとどう云ふ風に關係しなければならないかと云ふことを敎へたの……」

「オリガさん、あなたはその事を一言も私に言はなかつたのですね！」と、オブローモフは詰るやうに言つた。

「あなたも今迄心配してゐらつしやることを些つともおつしやらなかつたでせう！」

「で、あなたはソーニチカさんに何と答へました？」と、オブローモフは訊いた。

「何とも答へないわ！　何と答へられて？　たゞ顏を赧くしたわ！」

「あゝ！　飛んだことをしましたね。あなたは顏を赧くしたのですね！」と、吃驚してオブローモフは言つた。

「私達はあまり不注意です！　今後どうなるでせう？」

オブローモフは聞き訊すやうな眼附をしてオリガを見た。

「知らないわ」と、オリガは優しく答へた。

オブローモフはオリガと心配を分つて安心し、彼女の眼と明らかな言葉との中に、意志の力を汲まうと思つたが、生々した決心の答へをオリガから聞かなかつたので、俄かに落膽した。

オブローモフの顏は弛んで躊躇を現はし、彼の眼は悲しさうにキョト〳〵と周圍を見廻した。彼の內部には、もう輕い戰慄が起つてゐた。彼は殆んどオリガのことを忘れてゐた。彼の前には、ソーニチカや其の夫やお客などが集まつてゐた。彼等の話聲や笑聲さへ聞えた。

オリガは何時もの機智も出さずに默つたまゝ冷やかにオブローモフを見てゐた。そして更に一層冷やかに（知らないわ）と言つた。が、オブローモフは（知らないわ）と云ふ言葉の中に潛んでゐる意味を捉へようと努力しなかつた。或は捉へ得なかつたのかも知れない。

オブローモフも默つてゐた。他人の助力がなければ彼の考へと計畫とは成熟しなかつた。熟し切つた林檎のやうに、自然に落ちるやうなことは、決してなかつた。千切られるまでは、決して落ちなかつた。

オリガは暫くオブローモフを見てゐたが、やがて外套を着、枝から肩掛を外して徐かに頭へ載せ、そして洋傘を取つた。

「何處へ行くのです？　まだ早いのに！」と、オブローモフは俄かに我に歸つて言つた。

「いゝえ、もう遲いわ。あなたのおつしやつた通りよ」と、オリガは悲しさうに言つた。「私達は餘り入り過ぎて出口を見失なつたのよ。速く別れて今迄の跡を掃き淸めた方がいゝわ、左樣なら！」と、オリガはあつさりと冷淡に言ひ、一寸お辭儀をして路を歩き出さうとした。

「オリガさん、まア待つて下さい！　どうして會はずにゐられませう。それに私は……オリガさん……」

オリガは之を聞かずに急いで歩き出した。砂はザク〳〵とオリガの靴の下で鳴つた。

「オリガ・セルゲーヴナさん！」と、オブローモフは叫んだ。

聞えないらしく歩いてゐた。

「どうか、此處へ歸つて下さい！」と、オブローモフは叫んだが、もうその聲は涙に曇つてゐた。「罪人の言ふことでも聞く必要があるのに……あゝ！　オリガさんには心があるのだらうか？……あれが女と云ふものだ！」

彼は腰掛けて兩手で眼を蔽うた。足音はもう聞えなかつた。

「行つて了つた！」オブローモフは殆んど驚かんばかりに斯う言つて頭を擡げた。

オリガは彼の前にゐた。

彼は嬉しさうにオリガの手を握つた。

「行かなかつたのですね？　行かないのですね？……」と、オブローモフは言つた。「行かないで下さい。あなたが行つて了つた後では――私は死人だと思つて下さい！」

「ですが、若し私が行かなければ、私は罪人よ。あなたもさうよ。イリヤさん、それを考へて下さい。」

「いや、さうぢやありません……」

「何故なの？　若しソーニチカとあの女の旦那さんとが、私達が一緒にゐるのをも一度見て御覽なさい――私は死んで了ひますわ。」

オブローモフは溜息を吐いた。

「まア、お聽きなさい」と、オブローモフは吃りながら急いで言つた。「私はまだ悉皆言つてしまはないのです……」と言つて言葉を切つた。

オブローモフにとつて家にゐると云ふことは、單純で、自然で、餘儀ないことだと思はれ、また彼の幸福となつて彼に微笑んでゐたが、今ではそれは突然に一種の深淵になつた。オブローモフには此の深淵を乘り超えて行かうと云ふ勇氣が起つた。彼は勇敢な歩調で進んで行かうと決心した。

「誰か來たわ！」と、オリガは言つた。

傍の路に足音が聞えた。

「ソーニチカさんが來たのではありませんか？」と、オブローモフは訊き乍ら、吃驚して凝つと眼を据ゑた。

二人の男と一人の女が來た。皆な知らない人達であつた。オブローモフは漸く安心した。

「オリガさん」と、オブローモフは忙しく言つて彼女の手を取つた。「彼處の誰もゐない處へ行きませう。彼處へ行つて腰掛けませう。」

オブローモフはオリガを腰掛けさせて、自分は彼女の傍の草の上に坐つた。

「あなたは昂奮して歸らうとしたが、オリガさん、私はまだ悉皆言つて了はないのですよ。」と、オブローモフは言つた。

「再た私を揶揄ふと、私は再た行つて了つて、今度はもう歸らなくつてよ。」と、オリガは言つた。「一度私

の涙が面白かつたものだから、今度も多分あなたは私を踏みつけようとなさるのでせう。そして段々私を御自分の奴隷にし、勝手にし、私の心を讀み、それから御自分でも泣いたり、驚いたりして私まで驚かせ、其の揚句にどうしたらいゝだらう？　と訊くのでせう。けれど、イリヤ・イリィーチさん」と、オリガは俄かに腰架（ベンチ）から起ち上つて、傲然と附け加へた。「私はあなたを知り、あなたがどんな戯れをなさるかを知つた……時から非常に大人になりました。私はもうあなたに涙を見せるやうなことをしません……」

「あゝ冗談ぢやない、私は戯れてゐるんぢやありません！」と、オブローモフは辯解するやうに言つた。

「ぢや、なほ更あなたは信用が出來ません。」と、オリガは冷やかに言つた。「ですからあなたのおつしやる危險とか警戒とか謎とかに對して、私は一言云つて置きます。今日お會ひするまで私はあなたを愛してゐました。またあなたが私に何をなさるのかと云ふことも、知りませんでした。が、今はもう分りました」と言つて、オリガは其處を去らうと決心した。「私はあなたにもう相談をしません。」

「分りました。」と、オブローモフはオリガの手を取つて腰架（ベンチ）へ腰掛けさせながら言つた。そして心を落着ける爲めに一寸黙つて、「察して下さい、」と言ひ始めた。「私の心は一つの希望に滿たされてゐます。頭も一つの考へに滿たされてゐます。が、意志と舌とが私の思ふ通りにならないのです。言ひ度いと思ふが、言葉が舌から出ないのです。が、どんなに單純に、どんなに……オリガさん、察して下さい。」

「私には、あなたが何を考へてゐらつしやるか分らないわ……」

「あゝ、どうか、（あなた）なんて言はないで下さい。あなたの傲慢な眼附は私を殺します。あなたの言葉は

何れも寒中のやうに凍つてゐます……」

オリガは笑つた。

「あなたは發狂者よ！」と、オリガは彼の頭へ片手を載せて言つた。

「さうです、さうして下さい。それで私は天來の思想と言葉とを受けました！　オリガさん。」と、オブローモフはオリガの前に跪づいて言つた。「私の妻になつて下さい！」

オリガは默つたまゝ彼から顏を背けた。

「オリガさん、私に手を貸して下さい！」と、オブローモフは續けた。

オリガは貸さなかつた。オブローモフは自分で手を取つて脣に押し着けた。オリガはそれを退（の）けもしなかつた。手は溫かで、柔らかで、そして幾らか濕（あく）々してゐた。オブローモフはオリガの顏を覗き込まうとした——が、オリガは益々顏を背（そむ）けた。

「沈默ですか？」と、オリガの手に接吻しながら、オブローモフは怪（あや）しく訊いた。

「同意の印よ！」と、オリガは靜かに言つたが、矢張り彼の顏を見なかつた。

「あなたは今、何を感じてゐらつしやるのですか？　何を考へてゐらつしやるのですか？」と、オブローモフは恥かしい同意と涙とに就いて、自分の空想を憶ひ出しながら訊いた。

「あなたの考へと同じことを」と、オリガは何處か林の方を見續けながら答へた。が、彼女の胸は波立つてゐた。オリガは自分を制へてゐるのであつた。

《彼女の眼には、涙があるのだらうか？》と、オブローモフは考へた。オリガは頑固に下を見てゐた。

「あなたは冷靜ですか？　あなたは落着いてゐますか？」と、オブローモフは彼女を自分の方へ引き寄せようとしながら訊いた。

「冷靜ではないけれど、落着いてるわ。」

「どうして？」

「斯うなることを疾くから知つてゐたし、また始終考へてゐましたから。」

「疾くから」と、オブローモフは驚いて繰り返した。

「さうよ、あなたにライラックの枝を上げた時からよ……私、心の中であなたを……」

オリガは言ひ終らなかつた。

「あの時から！」

オブローモフは兩手を擴げて、オリガを抱かうとした。

「深淵が開け、電光が輝いたわ……用心しなけりゃ！」と、オリガは巧みに言ふと、彼の抱擁をスルリと辷り脱けて、彼の手を洋傘で遮きつた。

オブローモフは（厭よ）と云ふ怖ろしい言葉を想ひ出して心を制へた。

「けれども、あなたは一度もそんなことを言はないし、少しもそんな樣子を見せなかつたぢやありませんか……」と、オブローモフは言つた。

「私達はお嫁に行くのではなくつて遣られるか、貰はれるかするのですもの。」

「あの時から……まさか？……」と、オブローモフは考へ込んだまゝ繰り返した。

「あなたは、私があなたを理解せずに、此處にあなたと一緒にゐたり、毎晩四阿の中で腰掛けたり、あなたのおつしやることを聞いたり、信じたりすればいゝと思つてゐらしたのね？」と、オリガは傲然と言つた。

「さうです、それは……」と、オブローモフは顏色を變へて、オリガの手を放しながら言つた。

オブローモフの考へは異樣に慄へた。オリガは彼を傲然と落着いて見てゐた。そして固く決心をして彼の言葉を待つてゐた　が、オブローモフは此の時、傲慢と決心とを望まなかつた。寧ろ涙と情熱と幸福の瞬きとを僅か一分間でも見たいと望んだ。そして其の次に亂れない平和の生活が流れて來るやうに望んだ。

ところが、豫期しない幸福から迸り出る涙もなければ、恥かしさうな同意もなかつた！　之をどう解釋したものだらう！

オブローモフの心には、蛇のやうな疑念が目を醒して匐ひ出した……オリガは彼を愛してゐるのだらうか、それとも他へ嫁に行くのだらうか？

「けれども、他にまだ幸福へ行く路はありますよ。」と、オブローモフは言つた。

「どんな路なの？」と、オリガは訊いた。

「どうかすると、愛は待ちもせず、我慢もせず、打算もしないことがあります……女は何時でも火と戰慄の中に居つて、直ぐに非常な苦痛と歡喜とを感ずるものです。其の苦痛と歡喜と云ふのは……」

「其の路と云ふのは、私に分らないわ。」
「其の路といふのは、女が平和でも尊でも何でも凡てを犧牲にすることです。そして愛の中に其の償ひを見附けることです……女は愛を凡てのものと交換します。」
「私達にも其の路が入用かしら？」
「いや、要りません。」
「あなたは、私の平和や尊敬を失なつても　其の路を行つて幸福を捜さうと思つてゐらつしやるのではなくつて？」
「いゝえ、いゝえ！　神様に誓ひます。決してそんなことはありません。」と、オブローモフは熱心に言つた。
「ぢや、何故あなたは路のことをおつしやるの？」
「實際、自分でも分りません……」
「ア、分つたわ。あなたは、私が自分の平和を犧牲にして、あなたと一緒に其の路を行くかどうかを知らうとなさつたのでせう？　さうぢやなくつて？」
「さうです。或はあなたのお察しの通りかも知れません……どうです？」
「決してそんな路を行かないわ！」と、オリガはきつぱり言つた。
オブローモフは一寸考へて、溜息を吐いた。

「さうですか。其の路は怖ろしい路で、女が男に隨いて其の路を歩くには――滅びるか、或は最後まで愛するかするには、非常な愛を要しますからね。」
オブローモフは索るやうにオリガの顏を見た。が、オリガは平氣でゐた。たゞ、眉の上の皺がぴくぴくと動いたが、その顏は落着いてゐた。
「その代り」と、オブローモフは言つた。「あなたの小指にも及ばないソーニチカさんは、あなたに會つた時、一寸あなたを見違へるかも知れませんね！」
オリガは莞爾とした。彼女の眼は晴々とした。が、オブローモフは自尊心の要求に魅せられて、オリガの心に犧牲を顧ひ、彼女の心に醉はうとした。
「その代り男達はあなたの傍に寄ると、尊敬の餘り斷えず悸々とあなたを見、大膽で狡猾な微笑をあなたに注ぐでせう……」
オブローモフはチラリとオリガを見た。オリガは洋傘で熱心に砂の上の石を動かしてゐた。
「あなたが客間へ入ると、幾つかの婦人の帽子は不滿に搖れるでせう、其の中の或る者は、座を變へてあなたの傍を離れるでせう……が、あなたの誇りには、變りはありません。而もあなたは自分が彼女等より高尚で立派なことを明らかに意識なさるでせう。」
「何の爲めにあなたは私にそんな怖いことをおつしやるの？」と、オリガは落着いて言つた。「私はどうしてもそんな路を行かないわ。」

「どうしても？」と、オブローモフは悲しさうに訊いた。

「どうしても！」と、オリガは繰り返した。

「さうすれば」と、オブローモフは考へ込んで言つた。「あなたに恥を見る力が足りないやうになるでせう。多分あなたは死に驚かないでせう、刑罰も怖れないでせう。が、刑罰を受けるまでの心備へと、刻一刻に味ふ拷問とを忍べないやうになるでせう。そして病み衰へるのでせう——さうでせう？」

オブローモフはオリガがどんな顔をするかと、矢張り彼女を見てゐた。

オリガの眼は樂しさうであつた。怖ろしい光景も彼女を驚ろかすことは出來なかつた。彼女の脣には輕い微笑さへ現はれてゐた。

「私は病氣をするのも、死ぬのも厭です！　そんなことをしないでも、」と、オリガは言つた。「そんな路を歩かないでも、もつと強く愛することは出來るんですもの……」

「何故あなたは其の路を歩かないのです」と、オブローモフは執拗く悲しさうに訊いた。「若しあなたが怖くなかつたら？……」

「それは、其の路を行くと……後で屹度……誰でも別れなければならないし、」と、オリガは言つた。「私はあなたと別れなければならないからよ！……」

オリガは立ち停り、オブローモフの肩に手を載せて、長い間彼を見てゐたが、俄かに洋傘を傍へ投げ出し素速く彼の頸を兩手で抱いて熱い接吻をした。そして全身に昂奮を感じながら、自分の顔をオブローモフの胸に押し附けたまゝ靜かに附け足した。

「決してそんな路を行かないわ！」

オブローモフは嬉しさうな呻き聲を出して草の上へ坐り、オリガの脚下に突つ伏した。

千八百五十七年。

—前編了—

大正十五年八月一日印刷
大正十五年八月三日發行

（定價貳圓貳拾錢）

飜譯者　山内封介

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込（八〇〇六番　八〇七七番　八〇八八番　八〇九八番）

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社
電話小石川五九二番

印刷者　佐々木俊一

◀オブロモフ（前）▶

世界文藝全集

(17) □ボヴリイ夫人　フロオベル著　中村星湖氏譯
(2)(5) □ギルヘルム・マイステル　二冊　ゲエテ著　中島清氏譯
(3) □神々の死　メレジユコフスキイ著　米川正夫氏譯
(4) □赤い部屋　ストリンドベルヒ著　阿部、江馬二氏共譯
(6)(9) □神々の復活　二冊　メレジユコフスキイ著　米川正夫氏譯
(7) □ナナ　エミール・ゾラ著　宇高伸一氏譯
(8)(12) □赤と黑　二冊　スタンダアル著　佐々木孝丸氏譯
(10) □ショウ一幕物全集　バアナードショウ著　市川又彦氏譯
(11) □居酒屋　エミール・ゾラ著　木村幹氏譯
(13)(14)(15)(16) □戰爭と平和　四冊　トルストイ著　米川正夫氏譯

總洋布最上製◇一冊貳圓五拾錢づゝ◇送料一冊貳拾錢づゝ
「居酒屋」に限り價參圓◇送料拾六錢

世界文藝全集

(17) □モーブラア　ジョルジュ・サンド著　福永渙氏譯
(18) □ポンペイ最後の日　リットン著　中村詳一氏譯
(19) □美貌の友　モウパッサン著　廣津和郎氏譯
(20)(21)(22)(23) □レ・ミゼラブル　四冊　ユゴー著　豐島與志雄氏譯
(24)(25)(26) □アンナ・カレニナ　三冊　トルストイ著　原久一郎氏譯
(27)(28)(29)(30) □ジャン・クリストフ　四冊　ロマン・ロオラン著　豐島與志雄氏譯
(31) □從妹ベツト　バルザック著　布施延雄氏譯

以下續々刊行

總洋布最上製◇一冊貳圓五拾錢づゝ◇送料一冊貳拾錢づゝ
「ポンペイ」「從妹ベツト」に限り價參圓◇送料拾六錢

ドストエフスキイ全集

■カラマーゾフの兄弟（全三冊）米川正夫氏譯
價各貳圓五拾錢・送料各拾貳錢

■虐げられし人々（全一冊）昇曙夢氏譯
定價貳圓五拾錢・送料拾貳錢

■罪と罰（全二冊）中村白葉氏譯
價各貳圓・送料各拾錢

■白痴（全二冊）米川正夫氏譯
價各貳圓五拾錢・送料各拾貳錢

■貧しき人々（全一冊）原久一郎氏譯
定價貳圓五拾錢・送料拾貳錢（近刊）

■青年（全二冊）米川正夫氏譯
價各貳圓五拾錢・送料各拾貳錢（下卷近刊）

露國新作家の名篇

■小說 **イスカリオテのユダ** アンドレエフ 米川正夫氏譯

キリストを賣れる叛逆者ユダ、三千年の世界の呪を一身に集むる叛逆者ユダを地下に起して、その寃を愬へしめたものである。題目既に奇、而もうちに深刻なる心理の解剖あり、更に裏附くるに深遠なる人生的意義を以てしてゐる。近代文學の鬼才アンドレエフの作中最も異色ある名篇。

■小說 **イワン・ダ・マリヤ** ビリニャーク作 尾瀨敬止氏譯

此の小說の中に展開する幾多の情景は、赤裸々な勞農露西亞の姿である。革命の生きた繪卷物が、皮肉に、陰慘に、輕妙に、深刻に、畸形的に描かれて、而も全篇の底には刻々に動き行く世界が、渾然として融合してゐる。作者の代表作であつて、新興文學の異色ある藝術を示す名篇でもある。

■小說 **彼等が生活の一年** ビリニャーク作 平岡雅英氏譯

動物の世界をさながらに人間の上に移した『彼等が生活の一年』は、猛獸の生活を取扱つた『谷の上』と共に、一九一五年の作で、作者の代表的傑作であるが、之と並んで『白泉院ニコーヲ寺のほとりにて』、『苦蓬』、『アリーナ』の如き革命後の作にも、その特色が最も鮮かに現はれてゐる。

新四六判紙裝・百六十頁・各册價六拾錢・送料各六錢

英國 ボグダノフ著　大宅壯一氏譯

■社會小說叢書（1）

赤い星

新四六判紙裝
紙數三百頁
定價壹圓參拾錢
送料六錢

藝術と社會科學と自然科學とが完全に調和して人類の未來を奏でる素晴しい管絃樂である

マルクスの流れを汲む經濟學者で、勞農ロシヤの經濟委員長であつたボグダノフが書いたユートピア『赤い星』は、果してどんなものだらうか。話は全世界を震駭させた露國革命の勃發と共に始まる。主人公はインテリゲンチヤから革命運動に身を投じて衆望を一身に集めてゐる勇敢なる青年闘士である。彼はどんな經路を辿つて地球の兄星たる「赤い星」即ち完全に社會主義化した火星に赴き、其處で何を見聞し、どんな失敗を演じたか。次から次へと奇想天外的な事件を展開させて行く作者の驚くべき豐富な想像力と、多方面に亙つて正確な科學的知識と、寸分の隙も見せない創作的手腕とは、唯々驚嘆する外はない。そして此物語全體を貫いてゐる思想は、新しい生活に對する激しい憧憬と、舊い世界の烙印から逃れようとする血の出るやうな苦惱とである。

364
971

終